村川西洋史教程

（中學校用）

42994
教科書文庫
4
230
41-1943
20000
73477

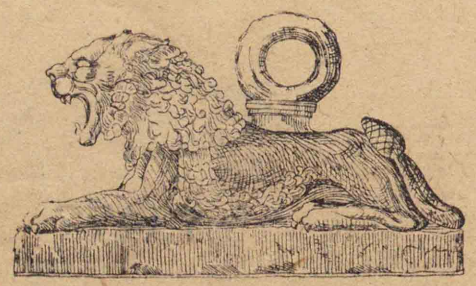
昭和十八年七月二十七日　文部省檢定濟　中學校歷史科用

教科書文庫
4
230
41-1943
2000073477

資料室

西洋史教程

文學博士
村川堅固著



広島大学図書
2000073477

42
230
昭18

緒言

本書は本年三月文部省から發布された新要目に則り、中學校の西洋史教科書に充つるために、大要次の方針を以て著作したものである。

1　外國歴史科の新要目が、日本の國民教育のためのものとしての特色を、從來より一層明らかにしたるに鑑み、生徒をして西洋史を通じて、我國の特異性を確認させ、我國の使命を自覺させ、國民的信念を鞏固ならしむるに意を用ひた。

2　新要目は唯、大綱とその主眼内容とを掲ぐるに留めてあるから著者は自ら最善と信ずる所により章節を別ち、大綱の趣旨に副はんことを努めた。

3　歴史は無限に伸び、教材は年々增す一方であるから、限られた授業時間内に、太古から現代までを說き終るには、教科書の著作も餘程工夫を要するが、之がために上古を簡單にし、近世に至るに從ひ詳述するのは、現代を理會させるために當然であるから、全紙數の約半分を最近の一世紀半に費やした。然し之がために上古の部を極端に壓縮することは、著者の取らざる所である。それは西洋文化が、上古に於てその基礎ができ、本質が定まり、現代の西洋文化も尙ほその基

広島大学
教
73477
図書

礎の上に、その本質を保つて、活きてゐるからである。

4　實際の授業に於て、古い時代に多くの時間を費やし、近世に進む頃は、時間が不足するのは、往々見る所の弊害である。本書は一時間平均三頁乃至四頁を課すれば、規定の時間内に、優に全卷を授け得るやうにした。然し頁數に捉はれて授業が機械的となることは極力避くべく、唯、大體の目安をそこに置いて、適宜進行を圖るべきである。

5　各編の終りに、その時代に關する地圖を纒め、裏面に對照年表を掲げた。地圖は本文を說く際に生徒をして個々を參照させる外に、地圖だけを比較對照させて、先づ諸國盛衰興亡の大體の觀念を得させ、次に別著『摘要西洋史地圖』を讀ませて、自習的に一層知識を精確にせしめられたい。

6　著者は明治四十年始めて中等西洋歷史を出だし、爾來昭和八年までの間に九回改訂を重ねたが、今回は時勢の進運と、新要目の精神とに鑑み、盡く舊稿を棄てて、全部新に起稿したことを玆に附言して大方の批評を仰ぐ。

昭和十二年七月

著　者

目次

序說　西洋史の意義……一頁

第一編　上古

第一章　西洋文化の黎明

1　太古東方諸國の興亡……五
2　太古東方民族の文化……九

第二章　ギリシヤ

1　ギリシヤ民族と都市國家……一三
2　ギリシヤの外患と內憂……一六
3　アレクサンドル大王　ヘレニズム……二〇
4　ギリシヤの文化……二五

第三章　ローマ

1　ローマの興隆……二六
2　共和政末期のローマ……三二
3　ローマ帝國の盛衰……三五

4 ローマの文化　キリスト教……三九

第二編　中古

第一章　民族の大移動

1 ゲルマニヤ民族の移動と建國……四三
2 サラセンの勃興とその文化……四五
3 ローマ法皇とフランク國……四九
4 ノルマンの活躍……五三

第二章　中古のヨーロッパ

1 キリスト教會の勢力……五五
2 封建制度とその社會……五八

第三章　十字軍とその影響……六一

第四章　中古末期の變動……六五

第三編　近古

第一章　新氣運の發動

1 文藝復興……七一
2 地理上の發見……七三

第二章　宗教改革とその影響

1 宗教改革……七七
2 宗教的政治的紛爭……八三

第三章　近代諸國家の發達

1 イングランドの興隆……八九
2 フランスの强盛……九五
3 ロシヤの興隆……九九
4 プロシヤの興隆　ポーランドの分割……一〇三

第四章　西歐諸國の植民地經營……一〇七

第五章　アメリカ合衆國の獨立……一一〇

第六章　近古の文化……一一三

第四編　近世

第一章　フランス大革命……一一九

第二章　ナポレオンとその時代……一二四

第三章　自由主義及び國民主義の發展

1 反動政治とその破綻……二三四
2 フランスの動搖とその後の隆盛……一三九
3 イギリスの內治外交……一四五
4 イタリヤの統一……一四九
5 ドイツの統一……一五二
第四章 アメリカ合衆國の發展……一五八
第五章 露土戰役とロシヤの國情……一六一
第六章 近世文化の進步……一六五
第七章 列强の世界政策……一七一
1 アフリカ分割……一七二
2 アジヤ侵略……一七五
3 太平洋進出……一七九
第五編 現代
第一章 世界大戰……一八三
1 大戰前の歐洲……一八三
2 大戰の勃發及びその經過……一八九
3 大戰の終局……一九九
第二章 大戰後の世界情勢……二〇二
1 大戰後列國の情勢……二〇二
2 最近の國際政局……二一一
3 最近文化の趨勢……二一八
結語 西洋史上より觀たる我國の使命と國民の覺悟……二二一

地圖及年表

A 上古……（附）上古主要國興亡圖……四一——四三
B 中古……（附）中古主要國興亡並王統變更圖……七〇——七一
C 近古（上）……（附）近古主要國興亡並王統變更圖……八八——八九
D 近古（下）……一八一——一九一
E 近世（上）……（附）近世主要國王統並政體變更圖……一三四——一三五
F 近世（下）……一八二——一八三
G 現代……卷尾

西洋史教程

序說　西洋史の意義

時間的領域
地域的領域の擴大

西洋史の領域は、時間的には過去約五千年に亙るが、地域的には、太古西南アジヤと北アフリカの一角とから起り、次に地中海沿岸を包み、更にヨーロッパに擴がり、その後ヨーロッパが西洋史の中心となつたが、約四百年前からは、その領域はアジヤの南部と北部とにも及び、他方大西洋を越えて、南北アメリカ兩大陸に發展し、十九世紀以後はアフリカの內地や大洋洲も皆その範圍に入り、今や歐米を中心として、世界の隅々までも及んでゐる。

インド＝ヨーロッパ種諸民族

西洋史上の主要民族は、時代によつて異るが、インド・ヨーロッパ種（一にアリヤン種ともいふ）Indo-Europeans に屬するものが最も多い。即ちヨーロッパ文化の基礎を作つたギリシヤ人や、その文化を承けついで、之を地中海沿

セム種諸民族

白人と有色人

岸及び西ヨーロッパの大部分を含む大帝國内に普及させたローマ人や、更にまたローマを滅ぼしたゲルマニヤ人や、始めて廣く東西洋に雄飛したポルトガル人、イスパニヤ人や、近代國家を發達させて、今日世界に優越を誇る歐米諸國民〔イギリス人、米國人、フランス人、ドイツ人、イタリヤ人、ロシヤ人等〕等は、いづれもインド・ヨーロッパ種に屬する。この種以外ではセム種(Semitics)からも重要な諸民族が出た。即ちエジプト人と同じく、世界最古の文化を作つたバビロニヤ人や、ユダヤ教を創めたユダヤ人や、イスラム教を起したアラビヤ人等、いづれもセム種である。今日歐米の諸民族は通常白人と總稱される。(註) これに對して我等日本人や支那人を始め、アジヤ、アメリカ、アフリカ等の本來の諸民族は有色人と呼ばれる。

白人の勢力 現在世界の總人口約二十億の中、白人の數はその約三分の一に過ぎないが、その支配する陸地は世界陸地の約七分の六に及んでゐる。又その物質文化の力は世界各地に及んでゐる。即ち政治的にも、文化的にも、白人が世界に優越權をもち、有色人がその下

(註) 白人と有色人との區別は學問的には定めにくい。元來インド＝ヨーロッパ種であるインド人や、セム種の子孫であるアラビヤ人も、皮膚の色から有色人の中に含められる。

白人の世界的優越權

に雌伏してゐることは、否めない事實である。(註) 然らば彼等白人の文化は如何にして發展したか。彼等白人は如何にして今日の優越權を築き上げたか。これを我等に教へるのが西洋史である。それで我等は西洋史を學んで始めて現代世界を正しく認識し、我等日本國民の進むべき道を明らかに發見することができる。

白人の世界的優勢

白人の領土又は白人の勢力圏

國史、東洋史と西洋史 我等は國史を學んで、我が國體の世界に冠絶せること、我が國民が祖先以來歴代皇室の御仁慈に浴し來つたこと、國難に際しては一死奉公の誠を致して之を克服したこと、外國文化を攝取醇化して、國運を發展せしめたことを知つた。我等は又東洋史を學んで、東洋文化發展の跡を辿り、東洋諸國の治亂興亡を知り、

(註) 世界全體から觀れば、かう言ふ外はない。有色人中我日本人だけは例外で、近年は日本の躍進に白人も危惧するに至つた。然し日本の今日の發展は、明治以來急速に西洋文化を取り入れたことに由る所も大なることを忘れてはならぬ。

現代に於ける日本以外東洋諸國の不振の由來を知つた。今や進んで西洋史を學び、これを國史、東洋史と對比すれば、益〻深く我が國體の優秀無比なるを悟ると共に、現代世界の情勢の由つて來る所を知つて、我が國の使命が如何に重大なるか、之が遂行に伴ふ困難の如何に大なるべきかを感じ、必ずや奮發努力これを突破するの覺悟をなさずにはゐられないであらう。西洋史學習の意義はそこに在る。

注意

以下本文の上方欄外に記入せるA①A②……は、その下にある各節と參照すべき本書折込地圖の番號。

下方欄外に記入せる1-2,(1)1-2,(2)……は、その上の各節と參照すべき別著『摘要西洋史地圖』の頁及びその頁内の圖の番號である。

文化曙光の發生

第一編　上古

第一章　西洋文化の黎明

1　太古東方諸國の興亡

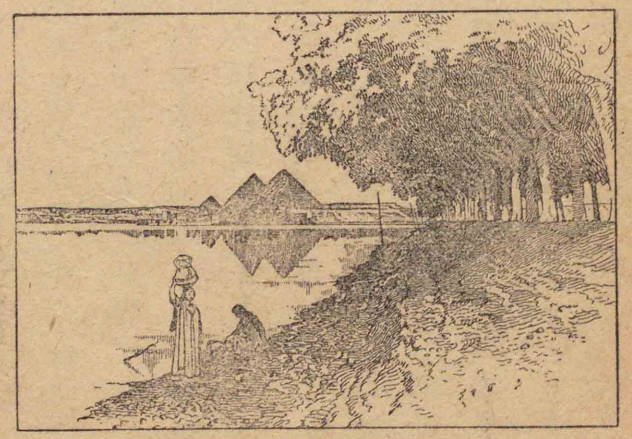
西洋文化の淵源　現今世界に最も勢力を振へる西洋文化の中心は歐米諸國にあつて、他の大陸の諸民族は、日本人以外多くは歐米諸國に重壓されてゐる。然し西洋文化は歐米から起つたのではなく、西洋人の謂はゆる東方地方(Orient)の一部であるアフリカの一角エジプト(Egypt)と、西南アジヤのバビロニヤ(Babylonia)地方にその

兩地方の氣候風土 A①

源を發した。米大陸は固よりのこと、歐洲もまだ全く未開情態に在つた頃、即ち今から五六千年も前に、これ等兩地方は早くも文化の光に照されて居たのである。

上古エジプトの農業

これ等兩地方は、共に氣候暖く、エジプトはナイル河の年々の定期氾濫で土地自然に肥え、又バビロニヤもチグリス、エウフラテス兩河の增水の利用で、共に穀物豐熟し、生活容易なため人口早く殖え、世界最古の文明が起り、政治的統一も亦最も早かつた。



ナイル河氾濫季のエジプト*

*ナイル河谷は一面水に覆はれて湖水のやうになり、彼岸にはピラミッドが逆さに影を水に投げて居る。

エジプトの統一 A①

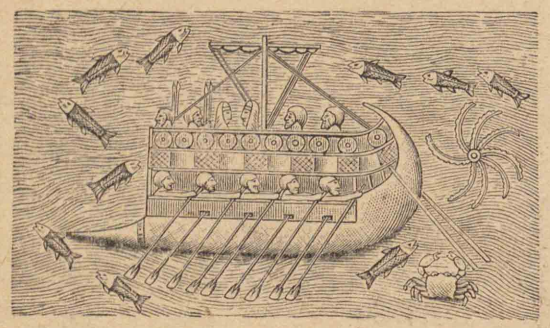
バビロニヤの統一

ヘブライ

フェニキヤ

エジプトとバビロニヤとの興起 エジプトは今より約五千年前に統一が成り、のち紀元前十五世紀頃國勢最も振ひ、一時はアジヤのシリヤ地方まで其の勢力に服した。バビロニヤでもエジプトに劣らず古く多數の國家ができ、今より約四千年前にはバビロニヤ王國に統一された。

フェニキヤの軍艦



ヘブライとフェニキヤ エジプト、バビロニヤ兩國の間に介在せる諸民族中にヘブライ人(Hebrews)とフェニキヤ人(Phoenicians)とがあつた。ヘブライ人はパレスチナ地方(Palestine)に國を建て、紀元前十世紀頃國勢最も振つたが、後イスラエル(Israel)とユダヤ(Judaea)の二國に分れて抗爭し、次第に衰へた。

フェニキヤ人はヘブライ人の北、即ちシリヤ(Syria)の地中海岸にゐた。この地方は土地が狹くて且つ瘠せてをり、農業に適しないので、住民は航海商業に從事し、そ

アッシリヤの興起

その滅亡

太古東方諸國興亡表

エジプト（前六七〇亡ぶ）
バビロニヤ（前八世紀亡ぶ）
ヘブライ（イスラエル）（前七二二亡ぶ）
フェニキヤ（前八世紀亡ぶ）

アッシリヤ（前六〇六亡ぶ）

エジプト（前五二五亡ぶ）
メヂヤ（前五五〇亡ぶ）
新バビロニヤ（前五三八亡ぶ）
リヂヤ（前五四六亡ぶ）

ペルシヤ（前三三〇亡ぶ）

アッシリヤの興亡　以上四國民並立の形勢は、アッシリヤ（Assyria）人はバビロニヤ人と同人種で、チグリス河の上流に居たが、武勇で戰を好み、紀元前十五世紀頃バビロニヤから獨立し、同八世紀の半に之を滅ぼし、遂にフェニキヤ、イスラエル、エジプト諸國をも征服して、西洋史上最初の大帝國を建てた。然しアッシリヤ人は性質殘忍で征服した民族を治め得ず、叛亂が絶えなかつた。それに北狄に侵されたので、國勢次第に衰へ、紀元前六〇六年遂に滅んだ。

の都市は之によつて榮えた。

*例一の忍殘人ヤリシッア

*アッシリヤ王宮浮彫の一部を寫す。舌に絲をつけて動かれないやうにし槍で眼を突いてゐる。

エジプト文化の遺物

世界最古の文化を創造したエジプトは、五千年後の現今まで其の文化遺物の豐富な點に於ても世界その比を見ない。これはその宏壯雄大な宗教的營造物が堅牢な石材を以て極めて安定よく築竝せられたことや、生前生活に用ひた品を、死後副葬する習慣があつたことや、その氣候風土が有機物までも腐敗せずに保存させるのに適したこと等種々の原因によるのである。それで現在普ねく知られて居る遺物だけでも、大はピラミッド、石造神殿、オベリスク等から、小は家具、裝身具、布片、食品等に至るまで、その量も種類も、驚くべき數に達し、茲に掲ぐるのは、眞にその一斑に過ぎない。

(1) ピラミッド

ピラミッドは上古エジプト王の墳墓で、皆ナイル河の左岸に在る。此の圖に示すのは、現存する七十個中の最大なものでクフ（Khufu）といふ王の墓。四十立方尺許りの石灰石二百餘萬個を積んで造つたもの。現在の高さ七十六間、傾斜面の長さ九十五間餘。正方形の底は一萬六千四百餘坪を覆ふてゐる。

(2) 大スフインクス

クフのピラミッドの附近にある沙漠中の生え抜きの岩を削つて作つた人頭獅身の巨像。四千年前の作。顏は王を表はし、それに獅身を附けたのは、王の威力が、獸王獅子のやうに強いことを表はすかと考へられる。高さ十一間、顏の幅一丈三尺七寸。

(3) ルクソルのアモン神殿

エジプトには古石造神殿の崩れたのが、多數に遺つてゐる。この圖は紀元前十六世紀以後の都テーベ（Thebae, Thebes）の附近、今のルクソル（Luxor）にあつたアモン（Amon）神殿の廢墟に基づいて作つた復原圖である。右方の高い石壁の中央が入口、左端が神體を安置した奥殿。全體の形が細長いのは歴代の王が前方に增築した結果である。

(4) オベリスク

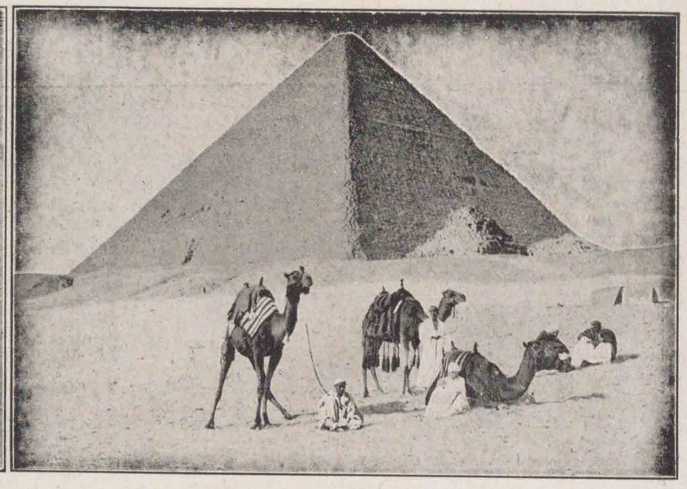
エジプト神殿の正面にある高い石壁の前に建てられた左右一對の大石柱。ルクソル神殿のは(2)で分る。一塊の石で作り、高いのは百五十尺にも及ぶ。この圖は古のテーベの址、今のカルナク（Karnak）のアモン神殿の廢墟に、今も尚ほ聳えてゐるのを寫したものである。

プト諸國をも征服して、西洋史上最初の大帝國を建てた。然しアッシリヤ人は性質殘忍で征服した民族を治め得ず、叛亂が絶えなかつた。それに北狄に侵されたので、國勢次第に衰へ、紀元前六〇六年遂に滅んだ。

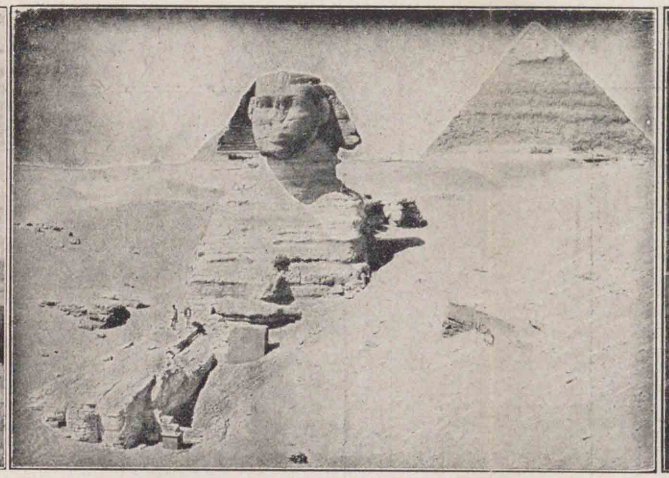
に之を滅ぼし、遂にフェニキヤ、イスラエル、エジ

エジプトの遺物

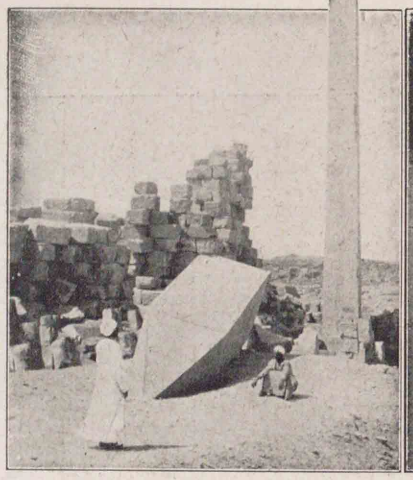
(1) ドッミラピのフク



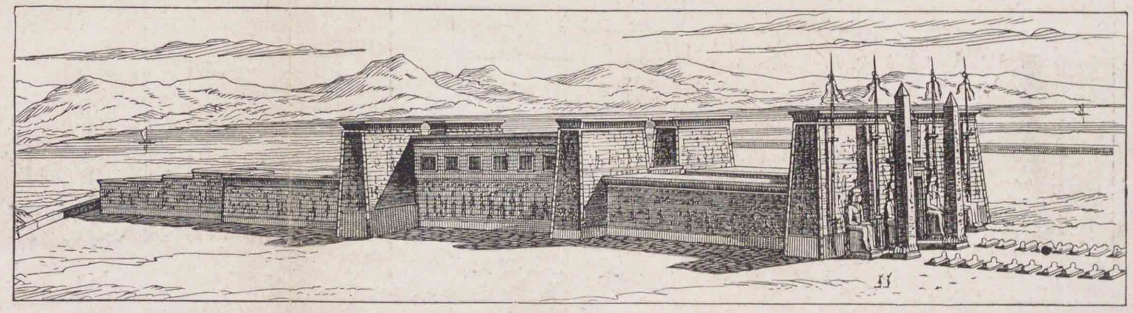
(2) スクンィフス大



(4) オベスリク

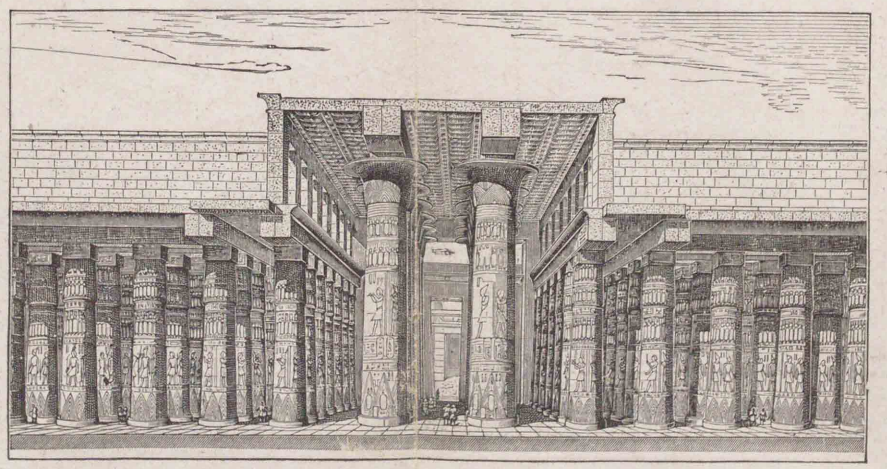


(3) ルクソンのアモン神殿復原圖

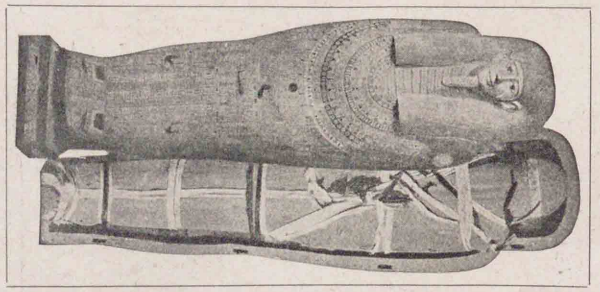


(5) カルナクのアモン神殿大圓柱殿の現狀

(6) カルナクのアモン神殿大圓柱殿復原圖



(7) ミイラの木棺



(8) セチ一世のミイラ

ダリウス一

ペルシヤの統一 アッシリヤが亡びて後、その舊領地には新バビロニヤ、メヂヤ、エジプト、リヂヤ(Lydia)の四國が對立したが、紀元前六世紀の中頃メヂヤの南方からペルシヤ(Persia)が起つて、メヂヤを初め他の諸國をも

*ペルシヤのベヒスタンの岩に刻してある圖を

エジプト文化の遺物

世界最古の文化を創造したエジプトは、五千年後の現今まで其の文化遺物の豐富な點に於ても世界その比を見ない。これはその宏壯雄大な宗教的營造物が堅牢な石材を以て極めて安定よく築所せられたことや、生前生活に用ひた品を、死後副葬する習慣があつたことや、その氣候風土が有機物までも腐敗せずに保存させるのに適したこと等種々の原因によるのである。それで現在普ねく知られて居る遺物だけでも、大はピラミッド、石造神殿、オベリスク等から、小は家具、裝身具、布片、食品等に至るまで、その量も種類も、驚くべき數に達し、茲に掲ぐるのは、眞にその一斑に過ぎない。

(1) ピラミッド

ピラミッドは上古エジプト王の墳墓で、皆ナイル河の左岸に在る。此の圖に示すのは、現存する七十個中の最大なものでクフ(Khufu)といふ王の墓。四十立方尺許りの石灰石二百餘萬個を積んで造つたもの。現在の高さ七十六間、傾斜面の長さ九十五間餘。正方形の底は一萬六千四百餘坪を覆ふてゐる。

(2) 大スフインクス

クフのピラミッドの附近にある沙漠中の生え抜きの岩を削つて作つた人頭獅身の巨像。四千年前の作。顔は王を表はし、それに獅身を附けたのは、王の威力が、獸王獅子のやうに強いことを表はすかと考へられる。高さ十一間、顔の幅一丈三尺七寸。

(3) ルクソルのアモン神殿

エジプトには古石造神殿の崩れたのが、多數に遺つてゐる。この圖は紀元前十六世紀以後の都テーベ(Thebae, Thebes)の附近、今のルクソル(Luxor)にあつたアモン(Amon)神殿の廢墟に基づいて作つた復原圖である。右方の高い石壁の中央が入口、左端が神體を安置した奥殿。全體の形が細長いのは歴代の王が前方に增築した結果である。

(4) オベリスク

エジプト神殿の正面にある高い石壁の前に建てられた左右一對の大石柱。ルクソル神殿のは(3)で分る。一塊の石で作り、高いのは百五十尺にも及ぶ。この圖は古のテーベの址、今のカルナク(Karnak)のアモン神殿の廢墟に、今も尚ほ聳えてゐるのを寫したものである。

(5) カルナク大圓柱殿現狀

古エジプト神殿中、テーベのアモン神殿が最大であつた。その一部に通常大圓柱殿と呼ばれる巨室があつて、百三十四本の石の大圓柱が竝び立ち、何れも緻密な彫刻と着彩が施された。次の復原圖の中央に居る人間との比較で、柱の太さは想像できよう。

(6) 右の復原圖

(5)の現狀に基づいて作つた大圓柱殿原狀の縱斷面である。即ち正面中央の二列の圓柱が最も高く且つ太く、左右のものは細く且つ短い。列の間隔も中央の通路が最も廣い。崩壞した現在でも、その偉大さに打たれる。況んや屋根から天井まで皆具つて、石柱の五彩鮮やかだつた當時の壯觀は想像に餘るのである。

(7) ミイラの木棺

死體を保存して他日靈魂の復歸を待ち更生させるため、上古のエジプト人は死體を防腐液に漬けた後之を乾かし、布で幾重にも卷いてミイラにした。之を人間の形に刳り拔いだ木棺に入れ、それを更に長方形の木棺に入れて葬つた。

(8) セチ一世のミイラ

木棺の蓋を去り、布で卷いたミイラを取り出し、更に布を取り去れば、此の圖の如く乾燥せる太古のエジプト人を、目のあたり見ることができる。固より肉は骨に膨着してゐるが、毛髮は原のままなものが多い。驚くべき壯大なる建築を行ひ、又は度々の戰爭に敵を破つた古王の面影が、死體によつて偲ばれるのは唯エジプトだけである。この寫眞のセチ(Seti)一世はエジプト盛時の王の一人で、今から三千餘年前の人である。

(5) カルナク大圓柱殿現狀

古エジプト神殿中、テーベのアモン神殿が最大であつた。その一部に通常大圓柱殿と呼ばれる巨室があつて、百三十四本の石の大圓柱が竝び立ち、何れも緻密な彫刻と着彩が施された。次の復原圖の中央に居る人間との比較で、柱の太さは想像できよう。

(6) 右の復原圖

(5)の現狀に基づいて作つた大圓柱殿原狀の縱斷面である。即ち正面中央の二列の圓柱が最も高く且つ太く、左右のものは細く且つ短い。列の間隔も中央の通路が最も廣い。崩壞した現在でも、その偉大さに打たれる。況んや屋根から天井まで皆具つて、石柱の五彩鮮やかだつた當時の壯觀は想像に餘るのである。

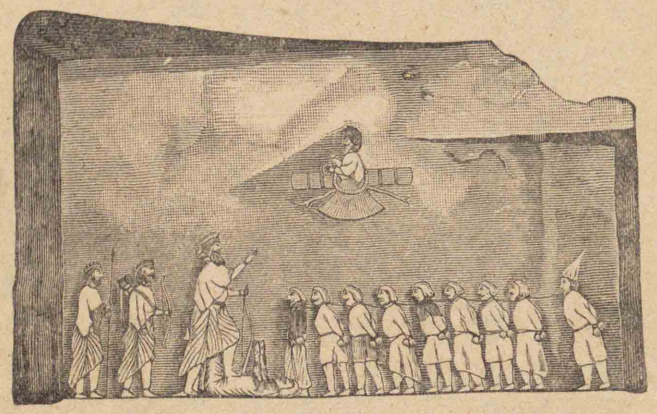
(7) ミイラの木棺

死體を保存して他日靈魂の復歸を待ち更生させるため、上古のエジプト人は死體を防腐液に漬けた後之を乾かし、布で幾重にも卷いてミイラにした。之を人間の形に刳り拔いた木棺に入れ、それを更に長方形の木棺に入れて葬つた。

(8) セチ一世のミイラ

木棺の蓋を去り、布で卷いたミイラを取り出し、更に布を取り去れば、此の圖の如く乾燥せる太古のエジプト人を、目のあたり見ることができる。固より肉は骨に膠着してゐるが、毛髮は原のままなものが多い。驚くべき壯大なる建築を行ひ、又は度々の戰爭に敵を破つた古王の面影が、死體によつて偲ばれるのは唯エジプトだけである。この寫眞のセチ(Seti)一世はエジプト盛時の王の一人で、今から三千餘年前の人である。

ダリウス一世の捕虜引見*



ペルシヤの統一　アッシリヤが亡びて後、その舊領地には新バビロニヤ、メヂヤ(Media)、エジプト、リヂヤ(Lydia)の四國が對立したが、紀元前六世紀の中頃メヂヤの南方からペルシヤ(Persia)が起つて、メヂヤを初め他の諸國をも順次に滅ぼし、王ダリウス一世(Darius)の時に至り、益々其の領土を擴め、アジヤ、アフリカ、ヨーロッパに跨がる空前の大帝國を建てた。この王は經世の才に富み、公道を開いて交通を便にし、內亂外寇に備へ、大帝國の統一を鞏固にした。

2　太古東方民族の文化

エジプト人　諸國太古の文化で多く見るやうに、エジプト人の文化も

*ペルシヤのベヒスタンの岩に刻してある圖を模寫せるもの。

多神教を中心としたもので、太陽を至上神とし、專制の王を是に比定して崇め、又靈魂の不滅を信じ、屍體をミイラ(Mummy)として保存する風があり、之がため解剖學、醫學の知識を得た。又墳墓を堅牢にしてミイラの保存を圖つた。かの大ピラミッド(Pyramid)は王の墳墓である。天文にも通じて太陽曆を用ひ、又早く象形の表音文字を發明した。其の他建築や彫刻等の技術も進み、宏壯な石造神殿やオベリスク(Obelisk)、スフィンクス(Sphinx)等が今も尚ほ多く遺つて居る。

バビロニヤ人 天體を崇拜して天文に通じた。石材が無いため、早く煉瓦の製造を發明して、王宮や神殿を營造し、又楔狀(Cuneiform)文字を發明して之を粘土に刻して燒きつけたのが多く遺つてゐる。又數の十二進法を創めて、今尚ほ世界に行はれてゐる。

一晝夜を二十四時間、一時間を六十分、一分を六十秒、圓の周圍を三百六十度に分つなどは皆十二進法の遺風である。楔狀文字はバビロニヤの亡びた後も久しく用ひられた。

エジプト表音文字

Ptolemy

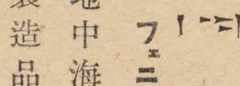
Cleopatra

バビロニヤの文化

アッシリヤやペルシヤも此の文字を用ひた。

ヘブライ人 は多神教徒の間に介在しながら、獨り一神教を奉じ、イェホヴァ(Jehova)神の選民たることを信じて排外心が強かつた。之がため異教徒から忌まれて屢〻迫害されたが、遂にその信仰を棄てず、後にキリスト教の起る基をなした。

楔形文字



Nabopolassar

ヘブライ人の宗教

フェニキヤ人 は貿易によつて立つた。その商船は地中海から遠く大西洋岸に出で、盛に東方文明國の製造品を輸送して、其の文明を地中海岸に傳播したばかりでなく、通商の必要から作つた簡單な表音文字は、今のローマ字の基となり、それが西洋文化の上に貢獻したことは甚だ大である。

フェニキヤ人の貿易

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
ᚲ	A	A	A	A
ᚹ	S	B	B	B
ᚠ	1	ᚴ	CG	C,G
ᚨ	Δ	Δ	D	D
ᚷ	ᚷ	ᚱ	E	E

＊ヘ字マーロらか字文ヤキニェフ

ペルシヤ人 はアッシリヤ人と異り、性質寛大で、征服民族を壓制せず、各〻自己の宗教や舊慣に從はせた。それで其の大領土内に各種の文化が榮えた。又貨幣や租稅の制度を

ペルシヤ人の統治

字文ヤキニェフ (1)
字文ヤシリギ期初 (2)
字文ヤシリギ期後 (3)
字文ンテラ (4)
字文スリギイ (5)

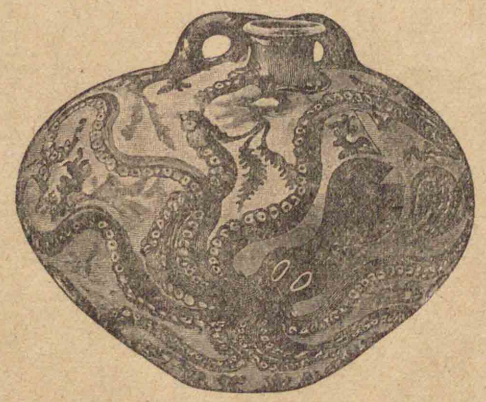
世界第二の古文化

定め、中央集權の實を擧げて大領土統治に新機軸を出した。

エーゲ文明 エジプトバビロニヤの文化に次いで古いのがエーゲ文明(Aegean Civilization)で、クレタ島(Creta)を中心とし、エーゲ海の沿岸及び諸島に弘まり、紀元前十八世紀から同十三世紀頃まで最も榮えた。それはエジプトやバビロニヤの文化に負ふ所も多いが、建築や、窯業などに獨自の驚くべき進歩を示し、初期のギリシヤ文化に少からず影響を與へた。

第二章　ギリシヤ

1　ギリシヤ民族と都市國家



エーゲ文明の遺物*

*右は蛇の女神と稱するもので象牙を彫刻して本體を作る。手を伸ばして持てる二疋の蛇は黃金製である。左は章魚の海中の動作を描いた瓶で、寫實の妙驚くべきもので、いづれもクレタから出た。

ギリシヤ人の南下

航海と植民

都市國家の分立

同國民の自覺

A ③

ギリシヤ民族 バルカン半島の南端にギリシヤ(Greece)があり、ヨーロッパ文化は、こゝから起つた。この地方の先住民族の一部はエーゲ文明に浴してゐたが、のち北方のギリシヤ人が南下して之を征服し、其の中のドーリヤ族(Dorians)は多くペロポネスス(Peloponnesus)に、イオニヤ族(Ionians)は中部ギリシヤの東部に據つた。

ギリシヤは平野が少く港灣に富み、近海には島嶼が甚だ多いので、ギリシヤ人はやがて航海に慣れ、早くから海外に出て商業を行ひ、又地中海沿岸に多くの植民市を建てたので、その分布は甚だ廣かつた。

ギリシヤ民族の團結 ギリシヤは山脈連亙して數多の小地方に分れ、且つ國民に個性發揮の精神が強かつたので、古代には全ギリシヤが統一したことなく、多くの都市が何れも獨立して都市國家をなし、その中の強盛なものが、こもごも覇權を揮つた。スパルタ(Sparta)や、アテネ(Athens (Athenae))がそれである。然し何れの國家も言語、宗教等が同じ系統に屬したから、同じ國民たる自覺をもち、共同してデルフィ(Delphi)の神殿をまもり、或はオ

5-6, (1)　3-4, (1)(2)

スパルタの國家主義教育

圓盤投手の像*

スパルタとアテネ ギリシヤの都市國家中、ドーリヤ族の建てたスパルタ市とイオニヤ族のアテネとが最も強く、且つ最も特色があつた。兩國とも初め先住民族を征服したギリシヤ人が貴族として特權をもち、被征服民を壓制したが、國情の相異から、遂に別途の發達をなし、相反せる國風を以て對立するやうになつた。

即ちスパルタでは征服者たるドーリヤ人の數が、被征服民に比して甚だ少なかつたので、之に對する自衛の必要上、スパルタ人は極端な國家主義教育を行ひ、國民生活を軍隊化した。男兒七歳になれば父母の膝下を去つて國家の教練所に入らせ、嚴格な規律の下に膽力を練り、身體を鍛はせ、飽くまで困苦に堪ふる武士となし、一朝事があれば直ちに出陣させた。從つて國風は最も質朴剛健を尊び、浮華文弱は飽くまで之を卑んだ。それで政治も長く貴族政治が行はれ、其の下で國力次第に伸び、紀元前七世紀の末頃には霸權をペロポネスス全半島に揮ふに至つた。之に反しイオニヤ族のアテネでは、夙に航海貿易が營まれ、商工業者が富を成して政權を望むやうになり、貴族政治は長く維持されず、紀元前六百年頃ソロン(Solon)といふ大政治家が出て、富の程度によつて政治上の權利義務を別つたが、貧民の不平に乘じ、獨裁權を得た僭主(Tyrant)の政治が起つた。然しそれも永續せず、紀元前六世紀の初めクリステネス

ギリシヤの重裝兵

オストラコン*

*上古ギリシヤ彫刻大家ミロン(Myron)の原作を寫したもの。オリンピック競技の勝利者の爲には、かゝる記念像が作られた。

*オストラシズムのために用ひた陶器の破片で、上にテミストクレスの名がある。

スパルタの國風とその發展

アテネの經濟的政治的發展

ギリシヤの兵船

民主政治

(Clisthenes)が出て民權を伸ばし、オストラシズム(Ostracism)といふ放逐法を設けて僭主の出るのを防ぎ、アテネの民主政治の基礎を確立した。アテネの國風は優雅を好み、學藝を重んじ、後の西洋文化の基礎を作つた。

2 ギリシヤの外患と内憂

戰役の起因

A ④

ペルシヤ戰役 小アジヤ沿岸にあつたギリシヤ人の植民市はペルシヤに征服されたが、ギリシヤ人は其の抑壓に堪へず、アテネ等の援を得て、獨立を圖つた(前五〇〇)。ペルシヤ王ダリウス一世は之を鎭めて、更にギリシヤ本土を討たんとし、ペルシヤ、ギリシヤの大衝突となつた。戰役は前後三回に及び第一回はペルシヤ軍失敗して引きかへし、第二回はアテネが獨力でペルシヤの大軍に當り、マラトン(Marathon)で之を擊退した。十年の後ダリウスについで立つた王ク

＊スウリダ王ヤシルペ

＊イタリヤ、ナポリ博物館にある古甕の面に描いてある。王が群臣とギリシヤ征討を議する圖の一部。

テルモピレーの戰

A ④

サラミスの海戰

デルス同盟

セルクセス(Xerxes)が、みづから大軍を率ゐて、海陸兩道からギリシヤに侵入した(前四八〇)。此の度はスパルタもアテネと聯合してこれに當り、スパルタ王レオニダス(Leonidas)は寡兵を以てテルモピレー(Thermopylae)の險で敵の大軍を引き受け、奮戰したが、力及ばず、將卒共に戰死を遂げた。ペルシヤ軍は勝に乘じてアテネに入り之を燒いた。然しその海軍はアテネのテミストクレス(Themistocles)の率ゆるギリシヤ艦隊のためサラミス(Salamis)灣で粉碎され、その陸軍も翌年亦敗れたので、ペルシヤはギリシヤ征服を思ひ切り、ギリシヤ軍は却つて攻勢に出た。特にアテネはエーゲ海沿岸諸市を糾合してデルス(Delus)同盟をつくり、同盟艦隊を以て屢〻ペルシヤ軍を破り、遂にペルシヤを屈せしめて、戰役を終局した。

テルモピレーでスパルタ軍が奮戰して盡く名譽の戰死を遂げた地には、記念碑が建てられた。その碑には『旅人よ、往いてラケダイモン(Lakedaimon)人に告げよ、祖國のために我等のこゝに眠れることを』といふ句が刻まれてゐた。ラケダイモンはスパルタの別名である。

ペリクレス

ペリクレス時代 ギリシヤがペルシヤ戰役の大國難を克服し得たのは、主としてアテネの力であつたから、戰後アテネの國威は大に振つた。偶〻大政治家ペリクレス(Pericles)が出て、飽くまで民主政治の形を重んじて國民を指導し、海軍を盛にし、學藝を奬め、又デルス同盟の資金を用ひて、大に建築を起した。それで市の外觀は一變し、文藝美術も亦大に興つた。實にアテネの最盛時代であり、同時にギリシヤ文化最高潮の時代であつた。

ギリシヤ文化の高潮

ペロポネスス戰役 スパルタはかねてアテネの隆盛を嫉んでゐたが、アテネが專横になり、同盟諸市の信頼を失つたのに乘じて之と開戰し、ギリシヤ全土の諸市その一方に黨し、二十七年間(前四三一—四〇四)に亙るペロポネスス戰役が起つた。(The Peloponnesian War) 結局アテネが敗れて、ギリシヤの覇權はスパルタに移つた。

戰役の起因

アテネの貨幣

アテネの教育*

此の戰役にアテネは得意の海軍で、スパルタはその陸軍で互に敵地を荒したが、ペリクレスがペストに斃れて後アテネは指導者を失ひ、黨爭がつゞいて次第に衰ろへた。スパルタはペルシヤの援助を得てアテネ艦隊を破り、遂にアテネを降服させ、その民主政治を廢しデルス同盟を解散させたので、アテネの覇權は全く失墜した。

スパルタ及びテーベの盛衰 その後スパルタは三十餘年間ギリ・シヤの覇權を握つたが、その壓制を怨む諸市は、ペルシヤの援を得て之に反抗し、そのためスパルタの勢が衰へた頃、中部ギリシヤのテーベ市に(Thebes (Thebae))エパミノンダス(Epaminondas)、ペロピダス(Pelopidas)の二名士が出て、スパルタを敗り、テーベが之に代つて一時覇權を握つたが、エパミノンダスが戰死すると共にテーベの覇權も亦破滅した。

*これはペリクレス時代の淺き鉢の周圍に描かれた圖で左方に七絃琴(Lyre)の教師が少年に、其の彈奏を教へ、右方には、卷物を舒べて、少年に讀書を教へてゐる。

マケドニヤの興起

A⑤

ケーロネヤの戰

マケドニヤの興起　かくギリシャの覇者が次々に衰へ、諸國が相爭つて共倒れになりかゝつては民族の末路であつた。偶〻北方のマケドニヤ(Macedonia)に英主フィリップ(Philip)が立ち、ギリシャの文物を輸入して國勢を振興し、ギリシャの内事に干渉した。アテネの雄辯家デモステネス(Demosthenes)は諸市を説いて同盟防禦を促がしたが、應ずる者少なかつた。フィリップはアテネ、テーベの聯合軍をケーロネヤ(Chaeronea)に撃破し(前三三八)、ギリシャの覇權を握つた。王はペルシャ遠征を企だてたがその準備中に暗殺された。

デモステネス

3　アレクサンドル大王　ヘレニズム

大王の遠征　マケドニヤ王フィリップの子アレクサンドル(Alexander)(大王)は不世出の英傑であつた。年僅に二十歲で位をつぎ、父王の志をつぎ、紀元前三三四年ペルシャ遠征の途に上り、先づ小アジヤを征服し、翌年イッスス(Issus)でペルシャ王と戰つて之を破り、シリヤ、エジプトを取り、ナイル河口にアレクサンドリヤ市(Alexandria)を建て、轉じてペルシヤに入り、再びペルシヤ王と戰つて大勝を得た。ペルシヤ王は逃走の途で暗殺されて、ペルシヤは茲に滅んだ(前三三〇)。大王は進んで印度の西方に攻入つた後、軍を二分し、海陸兩道からバビロ

アレクサンドル大王

ペルシヤ遠征

A⑤

アレクサンドル大王

ヤ遠征の途に上り、先づ小アジヤを征服し、翌年イッスス(Issus)でペルシヤ王と戰つて之を破り、シリヤ、エジプトを取り、ナイル河口にアレクサンドリヤ市(Alexandria)を建て、轉じてペルシヤに入り、再びペルシヤ王と戰つて大勝を得た。ペルシヤ王は逃走の途で暗殺されて、ペルシヤは茲に滅んだ(前三三〇)。大王は進んで印度の西方に攻入つた後、軍を二分し、海陸兩道からバビロ

イッススの戰*

*イタリヤ、ポンペイ廢墟より掘出し、現にナポリ博物館にある寄石細工の圖を寫したもの。圖の中央戰車に乘れるはダリウス、左隅馬上に槍を持てるはアレクサンドルである。

東西文化融合策

大王歿後の紛亂

帝國の分裂

シリヤ王のギリシヤ人移入

ンに凱旋し、ここを新に建つる大帝國の都と定めた。

大王の雄圖 大王はその征服した廣大な地に大帝國を建て、東西文化を融合する目的から、先づ人種の混合を圖り、自ら率先してアジヤの婦人と結婚し、將士も之に倣はせた。又各地にアレクサンドリヤ市を建てて、ギリシヤ人を移住させ、風俗や宗教も融和しようとしたが、その業のまだ完成しないうちに僅三十三歳で病歿した(前三二三)。

帝國の分裂 大王が歿したのち、部下の諸將が相爭ひ、戰爭二十二年に及んだが、結局大王の領土は分裂してエジプト、シリヤ、マケドニヤ等の獨立國となり、諸將及びその子孫が之に君臨した。中でもシリヤはその領土最も廣く、ペルシヤ舊領の大半を含んだが、のち東部はパルチヤ(Parthia)に、西部はマケドニヤ、ギリシヤと共にローマに取られた。

ヘレニズム アレクサンドル大王の大領土内に獨立した諸將は、大王の志をつぎ、東西文化の融合を圖つた。特にシリヤ王はギリシヤ人を歡迎移住させ、その文化をアジヤの内地深くまで入れ、その影響は

アレクサンドリヤの文化

ヘレニズム

西洋文化の基礎

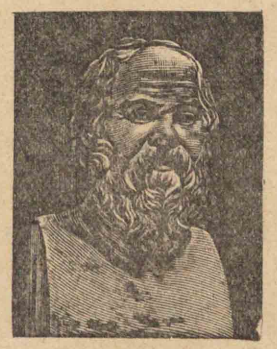
印度、支那に及び、多少我國にも達した。又エジプトのプトレメウス(Ptolemaeus)家の諸王は、首都アレクサンドリヤの地の利により、盛に貿易を興し、國を富まして學問の發達に努めた。それでギリシヤ文化は東方文化と融合して、世界的文化が成立した。これをヘレニズム(Hellenism)といふ。のちローマ人が之を受けて、その大領土に弘めた。

4 ギリシヤの文化

文化發展の原因 ギリシヤの文化は太古の東方文化を採り、之に新要素を加へ、獨創的發達を遂げたもので、西洋文化の本質を定め、その基礎となつた。思ふに①ギリシヤ人が優れた天分を有し、創造力に富んでゐたこと。②早くから東方先進諸國と交通し、その文化に接したこと。③數多の小國が分立競爭したこと。④勞役を奴隸にまかせ、市民は專ら力を

ホーマー

學問藝術の方面に用ひたこと。(5)ギリシヤが大理石に富み建築や彫刻等の好材料を供給したことなど、相待つて文學哲學、美術工藝等各方面の文化を大成させたのである。


ソクラテス

スレクオフソ

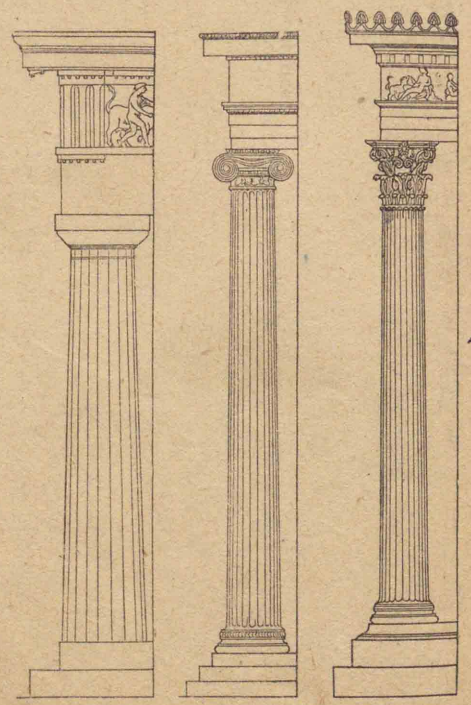
文學　は既に東方諸國に芽ばえたが、ギリシヤで大成し、詩聖ホーマー Homer は叙事詩の範を垂れ、又教訓詩や、抒情詩にも大家が現はれ、ペリクレス時代にはエスキルス Aeschylus、ソフォクレス Sophocles、エウリピデス Euripides の三大悲劇家が出、アリストファネス Aristophanes は喜劇で名を著はした。

學術　東方諸國民がすべて神意に歸した自然法則を以て説かんとし、そこから思想の新天地が開け、ギリシヤ

の學術が生れ、ギリシヤ文化の最も秀でた一方面となつた。**哲學**は先づ小アジヤから起つたが、後ペリクレス時代の末ソクラテス Socrates がアテネに出て、新生面を開き、その高弟のプラトー Plato とプラトーの門人アリストートル Aristotle と相次いで出でギリシヤ哲學を大成し、現今の西洋の哲學、科學の基を開いた。又ヘロドツス Herodotus やツキヂデス Thucydides 等が出て歴史を書いた

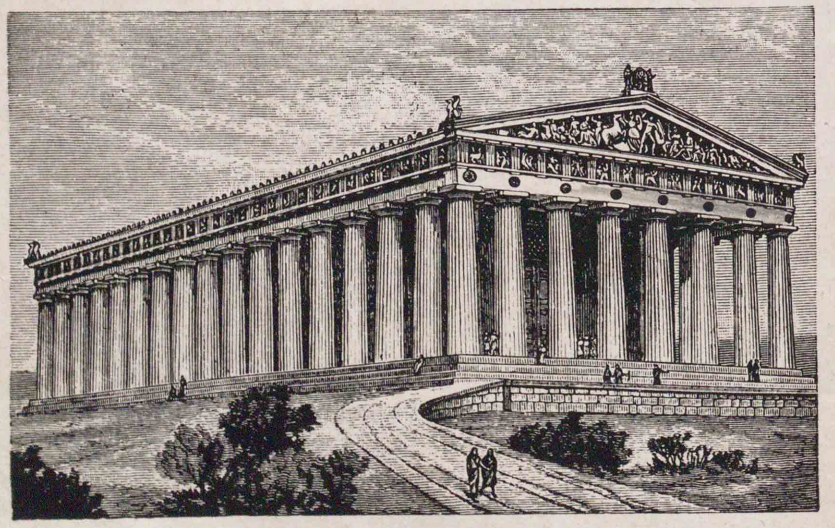
メロスのヴェヌス*

ギリシヤ圓柱の三樣式


式トンリコ　式ヤニオイ　式ヤリード

*エーゲ海中のメロス(Melos)島より出た美の神ヴェヌス(Venus)の像。其の端嚴優美は觀者を魅するものがある。

パルテノンの現狀



同上復原圖

ので、史學もギリシヤから起つた。

美術 ギリシヤの美術は調和と均整とに於て古今に獨歩してゐる。

建築

建築にはドーリヤ、イオニヤ、コリント(Corinth)の三樣式があり、ドーリヤ式は莊重、イオニヤ式は典雅、コリント式は纖巧なのを各〻その特色とする。

彫刻

ペリクレス時代にイクチヌス(Ictinus)の設計でできたパルテノン(Parthenon)の神殿が、ギリシヤ建築の極致と謂はれる。彫刻は人體美の表現に於て最もすぐれ、フィヂヤス(Phidias)、プラクシテレス(Praxiteles)等千古の大家が輩出した。

第三章 ローマ

1 ローマの興隆

ローマの原

A⑥

ローマの發展 東方にマケドニヤが興つた頃、西方のイタリヤ半島では、ローマが著々興隆して居つた。ローマはもと當時のイタリヤ諸民族中の一なるラテン人(Latins)などの建てた一小市に過ぎなかつたがローマ人は堅忍不拔の氣象を以て他の諸民族に當り、全イタリヤを征

パルテノンの現狀とその復原圖

アテネはギリシヤの文化を代表し、アテネの文化は市の中央から稍南によつたアクロポリス(Acropolis)の丘を中心として、發現した。アクロポリスは『高い都市』の義で、上古ギリシヤの各都市が之を有つてゐたが、アテネのが最も有名だつたから、單にアクロポリスといへば直ちにアテネのそれと解せられるやうになつた。その上には太古から市の守護女神たるアテナ(Athena)の神殿や、王の宮殿などがあつたが、ペルシヤ戰役の時敵に焚かれた。戰後ペリクレスが市の政治を指導するに及んで、アテナ神殿パルテノン(Parthenon)以下種々の建築を以て之を裝飾した。建築のイクチヌス(Ictinus)や、彫刻のフィヂヤス(Phidias)など、一流の藝術家が、當時新勝の意氣に燃え、神に對する感謝の念溢るる市民の心を體して、腕を揮つたので、ギリシヤ建築の極致がこゝに現はれ、全體の均整安定、各部の調和等一點の間然する所なきものができ上つた。

上の圖はパルテノンの廢墟の現狀、下のはそれに基づいて、建築史家の作つた復原圖である。屋根以外純白の大理石から成る長方形の建築で、前後に各八本、左右に各十七本のドーリヤ式圓柱が立ち、前後の破風や、四方の梁間などには、フィヂヤス及び其の一派の作つた彫刻が嵌められ、奥にはフィヂヤスの名作、象牙と黄金とで作られたアテナ女神像が安置せられた。今の廢墟を觀ても、當時の崇嚴さと、優麗さとが十分に想像される。

貴族と平民の爭

中部イタリヤ征服

Ⓐ⑥

南イタリヤ征服

征服地統御

服したるのち、遂に地中海沿岸全部を含む大帝國を建つるに至つた。

ローマの共和政 ローマの政治は初め王政であつたが、紀元前六世紀の末共和政となつた。しかし實權は貴族から成る元老會が握つてゐた。これがため平民との爭が久しく續いたが、貴族は次第に讓步して、紀元前三世紀の初めには、兩階級は政治上平等になつた。

ローマの重裝歩兵

イタリヤ征服 この爭の間にもローマ人は外敵には一致して當つたが、爭がやむと共にその發展目ざましく、エトルリヤ人(Etruscans)、サムニウム人(Samnites)を破つて中部イタリヤを平げ、進んで南部のギリシヤ植民市に迫つた。エピルス王ピルス(Pyrrhus)が來てギリシヤ植民市タレンツム(Tarentum)を援つたが、ローマ軍に破られて歸國し、ギリシヤの諸市相次いで降り(前二七二)、北方ガリヤ(Gallia)地方以外の半島は全くローマに服した。ローマは征服した諸市を區區に待遇して、共同反抗するを防ぎ、要地要地は屯田兵で抑へ、

軍路を開いて之を聯絡して巧に統御した。

ポエニ戰役　アフリカ北岸にあるフェニキヤ植民市カルタゴ(Carthago)は、その頃大海軍を擁して、西地中海の商權を握り、富み榮えてゐたが、もと農業國のローマが、イタリヤ征服と共に海上に進出して、商業的發展を圖るやうになつたので、之と衝突して謂はゆるポエニ(The Punic Wars)戰役が起つた(前二六四)。

ハンニバル

この戰役は百二十年に亙つて、前後三回行はれたが、結局カルタゴは全滅し、ローマが西地中海の霸權を握ることになつた。

ローマハソヒニ、ヲ

第一回(前二六四―二四一)　陸軍國ローマは急いで海軍を創設し、シシリー(Sicily)島周圍の海上で屢〻カルタゴの海軍を破つたので、カルタゴは遂に屈して、巨額の償金を拂ひ、又シシリー島を割讓してローマと和した。

第二回(前二一八―二〇一)　その後ローマはサルヂニヤ、コルシカ兩島を奪ひ、又北イタリヤを征服して次第にその領土を廣めた。カルタゴの英雄ハンニ

バル(Hannibal)は、その父のローマに對する復讐の志をつぎ、父のイスパニヤで養成した軍隊を以てローマに對して開戰した。ハンニバルは大軍を率ゐてイスパニヤから出發し、アルプスの嶮を突破し、イタリヤに侵入して、屢〻奇勝を得、特にカンネー(Cannae)の會戰では、寡兵を以てローマの大軍を擊破した。

スキピオ

ローマは一時危機に瀕したけれども、飽くまで屈せず、その將スキピオ(Scipio)はイスパニヤを征服し、轉じてカルタゴの本國を衝いた。そこでハンニバルは急いで歸國し、スキピオとザマ(Zama)で戰つたが大敗したので、カルタゴは遂に屈し、ローマにイスパニヤを割讓し、巨額の償金支拂を約し、軍艦を讓り、ローマの許可がなければ、外國と開戰しないことを約した。これでカルタゴはもはやローマへの對抗力を失つたのである。

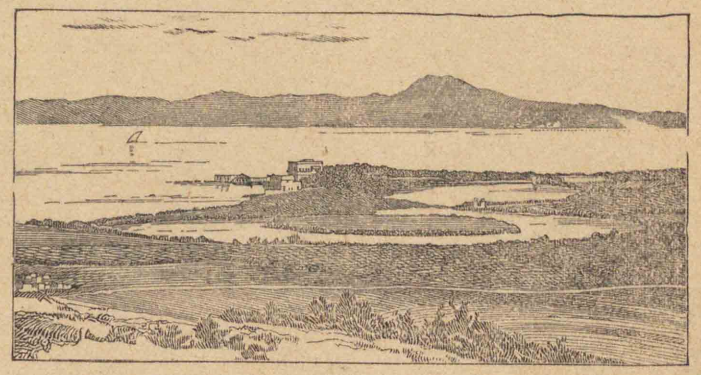
第三回(前一四九―一四六)　その後カルタゴは商業で繁榮を回復したので、ローマは後患を慮かり、カルタゴがその隣國ヌミヂヤ(Numidia)に對し、自衞的防禦戰をしたのを、條約違反として出兵し、カルタゴを圍んだ。カルタゴ人は老幼婦女まで防戰に努めたけれども、三年の後遂に陷つた。ローマは全市を

焦土としカルタゴは全く滅びた。

ポエニ戰役の意義

ポエニ戰役は一リヤイ種の雄ローマとセム種の代表カルタゴとの死活戰で、同時に兩種族文化の爭でもあつた。ローマがこれに捷つたので、ヘレニズム文化が永く西洋に傳はることになつた。從つてこの戰役の意義は甚だ重大である。

カルタゴの址*



マケドニヤとギリシヤ併合

東方經略 第二ポエニ戰役後、ローマは東方の經略に著手し、先づマケドニヤを伐つて、ギリシヤを獨立させ、シリヤと戰つて小アジヤを奪ひ、カルタゴ全滅と同じ年にマケドニヤとギリシヤとを併呑した(前一四六)。かくて紀元前二世紀の末には、ローマの領土は東は小アジヤから西はイスパニヤに及び、アフリカ北岸のカルタゴの舊領をも含み、地中海はローマの內海のやうになつた。

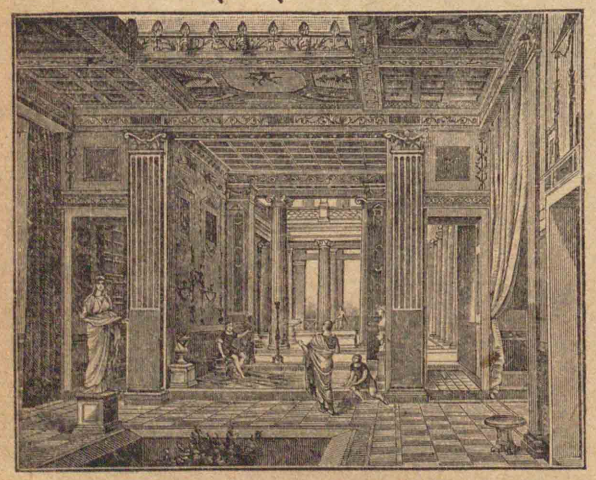
*前面の海はチュニス灣。海岸の池は、古のカルタゴの港の址。

ローマ古風の頽廢

▽ 2 共和政末期のローマ

社會の變動 外國征服の結果四方の富がローマに流入したので、古來の質實剛健の風が衰へ、國民精神が弛み、上流社會は奢侈に流れ、下層民は遊惰に走り、奴隸の使役と屬州からの廉價な穀物の輸入とのために失業者の增加と、小地主の沒落とを招き、富者は益〻富み、貧者は愈〻貧しくなり、國家の中堅階級が衰へ、貧富(閥族、平民)兩黨が反目して相爭ひ、國防も不安になつた。それで

貧富の爭



ローマ人住宅の一例

グラックス兄弟の改革

紀元前二世紀の後半、グラックス兄弟が相次いで起ち、土地所有額の制限や、いろ〳〵の改革を以て、貧民を救はうとしたが、何れも閥族に妨げられて死し、貧富兩黨の對立は依然として續いた。

武將の獨裁　その頃ローマは外夷の侵入に脅やかされたが、これを撃破した武將が貧富兩黨の首領となつて、交〻政權を獨占し、互に反對黨を殺戮し、內亂が續いた。

マリウスとスラとの抗爭

貧民(平民)黨にはマリウス(Marius)、富人(閥族)黨にはスラ(Sulla)が各〻その首領となつた。スラが初めローマの政權を得たが、小アジヤに出征中、マリウスが一時閥族黨を屠つて、主權を握つた。スラは凱旋後これに復讐して閥族の權を回復した。

第一回三頭政治

ケーザルの業

ポンペイウス

著々興隆して大國家となつたローマも、かく內訌がつゞき、大改造が行はれない限り、前途甚だ危うくなつた時、英雄ケーザル(Julius Caesar)が現はれ、平民黨の首領として、ポンペイウス(Pompeius)、クラッスス(Crassus)と共に三頭政治(Triumvirate)を建て(前六〇)、三人でローマの政權を

ケーザルのガリヤ征服

A⑦⑧

天下平定

握つた。

ポンペイウスは當時地中海に跋扈した海賊を平らげた後、シリヤを滅ぼしてローマの屬州を置き、その武名大に揚つたが、凱旋後、元老院がその東方處置を承認しないので、大に不平であつた。それでケーザルは之を味方に取り入れた。

ケーザル

ケーザルは先づアルプス山外のガリヤ(Gallia)(今のフランス地方)を征して大にローマの領土を廣め、又ローマ文化のこの方面に廣まる基を開くと共に、自己の兵力を養つた。

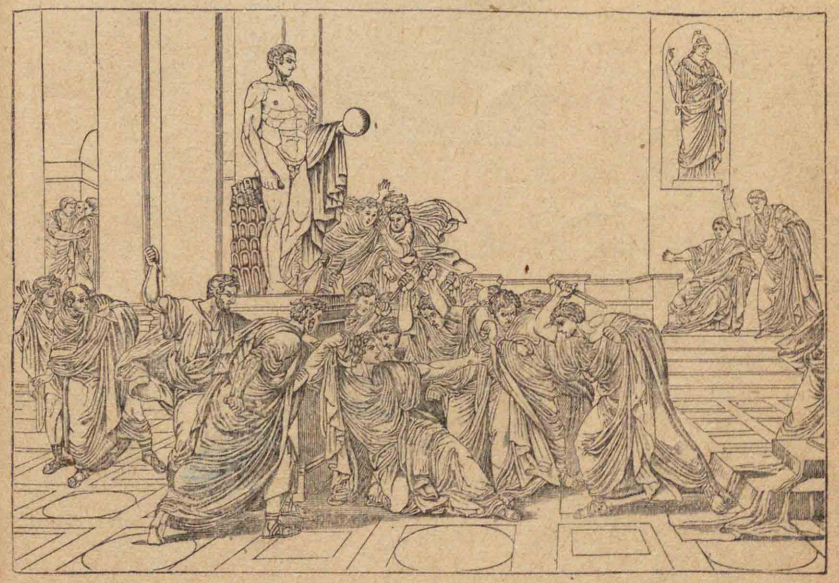
その間にクラッススはパルチヤを征して敗死した、次いで政敵となつたポンペイウスを仆し、又エジプト、小アジヤ、アフリカ、イスパニヤを平定してローマに凱旋した(前四五)。

ケーザルのガリヤ出征中、ポンペイウスはローマに居たが、ケーザルの威名を嫉み讒つ

ケーザルの治績

て元老院と結びその職を解かうとしたので、ケーザルは急いでローマに歸つた。ポンペイウスは驚いて東方に走り、大軍を集めたけれども、ケーザルのために擊破され、エジプトに走つてその地で横死した。

天下を一統したケーザルは共和政の要職を兼ねて、獨裁君主の實權を握り、大政治家の才を振つた。即ち弊政を改め、貧民を救ひ、軍隊を抑へ、曆法を改め、庶政を一新したが、執政僅に一年で、元老院議員中、彼の威名をねたむものに暗殺された(前四四)。



ケーザル暗殺せらる*

*十九世紀の初に出たイタリヤの畫家カムッチニーの原畫を縮寫したもの。暗殺のときケーザルは身に寸鐵を帶びず、手に持つた筆を打振り、防禦した後、二十三創を被りて、ポンペイウスの像の下に斃れた。

オクタヴィヤヌスの天下一統 ケーザルの死後、その部下アントニウス(Antonius)が、ケーザルの養子オクタヴィヤヌス(Octavianus)及びレピヅス(Lepidus)と共に、第二回三頭政治を起し、反對黨を破つて天下を三分したが、レピヅスはやがて排斥され、アントニウスはエジプトの女王クレオパトラ(Cleopatra)に迷つて私曲を行つた。オクタヴィヤヌスはアクチウム(Actium)沖の海戰で之を破り、エジプトを平らげて天下を一統した。

3 ローマ帝國の盛衰

アウグスツス時代 天下を一統したオクタヴィヤヌスは、ローマ人に歡迎され、アウグスツス(Augustus)(『尊嚴者』の義)の尊號を受け、文武の要職を一身に兼ねた。それで共和政治は形式だけで、實は帝政となつた。史家はこの後を帝政時代と呼ぶ。當時ローマの版圖は、東はエウフラテス河から、西は大西洋に至り、北はライン(Rhine)、ドナウ(Danube)兩河から、南はアフリ

ローマ不滅の思想

アウグスツスの治績

A⑧

帝國の最盛時代

トラヤヌス帝の征服事業

アウグスツス

防に用ひ、帝都を壯麗にし、文藝を奬勵したので、謂はゆる『ラテン文學の黄金時代』を現出した。

帝國の隆盛 アウグスツス歿後、帝政の基礎は次第に固くなつた。而して二世紀の後半マルクス・アウレリヤヌス帝の時まで、中にはネロのやうな暴君もあつたが、賢明な皇帝が多く、國内よく治まり、領土外に伸び、ローマの文化はその領土内に普及し、帝國の最も盛な時代であつた。

此の時代にブリタニヤ(Britannia)(今のイギリス)はローマ領となつた。又ローマの東方の敵パルチヤ(Parthia)とローマとは共和政時代から屢〻交渉があつたが、トラヤヌス(Tra-

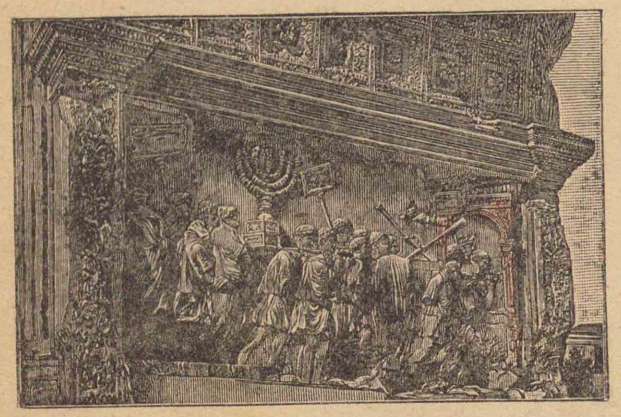
カの大沙漠に達した。それでローマは世界統治の使命を有し、ローマの國家は不滅であるといふ思想が起つた。アウグスツスは意を内治國

外患

内憂

コンスタンチヌス帝の中興

チツス凱旋門の浮彫*



janus)帝は之を攻めてメソポタミヤ(Mesopotamia)を取つた。帝は亦ダキヤ(Dacia)(今のホンガリヤ地方)をも征服し、帝國の領土は、この時最も伸びたが、久しからずしてこれ等新征服地方は失はれた。

帝國の衰頽 その後ササン朝のペルシヤ(Sassanidae)が帝國の東境を、又ゲルマニヤ民族は頻りにその北邊を侵した上に、皇帝に暗君が多く、軍隊は恣に之を廢立したので、皇帝は全く威信を失ひ、内亂がつゞき、一時盛大を極めたローマ帝國も三世紀以後次第にその末路に近づいた。

帝國の分裂 その後ヂオクレチヤヌス(Diocletianus)の分國政治で、國勢一時振つた後、天下再び亂れたのを、三二三年コンスタンチヌス(Constantinus)大帝が平定し、都をコンスタンチノープル(Constantinople)

*ローマ皇帝チツス(Titus)のイエルサレム陥落を記念するため彫りつけたもので、イエルサレムの聖器を鹵獲して凱旋する光景。

東西ローマ帝國分立

西ローマ衰亡の原因

ブルに遷し、文武官制を一新し、キリスト教を公認するなど、種々の改革を行つたので、國勢中興した。然しその歿後は國がまた亂れたのを、テオドシウス帝が一旦統一した後、三九五年これを東西二部に分ち、その二子に傳へて、その後ローマ帝國は永く東西に分れた。

この分立後も西ローマ帝國は尙ほ八十年間存立した。然し國力は益〻衰ろへて、その滅亡は時の問題であつた。東ローマ帝國は、種々の點で新國家の性質を有し、分立前のローマ帝國をそのまゝ繼承したものではなかつた。西ローマ帝國衰亡の原因は色々考へられるが、ローマ國民の精神的頽廢が、その根本をなした。一體ローマの眞の興隆期は共和政時代カルタゴの滅亡頃迄である。その後帝政時代となつても、その領域は益〻擴大したが、それは興隆期にローマが既に周圍の文化國を滅ぼして大國家となり之に當り得る國がなくなつたからである。即ちカルタゴ滅亡頃からローマ古來の堅實な國風がくづれ國民の愛國心が衰へると共に、興隆の要素が段々なくなり、唯ケーザルやアウグスツスのやうな英主の力で國家が改造されたので帝政時代の隆盛を見たので

ある。若しこれ等の英主が出なかつたらローマはとくに崩壞したであらう。

4 ローマの文化　キリスト教

ローマ人の長所

法學

土木事業

ローマ文化の特色　ローマ人はギリシヤ人と異つて、實用を主とする民族で、政治や、軍事や、土木事業等がその長所であつた。それで共和政時代から法律が發達し、兵制も進歩してゐた。帝政時代となつては專門の法學者が皇帝に重く用ひられたから、法學の進歩は目ざましかつた。

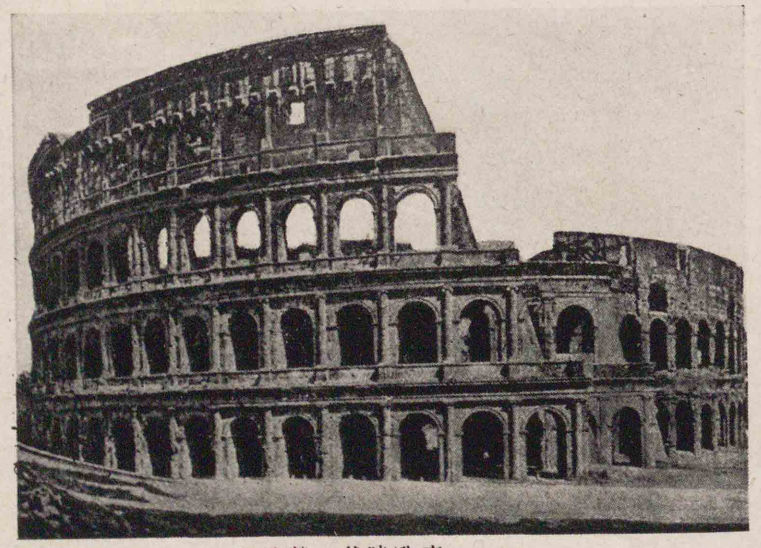
ローマ人は實用向の土木建築には驚くべき力を示し、共和政時代からの道路や水道、帝政以後の大浴場、港灣、凱旋門、橋梁などはイタリヤを始め、當時の帝國領土内の處々に、今も尙ほ殘つて居て、規模の雄大なのに驚かされる。

上古ローマ人の營造物が二千年後の今日まで崩壞しないで多く殘つて居るのは、それが堅牢を旨として作られたためでこにもローマ人の氣質が現れてゐる。(圖版參照)

今日まで世界の各大學にはローマ法の講座がある。

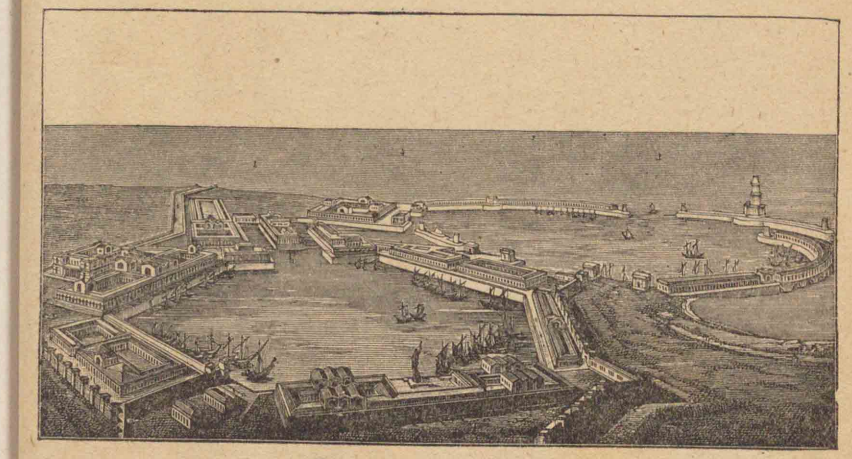
ガールー橋

コロッセウム



ローマ帝政時代の營造物

オスチヤ港（復原圖）



文學は美術と共にローマ人の長所でなく、初めは專らギリシヤを模倣したが、共和政の末期から國民文學も芽ばえ、アウグスツス帝の時代文運の盛な頃から、詩人や哲學者も出たが、何れもギリシヤには遠く及ばなかつた。詩人ではヴァージル(Virgil)ホラチウス(Horatius)など、哲學者ではセネカ(Seneca)、史家ではタキツス(Tacitus)リヴィウス(Livius)などが有名である。

ローマ人の文化的貢獻はその組織的能力により作り上げた制度、法律の模範を後世に示したほかに、大帝國を建設し、その國力を以て、その移入したヘレニズム文化を外敵に對して擁護し、

*オスチヤ(Ostia)はチベル河の海口にあり。ローマの商業上最も重要の港だが天然の良灣がないからローマ人は人工的に港の諸設備をした。

ローマ帝政時代の營造物

實際的才能に富んだローマ人は、盛に實用的土木事業を起し、道路、水道の開通や、橋梁の架設、港灣の修築等に、前古未曾有の大規模なものを造つた。二十世紀の進歩した物質文化を見なれた現代人をも驚かすものがある。

ガール橋

フランスの東南ガール（Gard）縣にある。同じ名の河に架けた石橋で、水道と通行路とを兼ねたもの。高さ約二十七間、長さ百四十八間、三段のアーチから成り、その最上層に水道があり、最下層が通行路となつてゐる。初代皇帝アウグスツスの時にできたもので、今も尙も原形を留めてゐる。

コロッセウム

ローマ人は殺伐な事を好み、共和政時代から、式日又は國祭日等に、劒奴と稱する奴隷に眞劍勝負を行はせ、又は猛獸と劒奴とを鬪はせ、之を觀て樂しむの風があつた。その風帝政時代に及んで益盛になり、國力の發展と共に、遂に本圖に示すコロッセウム（Coloseum）のやうな宏大なる常設試合場の築造を見るに至つた。これはローマ市の中央に近き處にあつて皇帝チツス（Titus）在位の紀元八十年（約千八百五十餘年前）に完成した。周廻五百二十四メートル、長徑百八十七メートル餘、短徑百五十五メートル餘、高さ四十八メートル餘の楕圓形の建物で、外壁は石、內部は煉瓦を用ひて造り、中央に廣き試合の舞臺がある。之を瞰おろす座席が周圍に階段狀に設けられ、四五萬人の觀衆を容るることができた。

文化の擁護と普及

ローマ本來の宗教

キリスト教の起因

且つ水陸交通の便を發達させて、之をその大領土に普及させ、後の西洋文化の素地を作つた點に在る。

キリスト教の弘通　ローマには本來ユピテル（Jupiter）を至高神とする多神的國教があり、帝政以後は皇帝を國家の神として崇拜させた。然し民間信仰には干渉しなかつたので、大領土に入つた諸民族の宗教が雜然として行はれ、宗教的統一はできなかつた。然るにアウグスツス帝の時、ユダヤにイエス（Jesus）が生れ（前四頃）、ユダヤ教に基づいて、一層普遍的な一神教卽ちキリスト教を說いた。イエスは、ユダヤ人に忌まれて、十字架の上に磔殺されたけれども、その弟子等が熱心にその教を弘め、紀元一世紀の中

キリスト（トルワルセン作）

キリスト教の公認

A ⑨

頃にローマに傳はつた。その信者はローマの國教を守らないため、歴代の皇帝に迫害された。然し信者は喜んで死に就き、その數益〻殖え、遂に社會上一大勢力となつたので、コンスタンチヌス帝は遂に之を公認し、次いで宗教會議を開いて、キリスト正教の信條を定め、之に從はないものは國外に放逐した。その後テオドシウス帝はキリスト教を國教と定めたから、この教はローマ全帝國に弘まり、後には全ヨーロッパに行はれて、政治上社會上の大勢力となつた。

西洋上古史の意義は甚だ重大である。それは西洋文化の本質が上古に於て定まり、さうしてそれが現代にも尚ほ活きて居るからである。西洋近世の文化は、上古の文化精神が、今より約五百年前頃から漸次復活して、それが益〻發展した結果である。若し上古の文化と之を產んだ精神とが無かつたら、現代の西洋文化は、見られなかつたであらう。而して西洋上古の文化は、主としてギリシヤ人の優れた天分と、ローマ人の撓まざる努力とによつて展開されたのである。

ローマとゲルマニヤ人との關係

フンの移動

B ①

第二編　中古

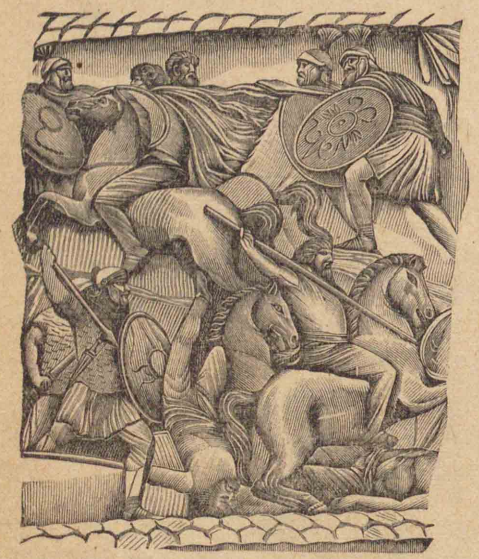
第一章　民族の大移動

1　ゲルマニヤ民族の移動と建國

大移動の起原　ローマ帝國の北には、早くから未開なゲルマニヤ民族(Germans)が分れ住んでゐた。彼等は性質勇猛で戰を好み、ローマ帝國の衰ふるにつれ、屢〻その北境を侵し、又ローマの傭兵として用ひられるものもあつた。然るに三七五年黑海の北に居たフン人(Huns)(匈奴)が西に移つて、ゲルマニヤ民族の一なる東ゴート族(Ostrogoths)を降し、西ゴート人(Visigoths)に迫つたので、西ゴート族はローマ皇帝の許を

西洋人の元

ローマ歩兵とゲルマニヤ騎兵との奮戰*



*皇帝マルクス＝アウレリウスのローマに建てた記念圓柱の浮彫の一部を縮寫したもので、此の浮彫は當時兩國民の風俗戰術等を見るべき貴重の資料である。

西ゴート

B①

フランクとヴァンダル

アッチラ

カタラウヌムの戰

得て、ドナウ河の南に移住した。これが民族大移動の起原である。

西ゴート及ヴァンダルの建國　その後西ゴートはローマと隙を生じ、數回イタリヤに侵入した。西ローマ皇帝はガリヤの守備兵を呼びよせて防衛に當て、そのため國境の守備が薄弱となつたので、ライン河方面の諸族も續々帝國領内に移動し來り、フランク族(Francs)はガリヤの北部に、ヴァンダル族(Vandals)はイスパニヤに入つた。やがて西ゴート族は西へ進んで、イスパニヤからヴァンダル族を逐ひ出してそこに移り、ガリヤの南部を併せて王國を建て、ヴァンダル族はアフリカに渡つて、カルタゴのあとに王國を建てた。

フンの侵入　その頃フン族は勢益〻振ひ、その王アッチラ(Attila)は東ローマ帝國を侵略し、西に轉じてガリヤに入り、今にも西ヨーロッパを席卷せんとしたが、四五一年カタラウヌム(Catalaunum)で西ローマとゲルマニヤ民族との聯合軍に撃破された後やがて病死し、その大領土は忽ち瓦解した。

西ローマ帝國の滅亡　西ローマ帝國は屢〻蠻族に侵されて益〻衰へ、四七

オドアケル

B①

フランクの建國

東ゴート王國

ユスチニヤヌス帝の事業

六年に至り、ゲルマニヤ傭兵の長オドアケル(Odoacer)は、遂に皇帝を廢してイタリヤの君となり、西ローマ帝國は茲に滅んだ。

フランク及東ゴートの建國　當時フランクの長クロヴィス(Clovis)が、ガリヤの北部を征服してフランク王國を建てた(四八六)。東ゴートはフンの領土瓦解した後、ドナウ河畔に獨立し、その王テオドリック(Theodoric)はイタリヤに侵入し、オドアケルを破つて、その國を奪ひ、東ゴート王國を建てた。彼はローマの文化を尊重し保存を圖つたが、その國が長く續かなかつたので、ギリシヤ、ローマの上古文化は荒廢に歸した。

2　サラセンの勃興とその文化

東ローマ帝國　は西ローマ帝國滅亡後も尙ほ獨立はして居ても、內憂外患に苦しんだが、六世紀にユスチニヤヌス帝(Justinianus)が立つて、內は宗教の爭を鎭め、又法學者に命じてローマ古來の敕令、法律等を蒐めて法典を編纂させ、支那から養蠶の法を傳へ、セント・ソフィヤ(St. Sophia)大寺院を造營

ユスチニヤヌス帝

し、城壁を固めて國防を嚴にすると共に、外はローマ帝國の舊領を回復するため、兵を出して先づアフリカのヴァンダル王國を、次いでイタリヤの東ゴート王國を滅ぼし、またイスパニヤの南部をも略し、帝國の威一時振つたが、帝の歿後國運再び傾いた。偶〻東隣のペルシヤ國が屢〻帝國領を侵したから、東ローマは國運を睹して之と戰ひ、そのために兩國は共に疲れ果てた。恰かもこの時サラセン[Saracens]が興つた。

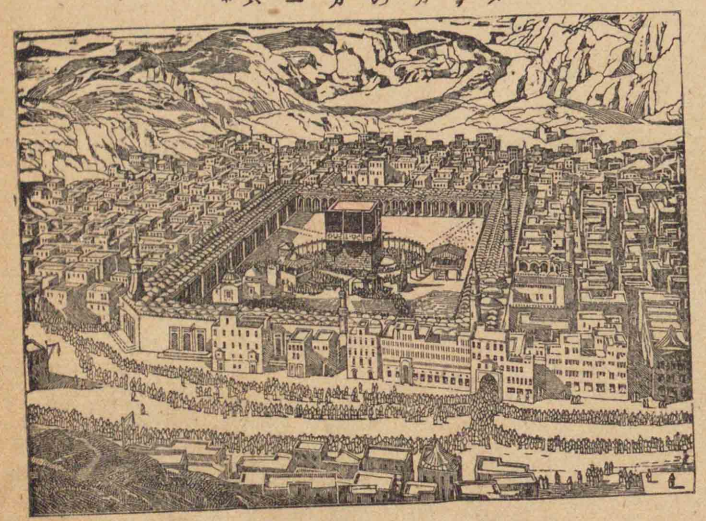
イスラム教徒禮拜の姿勢*

サラセン は[1]アラビヤの住民で、遊牧や隊商を業とし、多くの部族に分れ、何れも多神教を奉じ、互に反目鬪爭し、七世紀の初めまで世に著れなかつたが、その中から偉人[4]マホメット[Muhammed]が出てから、急に一大勢力となり、キリスト教諸國を脅かすこととなつた。

マホメット は[3]メッカ[Mecca]に生れ、壯年の時隊商に加は

*世界各地の回教徒は皆メッカの方角に向ひ、かゝる姿勢で禮拜する。

メッカのカーバ*



つてシリヤ地方を巡り、ユダヤ教、キリスト教の感化を受けた。後思を宗教に傾け、みづから神の豫言者と稱し、イスラム教（回教）[Islamism]といふ一神教を說いた。そのためメッカ市民に迫害され、六二二年メヂナ[Medina]に逃れた。これをヘヂラ（『逃亡』の義）[Hegira]と呼び、回教徒の紀元元年である。その後マホメットは武力でメッカを攻め取り、遂にアラビヤ全半島を征服し、その教を弘めた。

サラセン帝國 マホメットの後を承け、政治、宗教の大權を握つた者をカリフと呼ぶ。歷代のカリフは教祖[Caliph]の志をついで、頻りに四方を攻め、東はペルシヤを滅ぼして、唐の西境に

*メッカはアラビヤ半島の西部紅海に近き岩石地にある。回教の中心地として毎年回教の信徒こゝに巡禮する。廻廊を以て圍まれた廣庭の中央にカーバと稱する方形の建物があつて、其の中に黑色の隕石がある。其根は地中に埋もれてゐる。信徒は七度カーバを廻つた後其の隕石に接吻する。蜿蜒たる信徒の列を看よ。

ツールの戰
サラセン帝國の分裂

迫り、西はエジプトを始め、北アフリカ一帶を從がへてイスパニヤに入り、西ゴート王國を亡ぼしてその地を取り(七一二)、教祖の死後百年もたたないのに、アジヤ、アフリカ、ヨーロッパ三大陸にまたがる大帝國を建て、ヨーロッパを包括せんとする勢で、キリスト教諸國は震駭したが、東は東ローマ帝國に喰止められ、西はフランク王の宮相チャールス"マルテル(Charles Martel)に、ツール(Tours)附近で破られ、退いてイスパニヤを保つた。

その後八世紀の半に至り、サラセン帝國は東西二部に分裂し、東のカリフはチグリス河畔のバグダード(Bagdad)に、西のカリフはイスパニヤのコルドヴァ(Cordova)に都した。

サラセンの文化

兩カリフ國は相競うて學藝を奬勵し、盛に航海通商を營み、國勢いづれも盛で、その文化は當時のキリスト教諸國に優れた。中でも八世紀から九世紀に亙る東のカリフ、ハルン"アル"ラシッド(Harun al Rashid)の時代がサラセン文化の黃金時代であつた。

・サラセンは上古ギリシヤの科學を研究して之を發達させ、數學、理化學、星學等の進歩は

科學の進歩
建築の様式
生き殘つたサラセン語
原始キリスト教

著しかつた。又遠く東洋の支那沿岸まで航海して通商したので、その地理的知識も亦甚だ豐富であつた。彼等の建築はビザンチン(Byzantine)式に基づいたものであつたが、回教の偶像嚴禁から發達したアラベスク(Arabesque)と稱する獨特の文様で裝飾し、王宮や寺院等絢爛の美を極めた。サラセン語で現代まで西洋諸國語の中に用ひらるるものの多いのは、昔サラセン文化のキリスト教諸國に優つて居た結果である。例へば Algebra(代數學)、Alkali(アルカリ)、Alcohol(酒精)、Admiral(海軍提督)、Sofa(長椅子)、Muslin(モスリン)など、皆サラセン語である。

アラベスク*

3 ローマ法皇とフランク國

ローマ法皇 キリスト教は本來平等主義で、僧俗の區別さへなく、まして僧侶の階級などなかつたが、その教が弘まり、信者が殖えるにつれ、教會が組織され、僧侶の階級も生じ、ローマ帝國内にローマ、コンスタンチノープル、アレクサンドリヤ、アンチオキヤ(Antiochia)、イェルサレムの五本

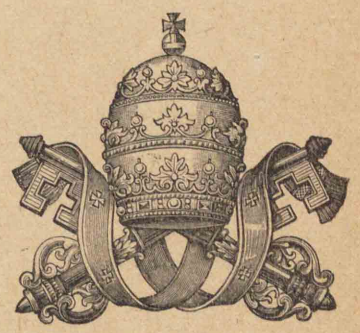
*イスパニヤのグラナダにあるアルハムブラ宮殿は、今も原形のまゝ殘り、サラセン建築の代表的のものである。本圖は其の裝飾の一部を示す。草體のアラビヤ文字を模様に用ひてある。

パパス（法皇）

ローマ教會興隆の原因

キリスト教と偶像崇拜

ローマ法皇の徽章



山ができ、各〻司教があつて教化に從事した。中でもローマ本山司教の權次第に强まり、その稱號パパス（Pappas Pope）は『父』の義から轉じて、地上に於けるキリストの代表者（『法皇』）の義をもつに至つた。サラセンが興つてから、五本山中唯〻ローマとコンスタンチノープルだけが侵略を免かれて、東西に對立してゐた。

ローマが使徒ペートル（Peter）及びポーロ（Paul）殉教の地として自然他より重く尊崇されたことやローマの司教にグレゴリー一世（Gregory I.）のやうな俊傑が輩出し、又ゲルマニヤの布教に大に成功したことや東ローマ帝國が次第に衰へ、イタリヤ方面の教會を外敵に對して保護する力のなかつたことなどが相待つてローマ司教の力を伸ばし、遂にその獨立を見るに至つた原因である。

東西正教の分離　キリスト教は本來偶像崇拜を排斥した。然るに中古になり、布教やその他の便宜上いつとなく偶像を拜する風が起

偶像破壞令

フランク王室とローマとの關係

ピピンの宗教的奉仕

り、そのため回教徒に笑はれた。それで七二六年東ローマ皇帝レオ（Leo）三世が、敕令を以て偶像破壞を命じたが、ローマ法皇は極力之に反對し、紛爭久しきに亙つた後、遂にフランク王と結托して、東ローマ皇帝と絶緣し、キリスト教會は法皇を仰ぐ西方のローマ正教（Roman Catholic）と、皇帝の下に立つ東方のギリシヤ正教（Greek Catholic）の兩教會に分れた。

ピピン

フランク王國とローマ法皇　フランク王室は建國以來キリスト正教を奉じ、ローマ司教と關係が深かつた。宮相チャールス・マルテルがサラセンを擊退してから、政權次第にその家に移り、子ピピン（Pippin）は遂に王を廢して自立したが、法皇はフランクの武力を借らんため之を承認したので、ピピンは之を德として、當時北イタリヤに侵入したロンバルド（Lombards）人を破り、その地を取つて法皇に獻じた。かくて法皇は始めて領土をもつことになつた。

チャールス大帝　ピピンの子チャールス大帝（Charles the Great (Charlemagne)）は雄才大略があり、先づイ

チャールス大帝の征服事業

法皇の帝冠授與

B④

ウェルダン及びメルセン條約

フランス、ドイツ、イタリヤの起原

チャールス大帝

タリヤのロシバルヂヤ王國を亡ぼし、ついでイスパニヤのサラセンを討つて、その北部を取り、又ゲルマニヤ諸民族を征服して、大に領土を東方及び北方に伸ばし、殆んど前の西ローマ帝國の版圖に匹敵せしめ、そこにキリスト教を弘めたので、ローマ法皇はこれを德とし、八〇〇年チャールスに西ローマ皇帝の冠を加へた。帝は大に內治に力を用ひ、地方制度を整へ、又產業教育を奬勵したので、ゲルマニヤ民族大移動後の暗黑界に文化の光が再び發した。

帝國の分裂　チャールス大帝は在世中から帝國の維持に苦心したけれども、その歿後子孫が領地を爭つて紛亂がつゞき、遂に八四三年のヴェルダン(Verdun)條約及び八七〇年のメルセン(Mersen)條約で帝國は三分され、東西兩フランク國及びイタリヤ部となつた。東フランクは略〻後のドイツに當り、西フランクから後のフランスができた。

ノルマンのフランク侵寇

B⑤

アングロサクソンの建國

4　ノルマンの活躍

フランク侵略　ノルマンはゲルマニヤ民族の一派で、スカンヂナヴィヤ(Scandinavia)半島及びデンマルク(Denmark)地方に住し、性質勇敢で航海に長じ、チャールス大帝歿後の紛亂に乘じ、九世紀頃から盛にフランク帝國の沿岸を荒らした。帝國分裂後、東フランク王は之を擊退することを得たが、西フランク國(卽ちフランス)ではこれを防ぎ得ず、十世紀の初、セイヌ(Seine)河の下流地方を與へて定住させ、ノルマンヂー(Normandy)公國ができた。

イングランド征服　五世紀の半卽ち歐洲大陸で民族大移動の盛な頃、ゲルマニヤ族の一派アングロ・サクソン(Anglo-Saxons)は、北ドイツから海を越え、イングランド(England)に渡つて王國を建てた。九世紀の末、アルフレッド(Alfred)大王が出て、海軍を創設

アルフレッド大王*

*大王の死後一千年の記念に一九〇一年ウィンチェスター(Winchester)に建てられた像。

デーンの侵寇

し、學問を奬勵し、國威を揚げたが、後デンマルクのノルマン卽ちデーンが盛に侵寇し、十一世紀の初遂にイングランドを併合した。

ノルマンのイングランド征服 B⑤

その後、アングロ=サクソンの舊王統が一旦回復されたが、一〇六六年に至り、ノルマンヂー公ウィリヤムが王位繼承權を主張し、大擧侵入し、ヘースチングスの戰に勝つて王位につき、再びノルマン朝を開いた。これを『ノルマンのイングランド征服』といふ。これからノルマンとアングロ=サクソンとは、血統、言語、習慣の融合を見て、遂に近世の英國人となつた。

ヘースチングスの戰*

ロシヤ及びナポリ建國

ロシヤの起原 B⑤

ノルマンの一部はスウェーデン Sweden からロシヤの西北部に入り、その酋長ルーリク Rurick はそこに建國して、ロシヤの基を開いた(八六二)。ノルマンヂーのノルマンは地中海に向ひ、サラセンを逐つてシシリーを取り、南イタリヤを併せてナポリ王國 Napoli (Naples) を建てた。又他の一派は遠く北大西洋を航して、イスランド Iceland、グリーンランド Greenland を發見し、北アメリカの東北岸に達した。

*有名なるバユー(Bayeux)の刺繍の一部。フランスのバユー寺院の壁懸に用ひられたもの。

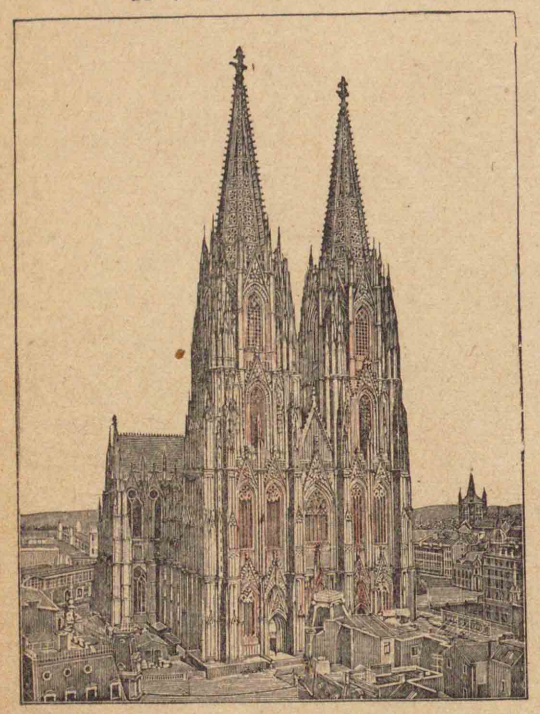
ナポリ王國建設

教會の文化的功績

第二章　中古のヨーロッパ

1　キリスト教會の勢力

教會の勢力　民族大移動以來、上古の文化は荒廢し、殺伐の氣が社會に滿ち、人民は無智で迷信に陷つた中に、文字を識り、教化に與かり、社會の指導者として、學問や產業を勵んだのはキリスト教會の僧侶であつた。それで教會萬能の風がいつのまにかでき上り、從つて教會の首長



ドイツ、ケルンの大寺院*

*一二四八年起工、其後工事斷續して、一八八〇年に完成せるもの、塔の高さ四百餘尺。

たるローマ法皇の勢力が非常に伸び、帝王や貴族でも法皇から破門さるれば、どうすることもできなかつた。

教會の勢力の隆盛となるにつれ、人民の喜捨で大寺院が各地に建てられ、今も遺つてゐる。その建築樣式をゴシック(Gothic)式といふ。

オットー大帝

神聖ローマ帝國

東フランク王國卽ちドイツでは十世紀の中頃オットー一世(大帝)(Otto)が立ち、內は諸侯を抑へて王權を固め、外は歷代ドイツに侵入したホンガリヤのマジャール人(Magyars)を擊退して禍根を絕ち、又イタリヤに入つて法皇のために其の敵を平らげた。法皇はその功を嘉し、オットーに神聖ローマ皇帝(Holy Roman Emperor)の冠を授けた。それからは同皇帝たる資格はドイツ王に限られたので、ドイツの地位は大に高まつた。

皇帝は法皇と同じく本來一人に限られ、王は皇帝の下に幾人も有つた。故に皇帝と王とは、その地位に非常の差がある。神聖ローマ皇帝はドイツ王に限つたから、神聖ローマ帝國を一にドイツ帝國とも呼んだ。同帝國は後には殆んど有名無實となつたが、名義は一八〇六年まで存續した。

法皇グレゴリー七世

ドイツ王ヘンリー四世

法皇とドイツ王との爭

これまで法皇と帝王とは結托して、自他共に利益を得て來たが、僧俗の權が互に犯し合つてゐた。チャールス大帝もオットー大帝も、共に帝冠を法皇から授かつたが、皇帝は法皇の選擧や僧侶の任免に干涉した。然るに十七世紀の後半、法皇グレゴリー七世が出て、法皇の地位を皇帝の上に置かうとし、先づ教會內部を廓淸した後、皇帝の僧侶任命權を奪つた。ドイツ王(後の皇帝)ヘンリー四世(Henry)が之に反抗したので、法皇は王を破門した。王は窮して法皇に謝罪し、僅に破門を解かれた(一〇七七)。その後イタリヤとドイツに法皇黨と皇帝黨と對立して抗爭したが、法皇の權力は益〻伸び、十

*グレゴリー七世

*手に蠟燭を持ち、左右の僧に向ひ『予はこの蠟燭を吹き消すやうにヘンリー四世を滅さう』といつてゐる。

大空位時代

天皇ト皇帝トの相異

スウィスの獨立

三世紀の初頃、その絶頂に達した。

皇帝權の衰微　神聖ローマ皇帝は歴代力をイタリヤ支配の目的に費やして、ドイツに主力を注がなかつたので、國内の諸侯が強くなり、紛亂が絶えなかつた。かくて十三世紀には二十三年間皇帝の無い期間さへあつた。同世紀の後半にハプスブルグ家(Hapsburg)から皇帝が出て、後日同家の盛になる基を開いたが、自家の繁榮のみ圖つて、帝國全體の事を省みなかつたので大諸侯が益〻勢力を得、十四世紀の後半には、遂に皇帝選擧權を僧俗の七大諸侯に限るに至つた。謂はゆる選擧侯(Electors)である。もとドイツ帝國に直屬したスウィスの農民が、ハプスブルグ家の支配に移り、壓制せられたので、屢〻オーストリヤ軍を破つて、獨立聯邦を建てたのもこの頃である。

2　封建制度とその社會

封建制度　八世紀の初フランク國のチャールス・マルテルが、サラセンの侵入に備へ、王領及び教會領を割いて部下に與へ、平素軍馬を養つて馬術を練らせ、有事の日從軍させたのが封建制度の芽ばえである。チャールス大帝の領土が分裂して後、國王の力が弱くなり、地方官がその管區を世襲して諸侯となつた。又外からノルマンやマジャール等が侵入して、國王が之を禦ぐ力足らないので、諸侯が城砦を築いて之に據り、兵を養ふて自ら守り、人民がこれに附いて、保護を求めた。これ等の事情で諸侯が國王から受けた封土を世襲し、これを部下に分與して、主從の關係を結ぶやうになつて、封建制度は完成し、十世紀以後約五百年間、フランスを始め、西ヨーロッパ諸國に行はれた。

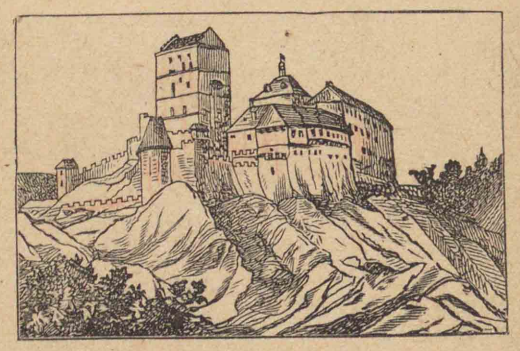
封建時代の社會　封建制度の下では、兵と農とが全く別れ、武士階級が僧侶と共に、國王諸侯に次いで社會の上位を占め、農民はその最下位

封建制度の芽ばえ

その完成

社會の階級

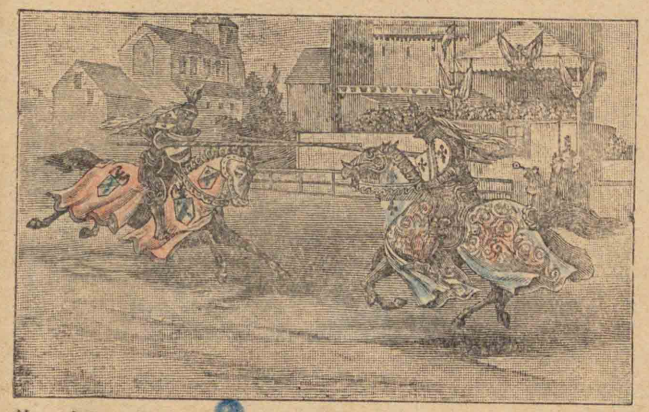
封建諸侯の城郭



封建諸侯は要害の地に、堅固なる居城を構へ、領内の人民に權力を振つた。本圖はボヘミヤのカールスタイン城である。

に立ち、領主に誅求されて、甚だ悲慘な生活をした。商工業者はその數少く、これも初めは領主に附屬したが、後にはその金力で次第に自治權を得、特に十字軍（次章参照）以後、商業が大に興つたから、都市の商人の勢力は大に增して來た。

武士の闘武會*



武士道 武士階級には武士道（Chivalry）が行はれ、封建時代の華とたたへられた。武士は神を信じ、婦人を敬ひ、弱者を憐れみ、勇氣、名譽、信義を重んずるを本領とした。武士の子弟

中古末期の農業

*華美な甲冑をつけ、駿馬に跨がり、長槍を横たへ、王侯、貴婦人の前で勝負を競ひ、貴婦人の手から賞を賜はるは武士の面目であつた。

セルジュック＝トルコのキリスト教徒虐待

は幼時から王侯貴婦人に仕へて禮節を習ひ、次に武士に侍して武技を修め、莊嚴な儀式を經て、始めて武士の列に入り、時々闘武會（Tournament）に加はり、又は冒險を試みなどして士氣を養つた。

西洋の武士道も種々の點に於て我が國の武士道と一致する。然し國體の相異から西洋には我國に於けるやうな忠孝の精神は薄かつた。

第三章　十字軍とその影響

十字軍の武士

十字軍の起因　十一世紀頃は、西ヨーロッパ諸國民の宗教熱高く、パレスチナの聖地に巡禮する者が多かつた。然るにサラセンが衰ろへたので、セルジュック[1]トルコ族（Seljuk Turks）が起つて東カリフ國よりこの地方を奪つてから、彼等巡禮者を虐待したので、西ヨーロッパ人は大に憤慨した。折から東ローマ皇帝もトルコ族の侵略に苦しん

クレルモンの會

B⑥

で、法皇に助力を乞ふたので、一〇九五年法皇ウルバン二世(Urban)が諸國の僧侶武士をフランスのクレルモン(Clermont)に會し、聖地回復の軍を起すことを勸めたが、これを聽いて皆感激し、爭つて聖軍を起し、謂はゆる十字軍(Crusades)の遠征となつた。

十字軍の經過　十字軍の遠征は一〇九六年から一二七〇年に亙り、前後七回も行はれた。第一回には聖地を回復してイェルサレム(Jerusalem)王國を建てたが、やがてトルコに奪回された。その後の遠征は何れも失敗して、結局最初の目的は達せられなかつた。

十字軍のジェノア出帆

第一回十字軍(一〇九六—九九年)は主としてフランスとドイツとの武士から成り、コンスタンチノープル、小アジヤを經、途中で苦戰の後、イェルサレムに達し、これを陷れた。イェルサレム王國滅亡後、再興の目的で第三回十字軍(一一八九—九一年)がドイツ、イングランド、フランス三國の君主によつて起されたが失敗した。第四

十字軍の失敗した原因

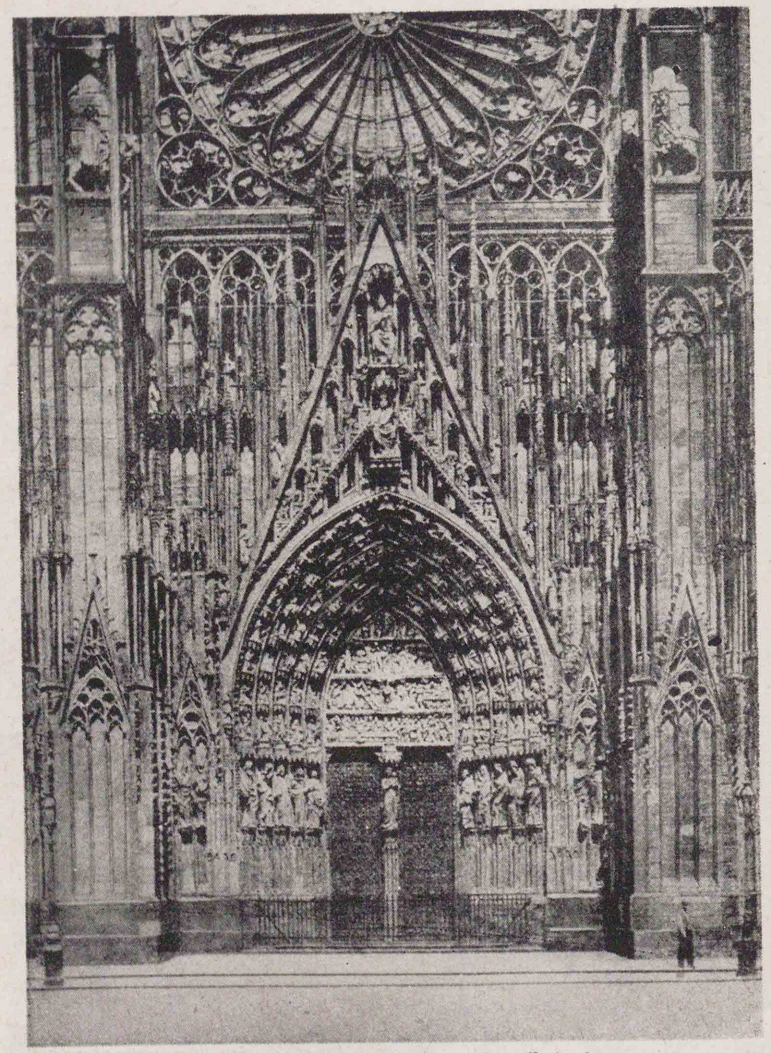
法皇のアヴィニョン幽囚

回(一二〇二—〇四)は商業市ヴェニス(Venice)に利用されて、東ローマ帝國の攻擊に轉じ、ヴェニスの勢力を東方に伸ばすだけに終つた。十字軍の失敗は、軍の不統一や主催君侯の利害の不一致等が、その重なる原因であつた。

十字軍の結果　十字軍の影響は甚だ大であつた。即ち(1)その失敗のため宗教熱が冷め、法皇の權威が衰ろへ、(2)諸侯と武士が多く生命財產を失つたので、封建制度が大打擊をうけ、王權の振興が促進され、(3)ヨーロッパ人が異教徒の世界を觀、新知識を得て、人心が開發し、(4)東方との交通貿易が發達して、都市の勃興を見るに至つた。

ヨーロッパ人が世界に雄飛し今日の優越權を得るに至るもとは、十字軍によつて彼等の眼界が廣まり、新氣運が歐洲に動き出したことに在る。故に十字軍の影響は遠く現代に及んでゐる。

法皇權の衰弱　十字軍の影響以外に、當時教會の內部が腐敗して、人心慰安の力を失つたので、法皇權は益〻衰ろへた。十四世紀の初フランス王フィリップ四世は法皇と爭つて勝ち、法皇廳をアヴィニョン(Avignon)に遷し、



ストラスブルグ大寺院正面の裝飾

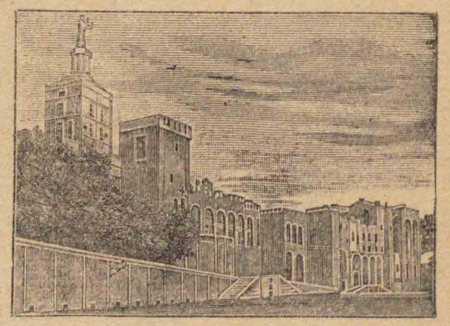
宗教改革の先驅者

その後七十年近く、フランス王は法皇を意のまゝに左右した。そこでイングランドのウィクリフ（Wycliffe）や、ボヘミヤ（Bohemia）のフス（Huss）など宗教改革を唱へたが、何れも失敗した。然し改革の氣運は次第に近づいた。

自由都市

都市の勃興　中古の半まで交通の不便と封建割據の勢とで商工業は振はず、生活は各地概ね自給自足であつたが、十字軍頃から社會の進歩に伴ひ、商工業が興り、從つて都市が勃興した。イタリヤのヴェニス（Venice）、ジェノア（Genoa）等が地中海貿易で先づ榮え、漸次北方の都市も繁榮し、金力で自治權を買うて謂はゆる自由都市となつた。それ等は同盟して諸侯の侵掠を防ぐものも少くなく、北ドイツのハンザ（Hansa）同盟の

フスの焚刑*



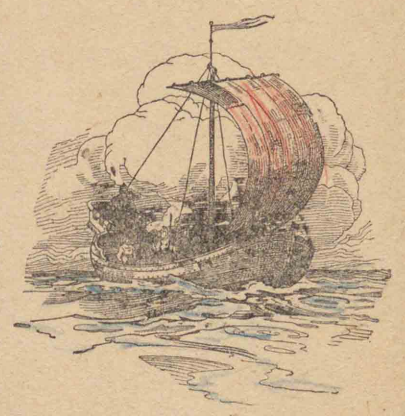
ヴェニスの法皇宮

*苟くもローマ教會の説に逆らふものは、異端の徒として極刑に處せられた。

ストラスブルグ大寺院正面の裝飾

西ヨーロッパの諸市を訪づれて、誰しも目に着くのは、全市の家屋を拔いて巍然としてそゝり立つ大寺院である。これこそ中古に於けるキリスト教の勢力と、その末期に於ける新氣運發生の大記念物である。本書本文中に示したドイツ、ケルンの大寺院はその一例である。キリスト教寺院の建築は、始めバシリカ式(Basilica)が用ひられ、次にビザンチン式(Byzantine)が取り入れられ、次にロマネスク(Romanesque)が用ひられたが、十字軍の末期から、最後の樣式ゴシック式(Gothic)が、フランスから起つて、英獨兩國に廣まり、今も各都市にその偉容を誇つてゐる。ゴシック式の特色は種々あるが、前の諸樣式に比して、全體が伸び〳〵して居り、天井も窓も高く、內部に光が多くさして明るい。而して全體の規模が極めて雄大であり、天空を摩する尖塔が雙手を天に向けて伸ばしたやうに正面に聳えてゐる。これは當時法皇權はやゝ傾きかゝつても、尙ほキリスト教に對する敬虔の念の甚だ强かつたことを示すと同時に、都市の勃興によつて宗教的建築企畫も雄大化し、向上發展の新氣運が、その建築にも現はれたのである。ゴシック式寺院の外側は極めて複雜細緻な裝飾が施されて居る。表の圖はドイツ、フランスの境に近いストラスブルグ(Strassburg)大寺院正面の下部で尖頭穹窿の入口の上には槍の穗を並べたやうな裝飾があり、その上に車輪窓が半分見える。入口の周圍には多數の彫刻が隙間なく嵌め込まれてゐる。

ハンザ同盟の船



如きは數十市が聯合し、その勢力王侯を凌ぐほどであつた。

第四章　中古末期の變動

中古末期の概觀　神聖ローマ皇帝の權力が衰へてゐた上に、十字軍以後はローマ法皇の權威も傾いて、ヨーロッパの統一的勢力は次第に滅び、これに代つて中央集權的な民族國家の對立が次第に著しくなつて來た。東ヨーロッパは蒙古人(Mongols)とオスマン=トルコ(Osman Turks)の侵入で形勢が一變した。

イングランドとフランスとの關係　イングランドでは十二世紀の中頃ノルマン王統(五四頁參照)が絕え、血緣を以てフランスのアンジュー伯(Anjou)が王位に卽き、ヘンリー二世(Henry)となつた。この王はイングランド以外フランス國內に、同國諸侯の一人として、國王よりも遙に廣い領地を有ち、

ジョン王の失地

大憲章

英國衆議院の起原

法皇イノセント三世

その勢力はフランス王を凌いだ。然るにその子ジョン(John)が位をついでから、フランス王と爭つて同國内のイングランド領を失つた。

英國憲政の起原 ジョン王はまた法皇とも爭つて之に屈服し、國内の政治も惡かつたので、一二一五年貴族僧侶等が王に迫つて大憲章(Magna Charta)を承認させ、國民の生命財産の安固を保證させた。これが英國憲法の基となつた。然るに次の王ヘンリー三世はこの大憲章を守らなかつたので、一二六五年貴族、僧侶の外、地方及び都市の代表者をも加へた議會(Parliament)が開かれた。これが英國議會衆議院(House of Commons)の起りである。

憲法政治は英國から起り、近世諸國に弘まり、我が國も明治二十二年以後憲法政治となつた。然し英國で國王の暴政を抑ふるために、王に迫つて署名させた憲法と、國民の幸福と國家の隆昌とを念とせらるる明治天皇が、列聖の臣民愛撫の精神を承けて發布せられた我が帝國憲法とは、その起原と本質との全然異ることを思ふべきである。

*イングランド王ジョン在位のころは、ローマ法皇の權力極盛の時代であつた。ジョンは法皇イノセント三世と爭つて敗れ、領土を法皇に獻じ、改めて、法皇の封土として之を受けた。

フランス議會の起原

戰役の起原

フランス王權の發達 フランスではカペー(Capet)王朝の初め諸侯の權が強く、王權は振はなかつたが、十二世紀の後半から名君が相次いで立ち、中でもフィリップ(Philip)二世は、フランス國内にあるイングランド王の領地を奪ひ、フィリップ四世は法皇と爭ひ、一三〇二年貴族、僧侶、平民の代表者から成る三部會(States General)を開いて法皇を屈服させたので、王權が大に振つて來た。この三部會がフランス議會の起原である。

チャールス七世の戴冠式

百年戰役 イングランド、フランス兩國は十三世紀以來、常に反目抗爭することになつた。十四世紀の前半フランスではヴァロア(Valois)王朝がカペー(Capet)王朝に代つたが、イングランド王エドワード(Edward)三世は王位相續

*オルレヤンの圍を解き、祖國を救つたジャンヌ＝ダルクは、レンス(Rheims)の大寺院に於て、チャールス七世に戴冠式を擧行せしめた。右方旗を持つのが彼女である。

17-18, (3)

フランスの危機

ジャンヌ＝ダルク

フランスの中央集權

イングランドの中央集權

の權を主張してフランスに侵入し、謂はゆる百年戰役が起つた。Hundred Years' War この戰役は百餘年間斷續したが、その間イングランド海軍はフランス艦隊に勝ち、陸軍も亦屢〻フランス軍を擊破して、同國の大半を占領し、フランスは遂にオルレヤン Orleans 附近を保つのみとなり、滅亡に瀕した。

この時ジャンヌ＝ダルク Jeanne d'Arc といふ一少女が、自ら陣頭に立つて奮戰したので、フランス軍の士氣大に振ひ立ち、オルレヤンの圍も解け、遂に敵軍を驅逐し、カレー Calais 以外のイングランド領を盡く回復した（一四五三）。

西歐諸國の中央集權　フランスでは百年戰役のため諸侯が大に疲弊した。歷代の王はこれに乘じ、術策を盡して、諸侯の領地を王室に收めて、中央集權の國とした。

イングランドでは百年戰役後、間もなく王位の爭から三十年に亙る內亂があつた。これを薔薇戰役 The Wars of the Roses といふ。この戰役で諸侯の家が多く斷絕したので、之を平定して、王位に卽いた新王朝チュードル Tudor 家のヘンリー七世は、諸侯の所領を王室に收め、著しく王權を伸ばし、獨裁

イスパニヤの中央集權

回教徒驅逐

蒙古人の侵入

ヘンリー七世

政治を行つた。

イスパニヤでは、コルドヴァ Cordova のカリフ國が衰ろへて、カスチラ Castile、アラゴン Aragon 等のキリスト教國が北方に起り、次第に回教徒を南方に逐つた。一四七九年カスチラとアラゴンとは合併してイスパニヤ王國となり、內は諸侯を討ち、外は回教徒と戰ひ、一四九二年遂に回教徒の最後の根據地グラナダ Granada をも奪ふことができたので、王權は大に振つた。もとカスチラに屬したポルトガル Portugal は、十二世紀に獨立して、ここにも王權が振興した。

東歐形勢の變動　かく西歐では中央集權が行はれた頃、中歐のドイツは反對に分解したが（五八頁參照）、東歐ではアジヤ民族の侵入で形勢が激變した。卽ちアジヤ大陸を席捲した蒙古人は、十三世紀の初め、ロシヤの南部を侵し、後又ロシヤ、ドイツ、ホンガリヤを荒した後、黑海の北にキプチャック Kiptchak 汗國を建てて、ロシヤを威服した。他方蒙古人に逐は

オスマン＝トルコの侵入

B ⑨

チムール

東ローマ帝國の滅亡

トルコの發展

れたオスマン＝トルコ(Osman Turks)はカスピ海の東から小アジヤに移つて國を建て、今のトルコ國の基をなし、漸次小アジヤを併せ、遂にバルカン半島(Balkan)に渡つて、その大部分を攻取り、東ローマ帝國の命脈が危くなつた。當時中央アジヤからペルシヤ方面にかけて威を振つたチムール(Timur)が、東ローマ帝國を援けてトルコ軍を破つたので、トルコの勢衰ろへ、東ローマ帝國は一時救はれた。

東ローマ帝國の滅亡　然しチムールの死後、トルコは再び興り、一四五三年遂にコンスタンチノープルを陷れて、東ローマ帝國を滅ぼした。トルコはこゝに都を奠め、この後更に四方を征服し、遂に三大陸に跨る大帝國となり、キリスト教諸國を脅やかすやうになつた。

ムハメッド二世*

東ローマ帝國はその後半は國勢甚だ振はなかつた。然し長い間東方の諸民族の歐洲侵入を防いで西歐諸國に發達の餘裕を與へた功は沒せられない。

*これがコンスタンチノープルを陷れたトルコの皇帝である。

中古人心の鬱屈

自由研究の風

人文主義

第三編　近古

第一章　新氣運の發動

1　文藝復興

古學の復興　中古の歐洲諸國は萬事宗教に拘束され、學問の自由な研究も許されなかつたので、知識が開けず、人心が鬱屈してゐた。然るに十字軍頃から東西の交通が開け、西歐諸國民の知識が進んで來たので、十三世紀頃から宗教の束縛を離れて自由にギリシヤ、ローマの古典を研究する風が起り、イタリヤのペトラルカ(Petrarca)、ダンテ(Dante)、ボッカチオ(Baccacio)等を先驅とする、文藝復興(Renaissance)の時代となつた。この學風を人文主義(Humanism)といふ。後その學風はドイツ、フランス、イングランド等に傳はつた。

ダンテ

美術の復興　人文主義の學風と共に、美術も亦教會の因襲を脱して

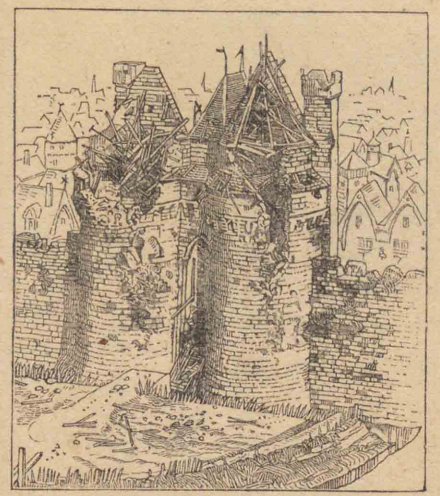
『ナンドマのスツスシ聖』作ルエァフラ

彫刻と繪畫
建築
時計眼鏡
磁石
火藥

ラファエル

ナルド・ダ・ヴィンチ、建築のブラマンテ Bramante

火藥の威力*



自由に發達し、十五六世紀頃、繪畫や彫刻が、イタリヤで目ざましく發達し、彫刻は上古ギリシヤの壘を摩し、繪畫は前古無比の進歩を見、建築にも復興式といふ新樣式が出た。彫刻と繪畫のミケランジェロ Michaelangelo、繪畫のラファエル Raphael、レオナルド・ダ・ヴィンチ等、その名最も高く、何れも不朽の大作を遺した。

機械の發明　自由研究と因襲打破の精神は、實生活に關する諸種の發明を促がし、時計と眼鏡とは、既に十四世紀中に發明せられたが、十五世紀以來、磁石が廣く應用されて遠洋航海が起つた。又その頃から火藥が銃砲に應用されるやうになつて、

*堅固なる封建諸侯の城櫓も、大砲の射撃には、無殘に崩壞した。

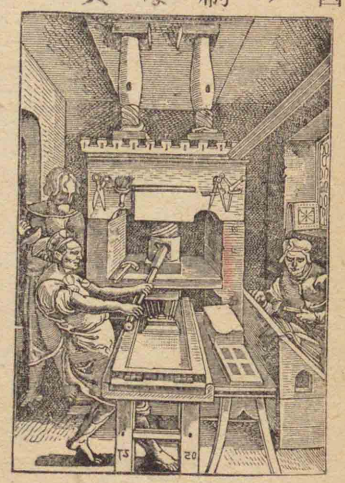
ラファエル作『聖シスツスのマドンナ』

文藝復興の時代に、イタリヤに出た美術の大家の數は非常に多いが、中でも畫家の第一人者はラファエル＝サンチ（Raphael Santi）である。ラファエルは一四八三年ウルビノ（Urbino）に畫家の子として生れ、青年時代ペルジヤ（Perugia）及びフロレンス（Florence）に於て大に技を磨き名を顯はした。一五〇八年ローマに出で、法皇ユリウス二世（Julius II）及びレオ十世（Leo X）に重く用ひられ、法皇廳の天井及び壁の畫を以て、其の名聲が遠近に轟ろいたので、四方から敎を請ふものや、作を依頼するものが跡を絶たなかつた。ラファエルは容姿端麗、性質溫順であつた。其の春風の如き和氣と、淸爽の氣分とが、自然その畫風にも現はれ、其の畫は優麗溫雅の氣に充ち、聖母畫の如き、殊にその得意とする所で、聖母の描法に一紀元を作つた。不幸短命で、三十七歳を以て、世を去つたにも拘はらず、其の遺作の多いことは驚くべく、上記法皇廳の大作以外でも、千二百餘點に及び、歐洲著名の大博物館には、彼の作を一二點有たない所はない位である。以て彼がいかに一意斯道に精進したかが分る。本圖に示すものは、その多く遺れる聖母畫中、その最後の作として最も有名なものの一である。もとイタリヤのピアチェンツァ（Piacenza）の僧院のために描いたものといはれるが、今はドイツ、ドレスデン博物館の所藏に歸して、同館を飾る王冠となつてゐる。

戰術が一變し、封建制度の崩るる一因となつた。又十五世紀の中頃ドイツ人グーテンベルヒ（Gutenberg）は金屬活字の印刷術を發明して、書籍の供給が容易になり、知識の普及、文化の發展に大きな貢獻をなした。

2 地理上の發見

東方遠征の氣運 十字軍以後西歐に於ける東洋貨物の需要が增したが、蒙古が起つてから、ローマ法皇は之と結んで共に回教徒に當り、且つキリスト敎を元（グン）の領土に弘めようと志したので、歐洲から僧侶や商人の陸路支那に赴くものが多かつた。中でもヴェニス（Venice）の商人マルコ・ポーロ（Marco Polo）は、十三世紀の後半元の朝廷に仕へ、歸國の後見聞記を著はし、東方の富を說いたので、ヨーロッパ人は益〻東洋に興味を有つて來た。



發明直後の活版所

トルコの東西交通梗塞

B⑧

ヘンリー航海親王の西アフリカ探検

C①

ヴァスコ＝ダ＝ガマ

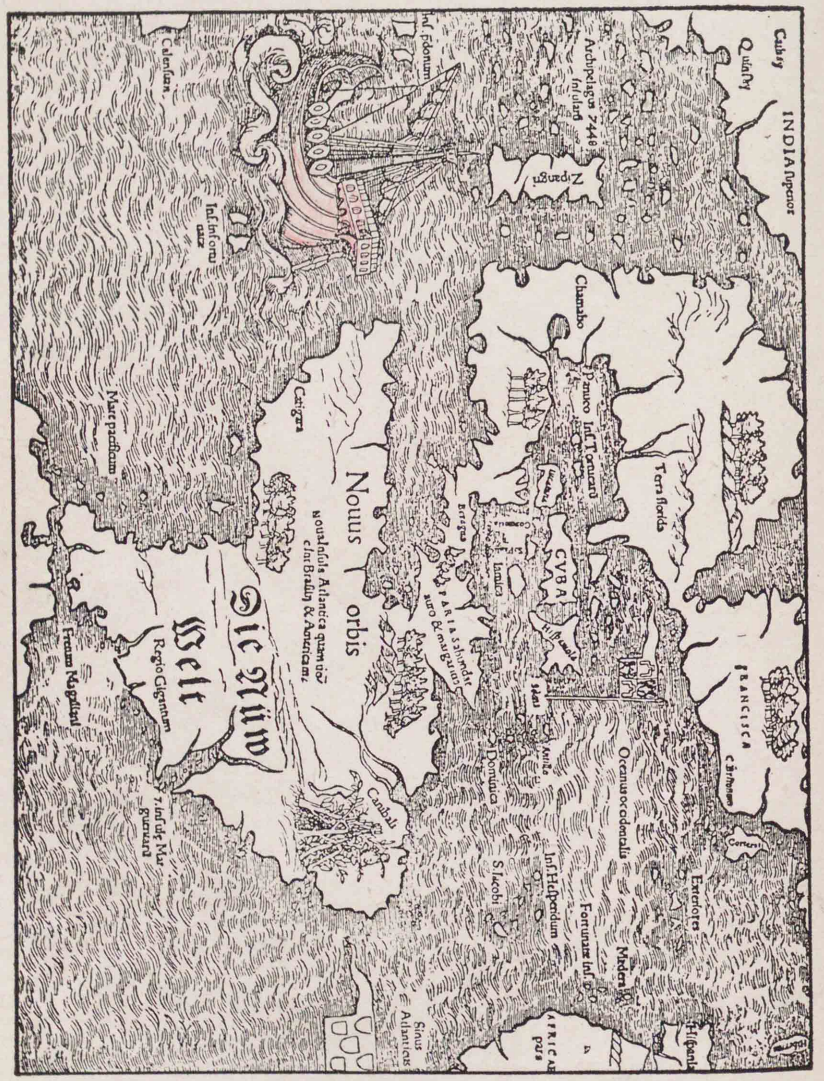
コロンブスの大西洋横断

航路探検の動機 然るに十四世紀以來トルコが起つて、東西交通の路を塞ぎ、東洋の貨物に重税を課したため、その市價大に騰貴した上に、イタリヤの都市が、地中海貿易の利益を獨占したので、西歐諸國は海路から東洋に直航し、直輸入をしようと思ひ、その航路を探檢するやうになつた。

印度航路の發見 その頃回教徒の住む北アフリカの南にキリスト教國があるといふ傳説があつた。それでポルトガルの王子ヘンリー(Henry the Navigator航海親王)は、海路からその國を發見し、共同して回教徒を討たうと思ひ、十五世紀の初めから年々探檢船を出し、頻りにアフリカ西岸に沿うて南航させたが、王子の歿後バーソロミュー＝ディヤズ(Bartholomew Diaz)は一四八六年遂に喜望峰に達し、一四九八年にはヴァスコ＝ダ＝ガマ(Vasco da Gama)が之を廻つて、印度のカリカット(Calicut)に達し、印度航路が初めて發見された。

アメリカの發見 是より前にジェノア(Genoa)の人コロンブス(Columbus)は、大西洋を西に航するのが、印度への近道であると信じ、イスパニヤ女王イサベラ(Isabella)の

21–22, (1) (2)　21–22, (1)　20, (1)



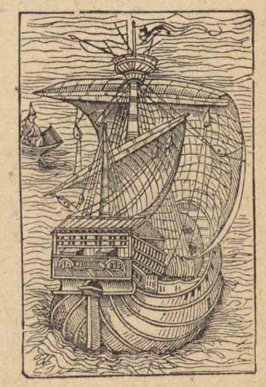
圖地界世新の期初紀世六十

十六世紀初期の新世界圖

古い地圖の中には貴き史料となるものが少くない。或は現在との比較によつて地形の變化を見せ、或は當時の地理的知識の程度を示し、或は政治的勢力の分布を表はす等、古地圖の價値は甚だ大である。特に十五世紀から十六世紀に亙つて新地が續々發見された時代の古地圖は、地理的知識の進歩を示す上に於て興味が甚だ深い。表の圖は宗教改革時代のドイツの地理學者セバスチヤン=ミュンステル(Sebastian Münster)の大地誌にある新世界(アメリカ兩大陸)圖の複寫である。この書は一五四〇年に出版されたから、地圖はその前の千五百三十年前後の知識を代表するものと見てよからう。南アメリカの處に『新世界』(Die Nüw Welt)と大書してある。中米の東の海上、カリブ海附近は、さすがにコロンブス以來歐洲と往復の多かつた處だけに、比較的正確になつて居るが、北米大陸の西岸及び北部は全部想像で書かれてゐる。左方帆船の上にある長方形の島が Zipangri 即ち日本で、その傍に七千四百四十九の群島と記してあるのも面白い。

コロンブスの自信と忍耐

マジェラン



コロンブス時代の船*

タリヤ人アメリゴ=ヴェスプッチ(Amerigo Vespucci)の名に因んで、新大陸はアメリカ(America)と呼ばれるやうになつた。

今では海上ホテルのやうな豪華な旅客船で四五日で往來される大西洋を、コロンブスは小さな帆船で二ヶ月も西へ西へと進んだが、陸の影も見えないので、水夫等は失望して中にはコロンブスを海に突き落さうと企つるものさへあつた。然し彼は深き自信を有し、忍耐力が強かつたので、水夫等をすかしなだめて、七十日を過ぎて、遂に西印度諸島の一に達した。

世界の週航　その後、ポルトガル人マジェラン(Magellan)はイスパニヤ王の命を受け、大西洋を南下し南アメリカ大陸を廻り、太平洋を横斷して、フィリッ(Philippine)

助力を得て、一四九二年大西洋を横ぎつて圖らずも西印度諸島に達し、更に三回の航海を重ねて、中アメリカ等をも探檢したが、それが新大陸であることは、その歿後にわかり、後南米を探檢して詳細に報告したイ

*アメリカ發見後、直に出版されたコロンブスの書簡のラテン譯に挿入せる木版畫を寫したもの。

フィリッピン諸島發見

ポルトカル人の東方活動

C①

イスパニヤ人の西方活動

ピン諸島を發見した。彼はそこで横死したけれども、部下の者は印度洋を經て、一五二二年無事歸國した。これが最初の世界週航で、これで地球の球形なことが初めて實證された。

ポルトガル、イスパニヤの活動　印度航路が開かれてから、ポルトガル人は東方アジヤ方面に活動し、印度のゴア(Goa)を根據地として、セイロン(Ceylon)、マラッカ(Malacca)を取り、進んでマカオ(Macao)を永代租借して支那と通商を開いた。西方では一五〇〇年カブラル(Cabral)が發見した南米のブラジル(Brazil)を自國領とした。イスパニヤは力を西方アメリカ大陸に用ひ、十六世紀の前半コルテス(Cortes)はメキシコ(Mexico)を、ピサロ(Pizarro)はペルーを征服して中、南米に大領土を得、その後

イスパニヤ人とメキシコ人との戰＊

＊メキシコ土人の手に成る當時の畫を寫す。馬上劍を揮へるはイスパニヤの將。其下に鳥の羽をつけて進擊するのは土人の同盟者。上方に絞殺せられてゐるのは敵に内應した者。

45, (1)

21–22, (1) (4)

ポルトカル及びイスパニヤの富强

東方で又フィリッピン諸島を占領し、マニラ(Manila)を根據地として、一時我が國とも交通した。

かくてポルトガルは盛に東洋貿易を行つて巨利を收め、イスパニヤは土人を酷使して新大陸の金銀を採掘して自國を富ましたので、兩國共に富强を誇つた。然し兩國の政策はその植民地から利益を搾取する一方で、その進步發達を圖らなかつたので、遂に不成効に終つた。

十字軍以來動き出した歐洲の新氣運は、十五、六世紀に於てポルトガル、イスパニヤ兩國民をして、有色人に先がけて世界に雄飛させた。かくて今日の白人の世界的優越權の基ができたから、この時代は世界史的に甚だ重要である。

第二章　宗教改革とその影響

1　宗教改革

宗教改宗の發端　中古末期の宗教改革の企(六四頁參照)が失敗して後、教會

宗教改革の氣運

マルチン＝ルーテルの敢爲

C②

ルテール*

の腐敗俗化は益〻甚だしかつた。それで文藝復興期になり、人智が進んだから、宗教改革の氣運は大に熟して來た。十六世紀の初め、法皇レオ十世はセント＝ペートル大寺改築費を得るため、罪障消滅札(Leo St. Peter Indulgence)をドイツで賣らせ、その弊害が多かつたので、同國サクソニヤ(Saxony)の神學教授マルチン＝ルーテル(Martin Luther)は大に憤激し、一五一七年敢然その販賣を攻擊した。そのため彼は法皇から破門されたが、ルーテルは破門狀を燒いて、その決心を示した。

罪障消滅札販賣

チャールス五世とルーテル　その頃オーストリヤのハプスブルグ家から出た、イス

*ドイツ畫家ルーカス＝クラナハがルーテルの在世中に描いた像を寫す。

チャールス五世の大領土

C②

聖書の飜譯

チャールス五世とフランス王とのイタリヤ爭奪

パニヤの王はチャールス一世であつたが、やがてドイツ皇帝をも兼ね、チャールス五世と稱した。それでその領土の廣大なこと歐洲第一であつたが、法皇を味方にして更に北イタリヤをもフランスから奪はうと思ひ、一五二一年國會をウォルムス(Worms)に開き、ルーテルを召出し、その說の取消を求めた。しかしルーテルは頑として之を拒んだので、皇帝はルーテルを法律保護の外に置いた。

それでルーテルの身は危ふくなつたが、サクソニヤ公の保護を受けて、ワルトブルグ城(Wartburg)に隱れて身を安んじ、新約聖書をドイツ語に飜譯して、一般人民に信仰の典據を與へた。

チャールス五世

新教の傳播　その頃ルーテルの說は次第にドイツ內に弘まり、歸依者も日を追うて增したが、ドイツ皇帝はフランス王とイタリヤを爭ふこと二十四年に及び、その間トルコがオーストリヤに侵入する等のことがあつて、皇帝は十分ルーテル派を抑ふることができ

シマルカルデン同盟

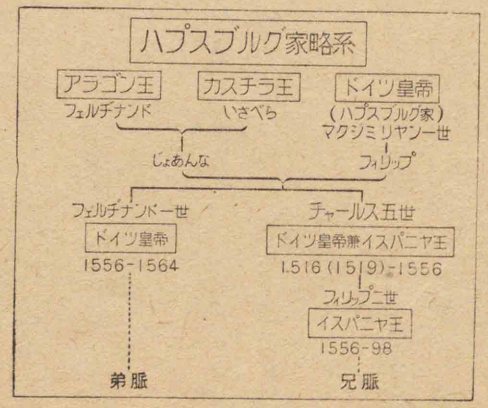
C②

ハプスブルグ家の分脈

ず、ドイツ北部の諸侯の中にもルーテルの新教に歸依するものが多く、シマルカルデン同盟(Schmalkaldic League)をつくつて、自衛を圖つた。皇帝は武力を以て新教を撲滅しようとして、一五四六年シマルカルデン戰爭が起つたが、フランス王が政略上新教徒を助けたので、皇帝は到底新教撲滅の望がないのを見て、一五五五年アウグスブルグ(Augsburg)で宗教和約を結び、諸侯及び都市が新舊兩教の何れかを選擇する自由を認めた。

その後、ルーテルの新教は益〻勢力を得、ドイツ北部デンマルク、スウェーデン、ノルウェー等に傳はり今日に及んでゐる。

ドイツ皇帝チャールス五世はアウグスブルグ和約の後、心樂まず、やがて弟フェルヂナンド(Ferdinand)を皇帝に選ばせ、これにオーストリヤの領土を傳へ、子のフィリップ二世をイスパニヤ王としてこれにその他の領土を讓つて隱退した。かくてハプスブルグ家は兄脈



ツウィングリの改革

カルヴィンの改革

ヘンリー八世

と弟脈とに分れた。

スウィスの宗教改革　ルーテルと略〻同じ時、スウィス(Switzerland)にもツウィングリ(Zwingli)が出て、キリスト教の改革を唱へたが、國内の舊教徒と戰つて敗死したため、その派は遂に振はなかつた。やゝおくれてフランスにカルヴィン(Calvin)が出て、新説を唱へ、本國政府の壓迫を遁れて、スウィスのジュネーヴ(Geneva (Genève))に來て信徒を得、その地の政治改革も遂げ、その教はスウィス、フランス、ネーデルランド(Netherlands)、スコッ(Scotland)トランド等に弘まつた。

カルヴィン

ヘンリー八世

イングランドの宗教改革　ドイツに宗教改革の起つた頃、イングランド王ヘンリー八世は、ルーテルの説を批難し、ローマ法皇から『信仰保護者』(Defender of the Faith)の稱號を得たが、後、法皇の承認を待たず、自ら皇后を離緣したので、法皇から破門さ

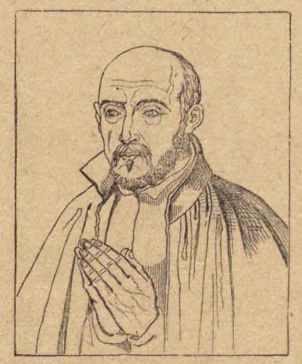
イングランド國教の起原

舊教の覺醒

耶蘇會

れた。然るに議會は最高權令を通過して、王をイングランド教會の首長(Church of England)としたので、法皇から獨立した國教ができた。その後一時舊教が再興したが、一五五八年、女王エリザベス(Elizabeth)が即位して、再び國教を厲行したので、イングランド教會は確立した。

宗教改革の反動 新教の勃興に刺戟されて、舊教の方でも反省して、教會の積弊を除くと共に、宗教裁判所を設けて異說を嚴禁し、勢力の回復を圖つた。この際イスパニヤ人イグナチウス(Ignatius)ロヨラ(Loyola)は同志フランシス(Francis)ザヴィエル(Xavier)と耶蘇會(Jesuit Order (Company of Jesus))を組織し、軍隊的規律を設けて、絶對に上長の命に服從させ、法皇から布教の許可を得て、盛に海外にも宣教して、舊教の歐洲で失つた所を補つた。ザヴィエルは印度に布教した後、我國に來て天主教を傳へた。



ロヨラ

ザヴィエルその他の宣教師は、日本の諸侯特に九州の諸侯竝に平民の中に多數の信者を

紛亂の二面

イスパニヤの大領土

C①②

獲た。日本人は俊敏だから宗教と共に當時の歐洲の文物をも勘からず採用した。中でも傳來せる鐵砲は忽ち全國に普及し、我國の戰術を一變した。

2 宗教的政治的紛爭

宗教的政治的紛爭 各國に起つた宗教改革の運動は、國内の事情や國際關係と絡み合つて、多くの紛亂をひき起した。それが恰も近代諸國家の發達の時期に當つたので、この時代の戰爭は新舊兩教徒反目の方から見れば宗教戰であるが、各國君主の勢力爭ひの側から見れば政治的抗爭でもある。

イスパニヤの强盛 イスパニヤ王フィリップ二世は本國の外に、歐洲ではネーデルランド(今のベルギー、オランダ)ミラノ(Milano)、ナポリ(Napoli)等、海外ではアメリカの大植民地を領し、その富强遙に列國を凌ぎ、

フィリップ二世

21-22, (1) 25-26

ネーデルランドの事情

ユトレヒト同盟

オランダの建國

C③

フランスとの戰に勝ち、トルコの海軍をレパントの戰で粉碎し、ポルトガル王位を兼ねて、東洋方面の同國植民地をも支配した。Lepanto 然しその領土が各地に散在し、統一を缺いだので、王は各地の特權を奪ひ、新教を撲滅して之を統一せんとした。

オランダの獨立 ネーデルランドは古來種々の特權を有し、商工業が發達し、その北部にはカルヴィン派の新教徒が多かつたが、フィリップ二世は固く新教を禁じ、諸市の特權を奪つたので、Calvin 一五七二年遂にオレンジ公ウィリヤムを總督として、獨立戰を起した。Orange William フィリップは舊教徒の多い南部十州の特權を回復して歸順させたが、北部七州はユトレヒト同盟を組織し、次で獨立を宣言し（一五八一）、國號をネーデルランド合衆國と定め、ウィリヤムを統領に推して戰を續けた。Utrecht Union これが今のオランダの建國である。後フィリプ三世が立つて遂に休戰を約し、オランダは事實上獨立國となつた。

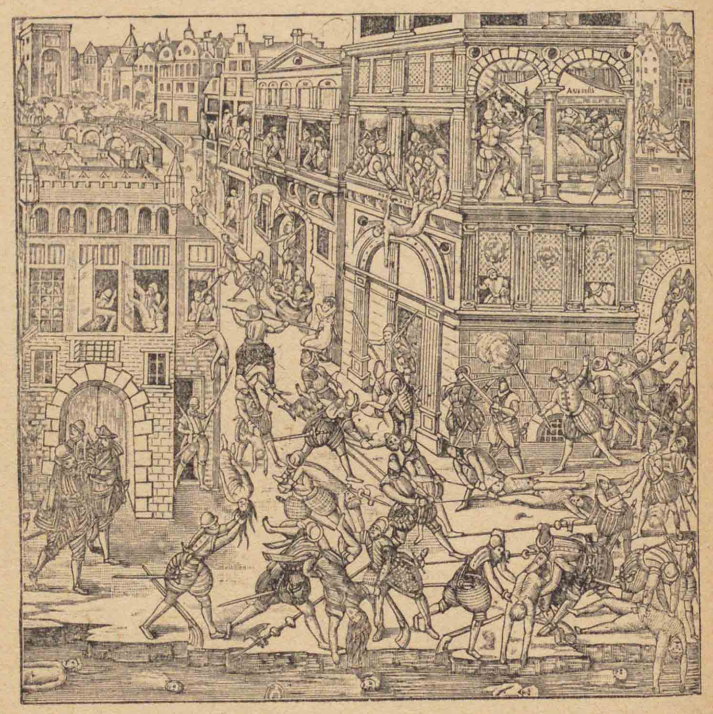
オレンヂ公ウィリヤム

27-28, (1)　25-26

新教徒抑壓政策

セント＝バーソロミューの虐殺

セントニバーソロミュー虐殺の慘狀



フランスの內亂 フランスにはカルヴィン派の新教徒があつて、ユグノー！Huguenots と呼ばれた。フランス王は歷代政略上ドイツの新教徒を助けたが、自國の新教徒は、これを抑壓したので、兩教徒の爭激しく、遂に內亂が起り、兩教徒各〻外國の力を借つて互に勝敗があつた。その間一五七二年八月、國王チャールス九世の母后カザリン Catherine de Medici の命で數萬の新教徒が殺された『セント＝バーソロミューの虐殺』St. Bartholomew の大慘事があつた。その後內亂は益〻激

ブルボン朝

ヘンリー四世

化したが、次の王ヘンリー三世が暗殺され、ヴァロア王朝が斷絶したので、ナヴァル王がフランス王位について、ヘンリー四世と稱し、ブルボン王朝を開いた。Valois Navarre Bourbon 王は一五九八年ナントの Nante 勅令を發し、信仰の自由を許したので、内亂が始めて鎮定した。

戰役の起因

三十年戰役 ドイツではアウグスブルグの和約で一時鎮まつた新舊兩教徒の爭が、十七世紀になつて再び起つた。當時新教徒の多いボヘミヤの王フェルヂナンドは耶蘇會に屬して、新教徒を抑壓したので、國人が怒つて、一六一八年、王を國外に放逐し、Bohemia Ferdinand 三十年戰役が起つた。The Thirty Years' War

戰役第一期

翌年フェルヂナンドはドイツ皇帝となつたが、ボヘミヤ人は新教徒のファルツ伯フレデリックを迎へて王としたので、皇帝はボヘミヤを攻めてフレデリックを逐ひ、叛亂は一たび平らいだ（戰役第一期）。Count Palatinate Frederick

然るにデンマルク王クリスチヤン四世は、イングランド、オランダ兩國と結び、ドイツに侵入して新教徒を助けたので、ドイツの内亂は Christian

戰役第二期

國際戰となつたが、デンマルク軍は名將ワレンスタインの率ゐる皇帝の軍に破られて退いた（戰役第二期）。Wallenstein かねて北歐の霸權を志し、機會を待つて居たスウェーデン王グスタフ＝アドルフは、この時新教徒保護を名としてドイツに侵入し、連りに皇帝軍を破つたが、一六三二年ワレンスタインとリュッツェンに戰つて戰死し、Gustavus Adolphus Lützen これからスウェーデン軍は振はず、皇帝の軍も、ワレンスタインが暗殺されて勢が衰へた（戰役第三期）。その後フランスはハプスブルグ家を弱むるため、スウェーデンを援けてドイツに侵入し、各地を荒した（戰役第四期）。かくて大亂三十年に

グスタフ＝アドルフ

ワレンスタイン

戰役第三期

戰役第四期

グスタフ＝アドルフ

ウェストファリヤ條約

C④

ドイツの荒廢

フランス、スウェーデンの振張

リュツェンの戰

及び、各國共に疲れて、一六四八年ウェストファリヤ(Westphalia)の和約が成立した。

この和約で (1)ドイツの新舊兩教徒は共に同權利を得、(2)スウェーデンは、ポメラニヤ(Pomerania)の西部を得て、ドイツ國會に參與する權利を得、(3)フランスはエルザス(Elsass (Alsace))の大部分と、メッツ(Metz)、ツール(Toul)、ヴェルダン(Verdun)等の地を得、(4)オランダ、スウィスの二國は、共に獨立を承認された。

三十年戰役の結果 ドイツはこの戰役の戰場となつて、最も禍され、土地は荒れ、人口は減じ、文化はすたれ、產業は衰退してフランスとスウェーデンとは、何れも國勢を振張して、この後益々

無敵艦隊撃破

活躍するやうになつた。

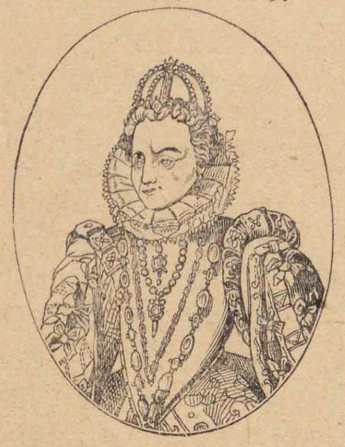
宗教改革に基づく、宗教的政治的戰爭は三十年戰役で一段落を告げ、この後の戰爭は國家主義に基づく政治的戰爭である。

第三章　近代諸國家の發達

1　イングランドの興隆

エリザベス時代の發展　イングランドでは女王エリザベスの長い在位(一五五八―一六〇三)の間に、國勢が大發展を遂げた。女王はオランダの獨立を助け、又イスパニヤ王フィリップ二世がイングランドの舊教徒を後援するのを抑へたので、フィリップは謂はゆる無敵艦隊(Invincible Armada)を以てイングランドを襲つたが、海將ドレーク(Drake)等の率ゆる艦隊のためにイギリス海峽で破られ、殘艦隊は暴風にあつ

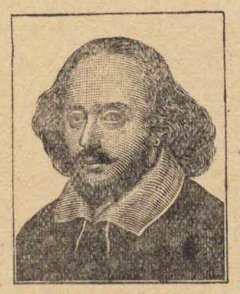
女王エリザベス



その後の興隆

文藝の隆盛

て多く沈没した(一五八八)。これからイスパニヤの國力は、その制海權と共に衰へた。之に反してイングランドではこの後國民の意氣が大に揚がり、海軍が發達し、商工業が興り、他日世界帝國となる基ができた。國力の發展と共に文藝も亦榮え、文豪シェークスピヤ(Shakespeare)を始め、詩人にスペンサー(Spenser)、哲學者にベーコン(Bacon)等が出て、謂はゆるエリサベス時代の盛觀を呈した。



シェークスピヤ

ウォルター・ローリー(Walter Raleigh)がヴァージニヤ(Virginia)植民地を建てて、アメリカに於ける英國の大植民事業の端を開いたのも、又東印度會社が起つて、英國が將來アジヤに雄飛する基ができたのも、共にエリザベス時代であつた。

スチュアート朝の失政 女王エリザベスが歿してチュードル朝が絶え、スコットランド王が、血緣によつてイングランド王を兼ねてジェームス一

襲來の隊艦敵無

スチュアート朝

その失政

世と稱し、スチュアート(Stuart)朝を開いた。この王は王權神授說(Divine Right of King)を信じ、憲法を守らず、屢〻議會と衝突した。次の王チャールス一世も亦同說を固執して、議會を解散して十一年間も之を召集せず、その間外交は消極的政策を取り、國民には重稅を課する等の失政が多かつたので、大に民心を失つた。

第一革命 チャールス一世はインングランド國教をスコットランドに屬行しようとしたので叛亂が起つた。王は戰費を得るため已むを得ず議會を召集したが、議會は王を攻擊して、その要求を拒んだので、王

英國諸王朝略系

(1) ヘンリー七世 チュードル朝 1485-1509

(2) ヘンリー八世 1509-47

(3) エドワード六世 1547-53

(5) えりざべす 1558-1603

(4) めりー 1553-58

(スコットランド王) 女 めりー

(6) ジェームスー世 スチュアート朝 1603-25

(7) チャールスー世 1625-49

女 女 (ハノーヴァー侯)

(8) チャールスニ世 1660-85

(9) ジェームスニ世 1685-88

(10) めりー 1689-94

(10) (オレンジ公) ウィリヤム三世 1689-1702

(11) あん 1702-14

ハノーヴァー朝

(12) ジョージー世 1714-27

大内亂

國王の處刑と王政廢止

武斷政治

チャールス一世

て大に王黨を破つたが、議會の過激派は遂に溫和派を壓倒して王を裁判し、國民の公敵としてこれを死刑に處し、王政を廢止した(一六四九)。

ロクロンウェル

クロンウェルの政治　クロンウェルはアイルランド及びスコットランドの王黨を平らげ、共和政府の長官となり、內は武斷政治を行つて國民の風紀を肅正し、外は航海條例(Navigation Act)を發して、オランダの海運業に大打擊は武力を以て、之を屈服させようとし、議會は兵を募つて之に反抗し、一六四二年から八年に亙る大內亂となつた。その間議會黨に名將クロンウェル(Cromwell)が出

西洋の君主は力を以て民を抑へようとし、民も亦力を以て之に抗し、甚だしきは民が王を裁判して之を死刑に處する場合もある。これを家族的國家日本の天皇と臣民とが、義は君臣にして情は父子の如きに比すれば、其の間に實に本質的の差がある。

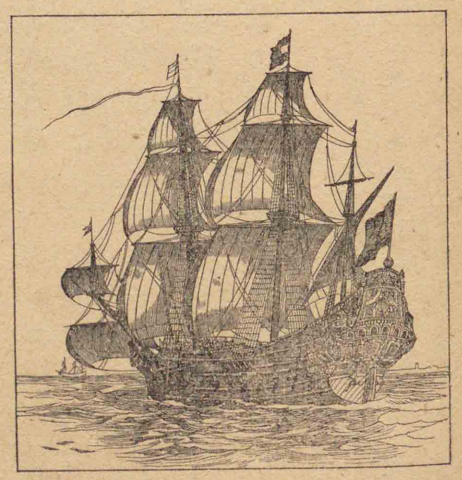
航海條例

名譽革命

を與へ、又フランスと結び、イスパニヤと戰ひ、大に國威を揚げた。然しその政治が餘りに嚴格に過ぎたので、國民は之を怨んで、その死後やがて王政を回復した。

第二革命　一六六〇年チャールス一世の子チャールス二世が迎へられて王位に卽いたが、この王も次の王ジェームス二世も、共に王權神授說を抱き、憲法を輕んじ、且つ舊教に好意をもつたので、國民は激昂して、一六八八年王の女婿でオランダの統領であつたウィリヤムと、その妃メリー(Mary)とを迎へ、議會の決議した『權利の宣言』を承認させて國王とした。これを『名譽革命』(The Glorious Revolution)といふ。これからイングランドの憲政が大に確立した。

ジェームス二世は舊教に傾いて居たので、卽位前からその王位繼承權を否認せんとする



ロクロンウェル時代のオランダの軍艦

ホウィッグ黨とトーリー黨

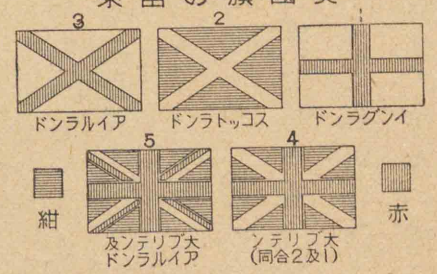
政黨內閣の起原

大ブリテン國の成立

ハノーヴァー王朝

一派があつた。之をホウィッグ黨(Whigs)といひ、その反對黨をトーリー黨(Tories)といつた。名譽革命前までは、兩黨が同じ內閣に聯立したが、革命後ウィリヤムはホウィッグ黨だけで、新たに內閣を組織させた。これが政黨內閣の初めである。

英國旗の由來



イギリスの發展 イングランドはジェームス一世以來スコットランドと同王を戴きながらも、各〻議會をもち、まだ一國にはならなかつたが、十八世紀の初、女王アンの時、兩王國が合併して、大ブリテン王國(Great Britain)(イギリス)(以下英國と記す)となつた。アンの歿後、一七一四年ジェームス一世の外曾孫に當るハノーヴァー公(Hanover)が、ドイツから來て、英國王ジョージ一世(George)となつた。これがハノーヴァー朝の開祖で、その血脈が、今の英國王室ウィンゾル朝(Windsor)に續いてゐる。

ジョージ一世はドイツに生れてドイツで育ち英語を解しなかつたので內閣會議に列せず、又ドイツに居ることが多かつたので國政は專ら內閣が之に當り、國王の實權は議會

5が今日の英國旗ユニオン＝ジャック(Union Jack)である。この名はスチュアート朝の祖ジェームス一世から出て居る。ジェームスはフランス語でジャック(Jacques)といふ。王は自署に好んでこのフランス風を用ひた。王の時までイングランドとスコットランドはまだ眞に合同して居なかつたが、王は既に國旗に4を用ひた。

英佛政治動向の反對

リシュリュー

マザレン

に責任を負ふ內閣に移つた。

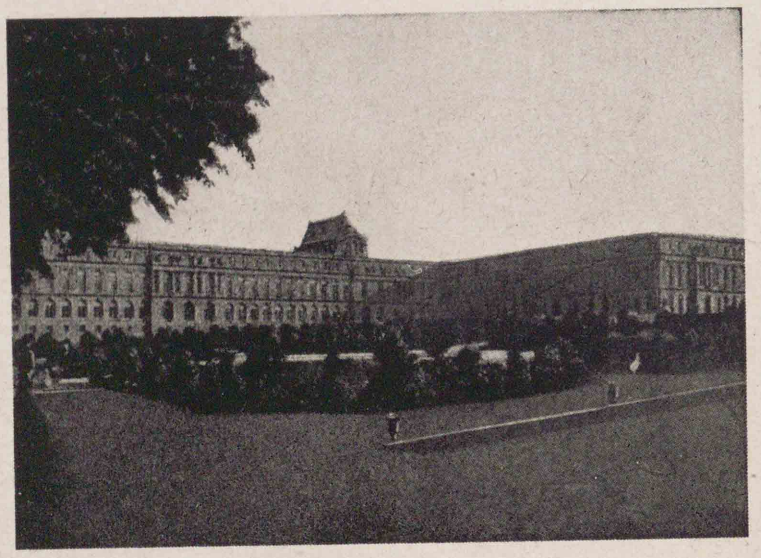
大ブリテン國(イギリス)は十九世紀の初めアイルランドをも合併して「大ブリテン及びアイルランド聯合王國」(The United Kingdom of Great Britain and Ireland)と稱した。略して英國と呼ばれる。

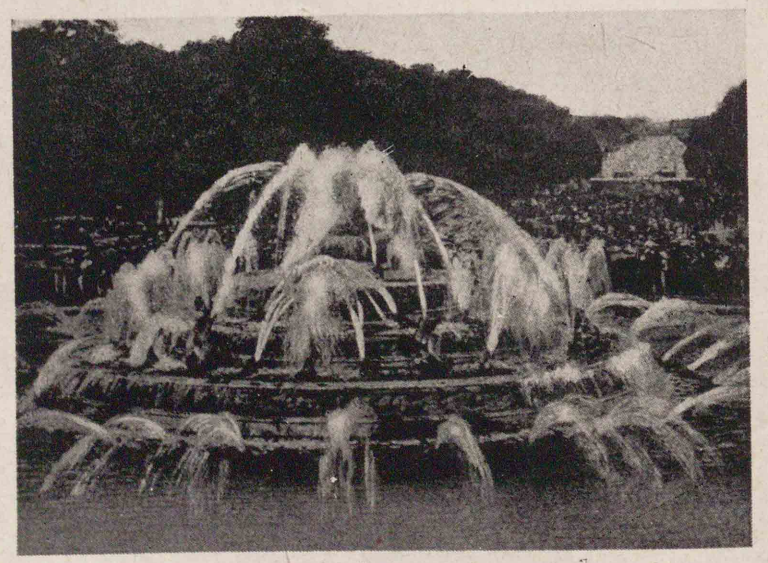
2 フランスの强盛

リシュリュー

王權の擴張 十七世紀に、イングランドでは民權が次第に伸びたが、フランスでは反對に次第に君主獨裁に向つて進んだ。ブルボン朝の開祖ヘンリー四世の次に、子ルイ十三世が立つたが、宰相リシュリュー(Richelieu)が諸侯を抑へて王權を擴張し、三十年戰役に干涉してハプスブルグ家を抑へた(八七頁參照)。

次でマザレン(Mazarin)が次の王ルイ十四世の宰相となり、內治も外交もリシュリューの政策を續けて、ドイツ及びイスパニヤを破つて領土を廣め、內





ヴェルサイユ宮殿及びその庭園

ルイ十四世の親政

ブルボン朝全盛時代

は中央集權を完成し、外には大に國威を揚げた。

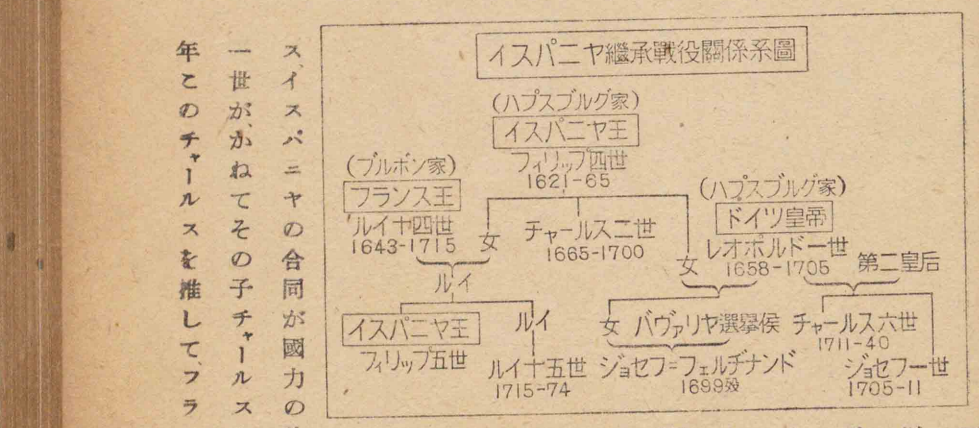
ルイ十四世時代 マザレンの死後、王は宰相を置かないで、親ら政治を行ひ、コルベール Colbert を用ひて財政に當らせ、國内の產業を保護發達させ、又海外の植民貿易の業も振興させた。それで國力が充實して歐洲第一の强國となつたので、外に對しては屢〻侵略戰を起し、内には壯麗なヴェルサイユ宮殿 Versailles を建て、大に文學美術を奬勵したので、フランスの文運は大に發達し、大家が輩出し、佛國文學の黄金時代が現出した。それでフランス語は歐洲上流社會の用語となり、フランスの趣味が各國を風靡し、フランスは文化の中心となつた。實にブルボン朝全盛の時代であつた。

ルイ十四世

イスパニヤ繼承戰役 ルイ十四世は領土を廣めて、益〻國威を揚げようと思ひ、ネーデルランド、オランダ、プファルツ The Palatinate (Pfalz) 等に侵入したが、列國の反抗のために、一度も十分に成效しなかつた。そこでその頃イスパニヤ

ヴェルサイユ宮殿及びその庭園

ヴルェサイユ宮殿こそ、實にフランス、ブルボン朝全盛のルイ十四世時代を語る無上の資料である。この宮殿には廣大な禁苑が附屬し、鬱蒼たる樹林の間に大小の池を配し、一々趣向を異にせる噴水が迸つてゐる。王はこの庭園を造築し、パリ・ヴェルサイユ間に大道を開通し、水道を布設する爲めだけにも、同時に工夫三萬六千人、馬六千頭を用ひたといはれる。その際農民は無報酬に使役されたが、尙二億圓を此の宮殿の爲に費やしたといふから、宮殿は宏壯善美を盡し、全歐洲宮殿建築の模範となつた。王は治世の後半をこゝに送り、文學者、美術家、宮女等を集めて盛宴を張り、一世の驕者を極めた。上圖は正殿の背面、庭園に向へる部分を示し、下圖は禁苑間の噴水の一である。宮殿は今は博物館となり、主として歴史畫が揭げられて居る。一八七一年獨佛戰役の終りに方り、プロシヤ王ウィリヤム一世がドイツ皇帝宣言式を擧げたのも、また世界大戰後、一九一九年、ドイツが屈辱的平和條約に調印させられたのも共に此の宮殿内『鏡の間』であつた。この宮殿の史的意義は獨佛の衝突毎に加はつて行く。



王位繼承問題の起つたのに乘じて同國を併合しようとしたので、遂にイスパニヤ繼承戰役が起つた。この戰役は十三年の長きに亙り、フランスは全ヨーロッパ諸國の半を敵として戰つたが、結局ルイ十四世は列國に抑へられて、僅に目的の一部を達したに過ぎなかつた。

戰役の起因 一七〇〇年イスパニヤ王チャールス二世が嗣子なくして歿し、その遺言で、ルイ十四世の孫フィリップがイスパニヤの王となり、フィリップ五世と稱した。イングランド、オランダ、ドイツ等はフランスとイスパニヤの合同が國力の均衡を破るのを恐れた。それでドイツ皇帝レオポルド一世が、かねてその子チャールスの繼承權を主張してゐたので、三國は同盟して、一七〇一年このチャールスを推してフランス、イスパニヤと戰を開き、イスパニヤ繼承戰役が起つ

た。

戰役の經過及び終局　この戰役にイングランドのマールボロ公(Marlborough)ドイツ皇帝軍の將サヴォイ公ユージン(Eugene, Duke of Savoy)が巧に兵を用ひドイツ、ネーデルランドイタリヤ各方面に轉戰して、度々フランス軍を破つたが、その内に英國に政變があつて、平和主義の内閣ができ、次で從來列國の推して來たチャールスがドイツ皇帝となつたので若しこの皇帝がイスパニヤ王となれば國力均衡の破れる恐れがあつたため、形勢は一變して、一七一三年ユトレヒト(Utrecht)の平和條約が成立した。

ユトレヒト條約　この條約によつて　(1)列國はフランス、イスパニヤ兩國が決して合併しないのを條件として、ルイ十四世の孫フィリップのイスパニヤ王となる事を承認し、(2)英國はフランスからニューファウンドランド、アカヂヤ(Newfoundland, Acadia)、ハドソン灣地方等を取り、イスパニヤからジブラルタル(Gibraltar)とミノルカ島(Minorca)等とを得、(3)サヴォイ(Savoy)はシシリー島を得て王國となり、又プロシヤ(Prussia)も王國の稱號を認められた。(一七二〇年サヴォイはシシリー島をオーストリヤ領サルヂニヤ島(Sardinia)と交換して、サルヂニヤ王國と改稱した)

翌年オーストリヤはイスパニヤ領ネーデルランドミラノナポリ、サルヂニヤを得た。ユトレヒト和約の翌々年ルイ十四世はその豪華の一生を終つた。王の七十年に近い治世中、フランスは大に國威を發揚したけれども、その宮廷の奢侈と度々の戰爭とのため、財政が大に亂れたのは、他日の大革命の遠因の一となつた。

3　ロシヤの興隆

ロシヤの發展　ロシヤは久しく蒙古人に支配されたが、モスコー(Moscow)大公國が起つて、十五世紀末蒙古の勢力を一掃した。大公イヴァン(Ivan)三世の時、東ローマ帝國が滅んだので、イヴァンはその後繼者を以て任じ、ギリシヤ正教の保護者となつた。その孫イヴァン四世は始めて皇帝(ツァール Czar)の尊號を用ひ、領土をカスピ海方面に擴張した。その後内亂が起り、國が危かつたが、一六一三年ミカエル(Michael)・ロマノフ(Romanov)が出て、内亂を鎮めて皇帝となつた。これが世界大戰まで續いたロマノフ家の祖である。

ペートル大帝　十七世紀の末ペートル一世(大帝 Peter the Great)が位に即いたが、當時

大帝の巡歴各種の革新 D①②

海への出口要望 D②

チャールス十二世の活躍

ペートル大帝

チャールス十二世

ロシヤは南はトルコ領、西北はスウェーデン領に塞がれて、西歐諸國との聯絡惡しく、從つてその文化は低く、國勢も振はなかつた。大帝は自らドイツ、オランダ、イングランド等を巡つて、その制度文物を視察し、技術家、軍人、職工等を聘して歸國し、海軍の創設、陸軍の改編を行ひ、又商工業の發展を圖り、大に國力を充實した。

北方戰役 大帝は沿岸地方を取つて海への出口を得ることを必要とし、先づトルコからアゾフ海(Azov)の地方を取り、次にスウェーデン領を分割して、バルト海に出ようと企て、デンマルク、ポーランド(Poland)と結んだ。之がため一七〇〇年北方戰役(The Northern War)が起つた。然るにスウェーデン王チャールス十二世は若年ながら雄略があつて、機先を制して順次デンマルク軍ロシヤ軍を破り、更にポーランドを征服した。然し後ロシヤに深入して、ポルタヴァ(Poltava)の一戰に大敗し、トルコに逃れて再擧を圖つたが成效しないで歸國し、ノルウェーを攻めて戰死した。一七二一年スウェーデンは遂に屈服して和約を結び、ロシヤにバルト海(Baltic Sea)岸地方を割讓したので、大帝は目的を達し、ロシヤはこれから東歐の覇者となり、スウェーデンは次第に衰へた。

スウェーデンの屈服

ネルチンスク條約 D③

この戰役中にペートル大帝はチャールスの不在に乘じ、スウェーデン領を侵略して、ペテルブルグ(Petersburg)を建てて遷都した(一七〇三)。これが今のレニングラード(Leningrad)である。

シベリヤ侵略 是より先、ロシヤのコサック人(Cossacks)は、シベリヤ(Siberia)の侵略を始め、次第に東進して、十七世紀の末には遂にカムチャッカ(Kamtchatka)に達した。又他の一隊は支那の北境に迫り、屢〻清國と衝突したが、ペートル大帝は一六八九年清國とネルチンスク(Nertchinsk)條約を結んで兩國の境を定めた。かくて十八世紀の初にはシベリヤの大部分がロシヤの領土となつた。

大選擧侯

フレデリック一世

フレデリック＝ウィリヤム一世

4 プロシヤの興隆　ポーランドの分割

プロシヤの興起　ドイツの諸國の中でプロシヤ王國が最も興隆した。この國はもと七選擧侯國の一であるブランデンブルグ(Brandenburg)選擧侯國から起つた。大選擧侯と呼ばれるフレデリック＝ウィリヤム(Frederick William)が三十年戰役に乘じてその領土を廣め、その子フレデリックの代になつて、都をベルリン(Berlin)に奠め、イスパニヤ繼承戰役にドイツ皇帝を助けて、王號を許され、一七〇一年からプロシヤ王フレデリック一世と稱した。その子フレデリック＝ウィリヤム一世は勤儉尚武を主義として大に國力を養つた。その子が有名なフレデリック大王で、文武共に秀で、父王の遺した財力と兵力とを用ひて大業を成した。

オーストリヤ繼承戰役　その頃のドイツ皇帝はオーストリヤ公チャールス六世であつたが、男子がないので、特別の相續法を作り、オーストリヤの全領土を皇女マリヤ＝テレサ(Maria Theresa)に讓ることとし、列國は之を承認

戰役の起因

D④

フレデリックのシレシヤ占領

アーヘンの和約

した。然るに皇帝が歿すると、バヴァリヤ(Bavaria)公はフランスの後援を得て、自己の相續權を主張し、オーストリヤ繼承戰役が起つた(一七四〇)。その結果プロシヤはシレシヤ(Silesia)の地を併せて、國勢を振興した。

フレデリック大王

プロシヤのフレデリック大王はオーストリヤ繼承問題の最中に卽位し、形勢の切迫せるを見、急に出兵してオーストリヤ領シレシヤを占領して、その割讓をマリヤ＝テレサに迫つた。マリヤ＝テレサは大にこれを憤つたけれどもバヴァリヤフランス以下聯合してオーストリヤ軍を破つたので、やむを得ずシレシヤを大王に割いて講和し、ホンガリヤ(Hungary)人の助力を得て聯合軍と戰ふこと八年に及んだが、一七四八年アーヘン(Aachen, Aix-la-Chapelle)の和約が成り、列國はプロシヤのシレシヤ保有を認め、他の侵地は互に返還し、又マリヤ＝テレサの相續を認めた。

七年戰役　マリヤ＝テレサは機を見て、シレシヤを回復せんとし、ロシヤ、サクソニヤと聯合してプロシヤに當らうとした。この頃英佛兩國が相反目し、英國はハノーヴァーを守るためプロシヤに近づいたの

國際關係の大變化

D④

大王の善戰
その苦境
平和成立

大王の治績

マリヤ＝テレサ

で、フレデリック大王は英國と同盟してオーストリヤに備へた。それでオーストリヤは二百年來敵對して來たフランスと同盟した。これは國際關係の大變化であつた。大王は機先を制して急に兵をサクソニヤに進め、七年戰役が起つた。The Seven Years' War

この戰役にプロシヤは英國から戰費の供給を得ただけで獨力で殆んど歐洲の强國全部を引受けて戰つたが大王の用兵が甚だ巧で初めは連勝した。然し後には兵員が缺乏し、英國も戰費を送らなくなり、勢が大に挫け、國都ベルリンも敵軍に占領され、大王は非常の苦境に陷つた。然しその後ロシヤが翻つて大王を助け、佛國もドイツから撤兵して、オーストリヤは孤立したから、一七六三年プロシヤのシレシヤ領有を重ねて確認し、平和が成立した。

フレデリック大王の偉績　大王はオーストリヤから肥沃なシレシヤを取り、七年戰役に武略を發揮し、獨力で苦難を克服し、國威を輝やかし

領土擴張

D③　D①⑤

カザリン二世

た上に、戰後民力の發展のために沼澤の干拓、荒蕪地の開墾、港灣の改修、運河の開通、商工業の奬勵等に努め、又司法を嚴正にし教育を盛にし、特に軍備を擴張する等非凡な才能を現はした。それでプロシヤは一躍して歐洲强國の列に入つた。

カザリン二世　プロシヤのフレデリック大王在位の頃、ロシヤには女帝カザリン二世が君臨した。この女帝は稀なる女丈夫で、ペートル大帝の志をつぎ、大に領土の擴張を圖り、トルコから黑海の北岸地方を取り、ポーランドの分割を行ひ、又意を極東方面の經營にも用ひ、千島列島を探檢させて、その大部分を取り、また我國に對して通商を求めた。

ポーランドの分割　ポーランドは中古以來東歐に獨立したスラヴ種Slavsの國で、一時はその領土甚だ廣く、國勢大に振つたが、十六世紀の後半、選擧王制となつてから、黨爭が激しく、國力大に衰へた。十八世紀の

後半、ロシヤのカザリン二世はポーランドの内訌に乘じて、これに干渉し、遂にプロシヤ、オーストリヤ二國と計つて、一七七二年から一七九五年までの間に、三回に亙つて各自國に接する地方を割き取り、ポーランドは全く滅びた。

コシューシコの擧兵

コシーュシッコ

一七七二年第一回分割の後、ポーランドの志士は選擧王制を廢して世襲制となし國勢の挽回を計つたが、カザリンは之を妨害したので、志士コシューシコ(Kosiuszko)は二回まで義兵を起したが、何れも失敗して、遂に祖國は滅亡の悲運に陷つた。第二回と第三回の分割のときは、西歐諸國はフランス大革命のため東歐に干渉する餘裕がなかつたので、三國は勝手にポーランドを處分することができた(第四編第一章參照)。

その後ポーランド人は、屢、祖國の獨立回復を企てた。然しいつも失敗してゐたが、世界大戰によつて、その目的を達し、滅亡から百二十五年を經て國を再興した。

オランダの東洋貿易

第四章　西歐諸國の植民地經營

オランダの海外發展　十五世紀以來卒先して世界的植民經營をなしたポルトガル、イスパニヤ兩國は、十七世紀には既に大に衰へ(七七頁參照)、オランダが之に代つて盛に世界に雄飛した。オランダ人は早くから仲買運漕業で利益を得てゐたが、イスパニヤから獨立を企てて、リスボン港を閉されたから、一六〇二年自ら東印度會社を建て、東洋と直接取引を開き、ポルトガル、イスパニヤの商權を奪ひ、バタヴィヤ(Batavia)を根據地として、一時臺灣を占領し、又我國との通商を獨占した。彼等は又アメリカ方面にも植民地を開き、十七世紀の中頃まで、世界の通商權を握り、歐洲第一の富國であつた。

北米の英佛植民地　イングランドは女王エリザベスの時、アメリカに始めてヴァージニヤ植民地を開いたが(九〇頁參照)、その後、本國の國教厲行等のため、移住者が增し、ニューイングランド地方から始めて次第にア

31, (1)　27-28, (2) (3) (4) (5)

英國植民地

D⑦

佛國植民地

メリカ東岸に拓殖し、十七世紀の半にはオランダからニューネーデル(New Netherland)ランドを奪つて、ニューヨーク(New York)を建て、十八世紀には、北米東岸一帶の地が十三州の英國植民地となつた。佛國も十七世紀の初、カナダ(Canada)の東部から始めて、次第に奥地に植民し、ルイ十四世の時代にミシシッピ河(Mississippi)の流域に廣大なルイジヤナ(Louisiana)の植民地を起して英國の植民地と對立した。

英國の拓殖

D⑥

佛國の拓植

印度の英佛植民地 英國人はアメリカと共に印度にも著目し、一六〇〇年東印度會社を建てて貿易を開き、モグル(Moghul)帝國の衰弱に乘じて、先づ海岸に地を得、マドラス(Madras)、ボンベイ(Bombay)、カルカッタ(Calcutta)等を建てた。フランスも亦東印度會社を起し、ポンディシェリー(Pondicherry)、シャンデルナゴル(Chandernagor)等を開いて、英人の根據地に對抗した。

英佛植民地の衝突 かく東西共に兩國植民地が相接し、各〻拓殖を競つたので、本國が歐洲で衝突するたびに、植民地にも戰爭が起つた。オーストリヤ繼承戰役の時、佛國東印度會社總督デュプレックス(Dupleix)が、英人

英國のカナダ略取

印度に於ける英軍の勝利

D⑥⑦

パリ平和條約

トッピ

ナポレオン時代の英國宰相ピットの父。

からマドラスを奪ひ、佛人の勢一時英人を壓したが、七年戰役の起つた時、佛國が主力を歐洲内の攻爭に注いだ間に、英國の宰相ピット(Pitt)は戰費を出して、歐洲の戰爭をフレデリック大王に任せ、全力を海外植民地の侵略に注いだので、英國はアメリカではケベック(Quebec)、モントリオール(Montreal)を陷れて佛領カナダ(Canada)を取り、印度では東印度會社のクライヴ(Clive)が、佛人と結んだベンガル(Bengal)國の大軍をプラッシー(Plassey)に破つた(一七五七)。この後印度に於ける佛人の勢は再び振はなくなり、英國の地歩は確立した。

英國の勝利 前後七年に亙つた英佛の植民地戰は、東西共に英國の勝利に歸して、一七六三年パリ平和條約が締結された。

この條約で英國は(1)佛國からカナダ、ケープ・ブレトン島(Cape Breton)、ミシシッピ河以東の佛領及びアフリカのセネガル河(Senegal)地方を得て、(2)佛國にポンディシェリー及びシャンデルナゴルを還し、(3)イスパニヤからフロリダ(Florida)

を取り、(4)その賠償としてイスパニヤにミシシッピ河以西の佛國領を與へた。その後ベンガルの知事クライヴ及びヘースチングス(Hastings)が頻りに土人の諸侯を破つて、英國印度領の基礎を益々固くした。

英國は十七世紀にオランダの海上權を挫いたが、次に海外に進出した英國の競爭者佛國であつた。故に十八世紀は英佛兩國の世界爭覇の時代となつたが、それが遂に英國の勝利に歸したから、英國はその後十九世紀を通じて、獨り世界に雄飛するに至つた。

第五章　アメリカ合衆國の獨立

獨立の原因　アメリカの英國植民地人は、もと信仰の自由のための移住者が多いので、自主獨立の精神が強く、困苦して新地を開き、その繁盛に努めたので、本國政府が本國の商工業を保護するため、植民地の發達を妨げるのに、かねて不平であつた。然るに本國政府は七年戰役後、財政に窮したので印紙條例(Stamp Act)を發して、植民地

アメリカ英國植民地の不平

印紙條例

ワシントン

に課税した。植民地はこの法律が、植民地から、代議士を出せない本國議會の議決によるのを理由として、課税に反對した。政府は印紙條例は止めたが、別に茶、紙等の輸入品に課税したので、植民地は之に反抗し、紛爭の後、遂に武力を以て本國から獨立するに決し、ジョージ・ワシントン(George Washington)を軍の總督に推し、一七七六年七月四日『獨立宣言書』を發表した。

獨立宣言

獨立軍の連敗

獨立戰役　開戰の初め獨立軍の兵は訓練が足らず、兵器糧食も乏しく、連戰敗れたが、歐洲諸國民の中には、獨立軍に同情して或は軍需品を送り、或は義勇兵として來り援

レクシントンの戰*

*一七七五年四月十九日のレクシントン(Lexington)の戰は、獨立戰役の序幕であつた。本圖は或目擊者の筆に成れるものを模したものである。

And for the support of this declaration,
we mutually pledge to each other our
lives our fortunes, & our sacred honour.

獨立宣言書の末文

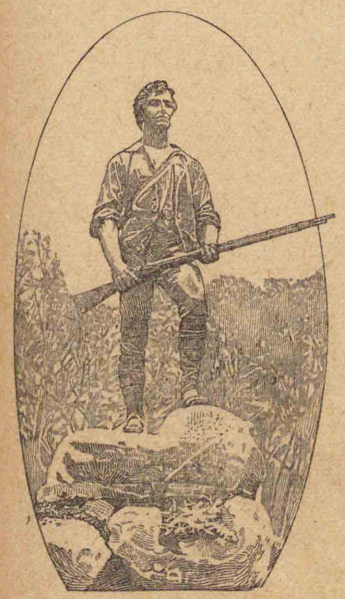
アメリカ合衆國建設宣言

武裝中立同盟諸國の合衆國承認

ヴェルサイユ條約（英國の合衆國承認）

D⑧

くる者が多く、一七七七年獨立軍はサラトガ(Saratoga)に大勝利を得てから、勢が甚だ振つた。ついで十三州植民地は聯邦を組織し、アメリカ合衆國(United States of America)建設を宣言したので、フランス、イスパニヤ兩國は公然之と同盟し、英軍の勢は次第に振はなくなり、その根據地ヨークタウン(Yorktown)がワシントンに攻落されて大勢は決つた。是より先、ロシヤのカザリン二世は英國海軍の横暴を惡んで、武裝中立を唱へたがデンマルク、スウェーデン、プロシヤ、オーストリヤ等それに贊同し、これ等の諸國は皆合衆國の獨立を承認したので、英國も遂に屈し、一七八三年ヴェルサイユ(Versailles)條約で、合衆國の獨立を認め、且つこれにミシシッピ河以東の地を與へ、佛國に西印度のトバゴ島(Tobago)とアフリカのセネガル(Senegal)とを、またイスパニヤにはフロリダ(Florida)及びミノルカ(Minorca)島を割讓した。



米國民兵の像*

*レクシントンの戰を記念するために建てられたものである。

憲法制定

大統領

議會

啓蒙主義

合衆國建設の完成　合衆國はその後各州分離の傾向があつたが、志士の盡力で、一七八七年憲法が制定され、共和政體の聯邦ができ、各州は自治を許され、別に聯邦を總轄する中央政府を設け、三權分立主義で、任期四年の大統領が行政を總べ、州を代表する元老院(Senate)と、人民を代表する代議院(House of Representatives)が議會を組織し、立法に當ることとした。かくてワシントンが初代の大統領に選ばれ、一七九一年國都をワシントンに奠めて、建國の事業が完成した。

第六章　近古の文化

啓蒙主義の勃興　文藝復興以來、歐洲諸國は宗教の束縛を脱して、その學問文藝美術等何れも自由の發達を遂ぐるやうになつたが、特に十八世紀になつて、謂はゆる啓蒙主義(Illuminism)が勃興した。これは中古以來の舊思想、舊制度を一切打破せんとするもので、歷史や傳統を無視し、餘りに純理に走り過ぎる傾があつた。然し自然科學はこの傾向か

カント
アダム＝スミス
各國大文豪の輩出

ら大に進歩し、十九世紀文明の基礎ができた。

哲學　近古の初め英國のベーコン(Bacon)、佛國のデカルト(Descartes)等が出て、近世哲學の先驅をなしたが、十八世紀になつてドイツにカント(Kant)が出て、その哲學體系が近世哲學の基礎となつた。同じ頃英國のアダム＝スミス(Adam Smith)が『富國論』(Wealth of Nations)を著し、新經濟學說を出した。その自由貿易主義は十九世紀に於ける英國の經濟的發展の一大原因となつた。

カント

文學　各國の國語と共に國民文學が發達し、大文豪の現れたのも近古期の特色である。英國にはエリザベス時代にシェークスピヤ(Shakespeare)、クロンウェル時代にミルトン(Milton)があり、フランスにはルイ十四世時代にコルネイ(Corneille)、ラシーヌ(Racine)、モリエール(Molière)等が輩出し、ドイツには十八世紀の半以後レッシング(Lessing)、ゲーテ(Goethe)、シルレル(Schiller)等の大家が相次いで出て、何れも不朽の大作を遺した。

テーゲ

繪畫の大家
音樂
建築
啓蒙文學
ヴォルテール
モンテスキュー
ルソー

藝術　文藝復興期にイタリヤが卓絕してゐた繪畫は、その後は他の諸國に移つて、十七世紀にはイスパニヤにヴェラスケス(Velasquez)、ムリリョ(Murillo)、オランダにルーベンス(Rubens)、レンブラント(Rembrandt)、ファン＝ダイク(Van Dyck)等の巨匠が現はれた。又十八世紀の後半ドイツにモツァルト(Mozart)、ベートーヴェン(Beethoven)の二大作曲家が出た。フランス專制政治の發達と共に、壯大華麗な宮殿建築が起り、その影響は廣く全歐洲に及んだ。

ベートーヴェン

啓蒙文學　啓蒙主義の勃興と共に、啓蒙文學が起つた。それは明快銳利な筆を以て、中古以來の弊風を打破するを目的とし、フランスのヴォルテール(Voltaire)が先づ之を鼓吹し、君主の善政によつて、貴族僧侶の專横を抑へんとした。ついでモンテスキュー(Montesquieu)は『法律の精神』(Spirit of the Laws)を、ルソー(Rousseau)は『社會契約論』(Social Contract)を著はして自由平等を說き、社

ルソー

啓蒙專制君主
コペルニクスの地動說
ガリレオ
ケプレル
ニュートン

會人心に大感化を與へ、後のフランス大革命の思想的地盤を造つた。

當時の君主で啓蒙文學の影響を受けて、政治上や宗教上の革新を行つた人々を啓蒙專制君主(Illuminated despots)といふ。プロシヤのフレデリック大王や、ロシヤのカザリン二世などは、何れもこれに屬した。

科學の隆盛　十六世紀の中頃、ポーランド人コペルニクス(Copernicus)が、教會の採り來つた地球中心說に對して地動說を唱へて後、十七世紀の初イタリヤのガリレオ(Galileo)が望遠鏡を作つて天體を觀測し、コペルニクスの說を支持し、同じ頃ドイツのケプレル(Kepler)は天體運行の法則を發見し、ついでイングランドのニュートン(Newton)は萬有引力の法則を發見するなど、自然科學は劃期的進歩を遂げた。かくて十八世紀に入つて、特にフランスに大家が輩出し、自然科學の黃金時代を來した。

ニュートン

フランスの科學者中動物學のビュッフォン(Buffon)比較解剖學のキュヴィエー(Cuvier)、化學のラ

其の他の科學の大家
紡績機械
機織機械
蒸汽機關
產業革命
英國と產業革命

ヴォアジエー(Lavoisier)星學のラプラース(Laplace)等が最も名高い。

アメリカのフランクリン(Franklin)が避雷針を發明したのや、英國人ジェンナー(Jenner)が種痘法を發明したのも、この時代である。

產業革命　科學の進歩に伴つて、種々の機械が發明されたが、中でも十八世紀末英國のアークライト(Arkwright)が紡績機械を、又カートライト(Cartwright)が機織機械を發明したが、偶〻同國のワット(Watt)が蒸汽機關を發明して、これを利用すれば堅牢な鐵製機械を運轉する動力が得られたので、從來の家內工業は、大資本による工場工業に移り、生產額は激增して謂はゆる產業革命が起つた。

トッワ

蒸汽機關が英國で發明され、これを動かす燃料の石炭と、蒸汽機關を用ひて動かす重機械を作る鐵とが、共に豐富に、しかも近接して英國に存在したことや、英國が世界に大植民地を獲得して、海外への輸出が急に激增したことなど、相待つて英國の近代工業を發達させた。故に產業革命は先づ英國に起り、次第に大陸諸國に及んだ。從つて產業革命に伴ふ社會運動も英國から始まつた。

近古期は中古末期から歐洲に醸された新氣運が、あらゆる方面に潑剌たる活動を見せた時代である。即ち文化的には、中古の宗教的束縛から個人を解放し、文藝を復興し、宗教改革と之に伴ふ幾多の紛爭を起し、古ギリシヤ的個人主義、科學的精神を復活させ、遂に一切の中古的なるものを破壞せんとする啓蒙主義を興し、その傾向による自然科學の劃期的進歩を來した。政治的には中古の割據的封建制度を崩壞させ、中央集權的近代國家の發達を促がし、歐洲の情勢に少なからず現代的色彩を帶びさせた。然し封建の遺風も尙ほ存し、次代の清掃を待つて居た。經濟的には產業革命が、この期間から起つて、十九世紀に續き、社會的政治的大變革の原動力となつた。西洋史の舞臺が世界的に擴大したのも、此の期間であつて、これは我等東洋人に取つて、此の期の意義を特に重大ならしめる。それはこの期に於て、白人が率先して東西に雄飛したために、彼等の世界的優越權が決定的となり、今日に及んで居るからである。

第四編　近世

第一章　フランス大革命

専制政治
國民負擔の不均衡
啓蒙文學の感化
アメリカ合衆國の建設

革命の原因　フランスは十七世紀以來王權が次第に伸び、特にルイ十四世以來專制政治その極に達し、宮廷の奢侈と、度々の戰爭とのため、財政は全く亂れ、國民の負擔は甚だ重くなつた。然るに貴族僧侶は免稅の特權を有して豪奢を極め、平民が主として國費を負擔して生活に苦んだ。そこへ啓蒙文學が貴族僧侶を痛罵し、自由平等を說いたから、國民はその感化を受け、專制政治を怨むやうになつた。丁度かゝる際に、アメリカ合衆國ができ、共和政治が建てられたので、自由民權の思想は益〻勢力を得た。

大革命勃發當時の諷刺畫*

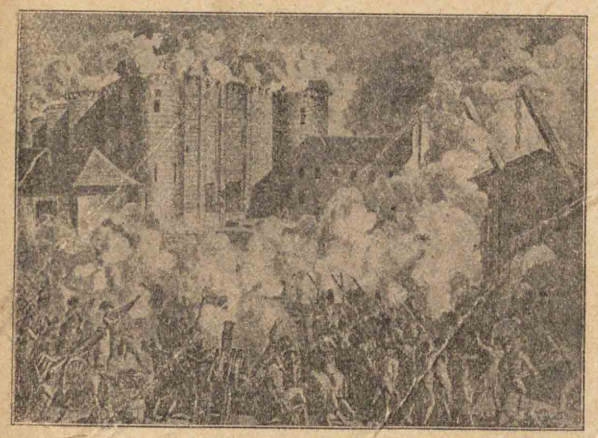
革命の破裂　この頃國王ルイ十六世

*胸の十字架を示して僧侶。其後に羽帽を被り長劍を帶べるは貴族。兩者の抑壓に苦めるは農民である。

財政整理の失敗
三部會召集
國民議會
バスチーユの破壊

はチュルゴー、ネッケル等を用ひて、財政の整理に當らせたが、何れも失敗したので、王は久しく召集されなかつた三部會を開いて、難局を打開しようと思ひ、一七八九年これをヴェルサイユに召集した。然るに平民の議員は貴族僧侶と分離して國民議會を組織し、憲法を制定するまで決して解散しないと誓つた。貴族僧侶も遂に屈して之に加はつた。その時不平の民衆が多くパリに集まり、形勢不穩になつたので、王は武力を以て之を威嚇したが、暴民が大擧してバスチーユの牢獄を破壊した。これが革命の發端で、暴動は忽ち地方に廣がり、貴族富豪等に對する暴行が盛に行はれた。

バスチーユの破壊



革命の進行　貴族僧侶は國民議會に臨み特權を放棄したから、封建の遺制は一

立法議會
普墺兩國の干渉
王政廢止
王の處刑

立憲君主としてのルイ十六世*

掃されたが、然し暴民は鎮まらず、議會は一七九一年憲法を制定し、立憲君主制を建てた。この頃議會に溫和、過激の二派があつたが、ミラボーの死んだのち、過激派が勢を得たので、王はパリを脱出したが、途中で捕へられた。

この年國民議會は自ら解散し、新憲法によつて立法議會が開かれたが、その議員には急進主義の過激派が多かつた。そこでプロシヤ、オーストリヤ二國の君主は、革命が自國に波及することを恐れ、同盟してフランスに出兵した(一七九二)。フランスの人心は大に激昂し、王は外國に内通したと疑ひ國王を獄中に幽閉した。やがて立法議會は自ら解散して、國民公會が召集されたが、共和主義のジャコベン黨の勢が盛で、遂に王政を廢して共和制を建て、ついで王を死刑に處した(一七九三)。

かかることは、臣民を「おほみたから」として愛撫したまふ我國天皇の統治下では、絶對にあり得ない。我國の國體が西洋諸國と全然異れるを思ふべきである。

*從來專制君主であつた王が、國民議會に拘束せられたるを示す當時の諷刺畫。

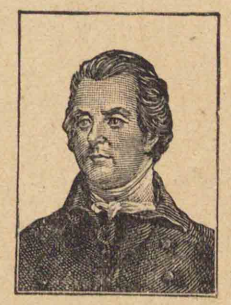
フランス軍の國外進出

第一回大同盟

革命裁判所

公安委員の事業

第一回歐洲大同盟 その前にプロシヤ、オーストリヤ聯合軍は、ポーランド問題のため（一〇六頁參照）、フランス國境から退却したが、フランス軍はライン地方、北イタリヤ等に進出して之を占領し、共和政を建てさせた。列國はこの革命の氣勢を挫くため、英國の首相ピット（Pitt）（七年戰役時代のピットの子）の首唱で、一七九三年第一回歐洲大同盟（英國、ロシヤ、オーストリヤ、オランダ、イスパニヤが加入した）を作つて、四面から佛國の境に迫り、佛國内にも勤王黨が兵を擧げた。



ピット

恐怖政治 フランスは内憂外患一時に起つたが、過激黨の革命政府は、革命裁判所を設けて反對黨を抑へ、ダントン（Danton）、ロベスピエール（Robespierre）等が公安委員として全權を握り、政敵及びその疑ある者は悉く之を殺した。前王后マリー＝アントアネット（Marie Antoinette）までも處刑され、悽慘の氣全國に滿ちた。これを恐怖政治（Reign of Terror）といふ。公安委員は強制徵兵法を以て、新軍隊を作り、内亂を鎭め、外敵を撃退し、又國内に共和曆を頒ち、キリスト

恐怖政治の終熄

大革命の終止

教を廢して道理を崇拜させ、度量衡にメートル法を採用するなど盛に舊物を打破した。

その内にジャコベン黨が分裂し、最後まで暴威を振つたロベスピエールも、遂に捕へられて處刑され、革命裁判所及び公安委員が廢され、恐怖政治は一年餘りで終り、革命の氣勢は始めて衰ろへた（一七九四）。

ロベスピエール

總裁政治 そこで國民公會は、新憲法を作り、五名の總裁（Director）を行政の長とする總裁政府ができた。然るに勤王黨その他が、この制度に反對してパリに暴動を起したので、青年士官ナポレオン＝ボナパルト（Napoleon Bonaparte）がこれを鎭定した。かくてフランス大革命期は終り、これからナポレオンの活躍期に入るのである。

ナポレオンは一七六九年コルシカ（Corsica）島の西海岸に生れた。近世ヨーロッパの英雄

中の英雄である。幼き時フランスの幼年學校に學び後兵學校に入り、十六歳で陸軍少尉になりパリの暴動を鎭めて名を揚げたのは、二十六歳の大尉の時であつた。性機略に富み、政治でも軍事でも、始終種々な方策を考へて置き第一策が成效しなければ第二策を取り、第一策が成功すれば、直に次の目的に進むといふやうに、成敗に拘はらず、いつも機會を逸せず、目的に向つて勇往した。それで一介の青年士官から起つて、着々その地位を高め、僅十年で天下の權を握るやうになつた。

第二章　ナポレオンとその時代

オーストリヤ征討　當時英國とオーストリヤとが、まだフランスに敵對したので、總裁政府は先づオーストリヤを討つため、三軍を出したが、その中ドイツに向つた二軍は敗れて、たゞナポレオンの率ゐて北イタリヤに向つた軍だけが、連戰みな勝ち、進んでオーストリヤに入り、遂に同國をして、ロンバルヂヤ（Lombardia）とネーデルランド（Netherlands）とを割讓して和を結ばせた。

アブキールの海戰

第二回大同盟

ナポレオンの歸國、政權獲得

エジプト遠征　ついでナポレオンは、英國の印度交通路を絶つため、エジプトに遠征し、忽ち之を占領したが、その海軍はネルソン（Nelson）の率ゐる英國艦隊のためにアブキール灣（Aboukir）で全滅し、陸軍はシリヤ（Syria）まで進んだが、途中で喰ひ止められ、エジプトに歸つて孤立した。

アルコレ橋上のナポレオン*

ネルソン

第二回歐洲大同盟　この時英國の首相ピット（Pitt）は、ロシヤ、オーストリヤ、ポルトガル等の諸國を誘つて、第二回の大同盟をつくり、連りに佛軍を破つたので、佛國民は總裁政治に失望し、有爲の大將の出現を切望してゐた。ナポレオンは之を聞いて急に本國に歸り、武力を以て總裁政府を仆し、新憲法を定め、執政（Consul）三名を置き、自ら首席執政となつて、天下の權を握つた。

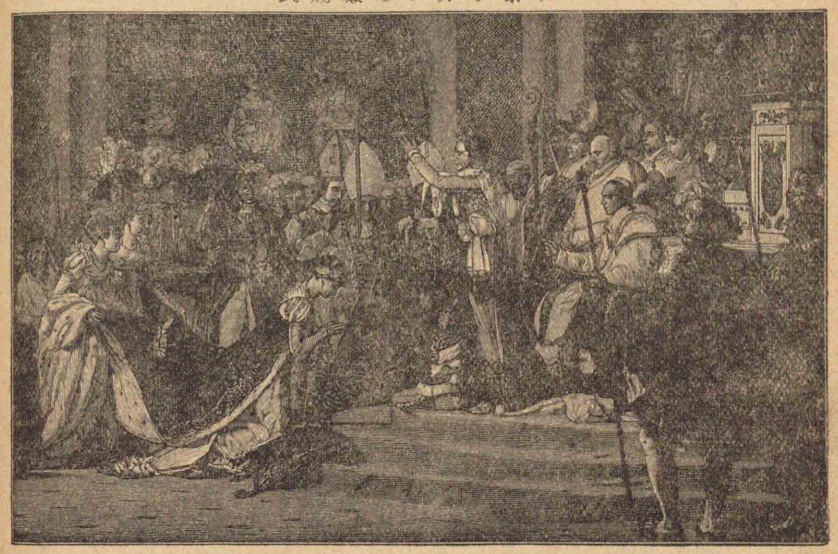
オーストリヤ再征　この頃第二回大同盟は、脫退

*一七九六年十一月ナポレオンは北イタリヤのアルコレ附近に敵と戰ひ、自ら軍旗を捧げて突進し、兵士を勵ました。

第二回大同盟崩壊

ナポレオンの治績

ナポレオンの戴冠式*



國相次いだが、オーストリヤと英國とは、最後まで佛國に敵對した。故にナポレオンは一八〇〇年アルプスの嶮を越えて北イタリヤに入り、大にオーストリヤ軍を破り、同國をしてライン左岸の地を佛國に割いて和せしめた。英國も連年の戰に疲れて佛國と和したので、第二回大同盟は崩れて、歐洲は一時平和に歸つた。

ナポレオンの登極 ナポレオンは一方内治に意を用ひ、財政の整理、交通、實業の發達、教育の普及、法典の編纂等に、大に治績を擧げたの

*ナポレオンは法皇ピウス七世をパリに呼び寄せ、ノートル＝ダム寺院に於て戴冠式を行ひ、自ら月桂冠を頭上に戴き、次に冠を皇后の頭に加へた。

その皇帝即位

トラファルガルの海戰

て、國民の信望大に高まり、先づ終身執政となり、一八〇四年遂に全國民投票に大多數を得て世襲皇帝の位に登り、ナポレオン一世と稱し、佛國は帝政時代に入つた。

第三回歐洲大同盟 一八〇五年英國はまた、列國を誘ひ、第三回大同盟を作つた。ナポレオンは英國がいつも同盟の中堅となるのを惡み、フランス、イスパニヤ聯合艦隊をして、英國艦隊を西印度方面に牽制させ、虛に乘じて大軍を英國へ渡さうと企だてたが、聯合艦隊が、トラファルガル(Trafalgar)の沖で、ネルソンの率ゐる英國艦隊に破られたので、その計畫は失敗し、海上權は全く英國の手に歸した。そこでナポレオンは忽ち轉じてドイツに向ひ、進んでウィーン(Wien)を占領し、更にオー

パリの大凱旋門*

*一八〇五―六年のナポレオンの大勝利記念のため、一八〇六年起工され、其の死後一八三六年に至り始めて完成した。世界最大の凱旋門で、高さ五十メートル、幅四十五メートル、厚さ二十二メートル。此の門を中心として大街路八方に放射する。故に『エトアル(Etoile)(星)の凱旋門』といふ。

アウステルリッツの會戰

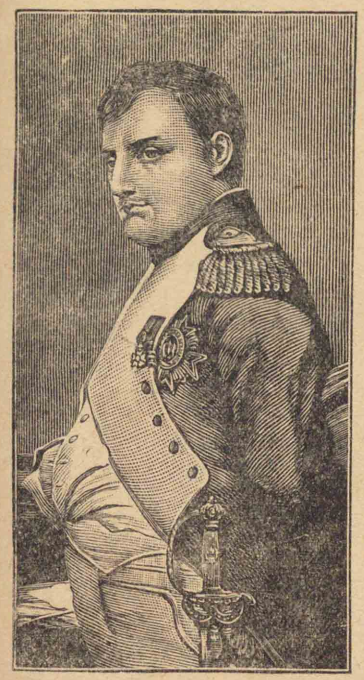
E ①②

ライン聯邦の組織

神聖ローマ帝國滅亡

ストリヤ、ロシヤの聯合軍をアウステルリッツ(Austerlitz)に擊破し、オーストリヤを屈して、ヴェネチヤを割讓させ、第三回大同盟は茲で瓦解した。

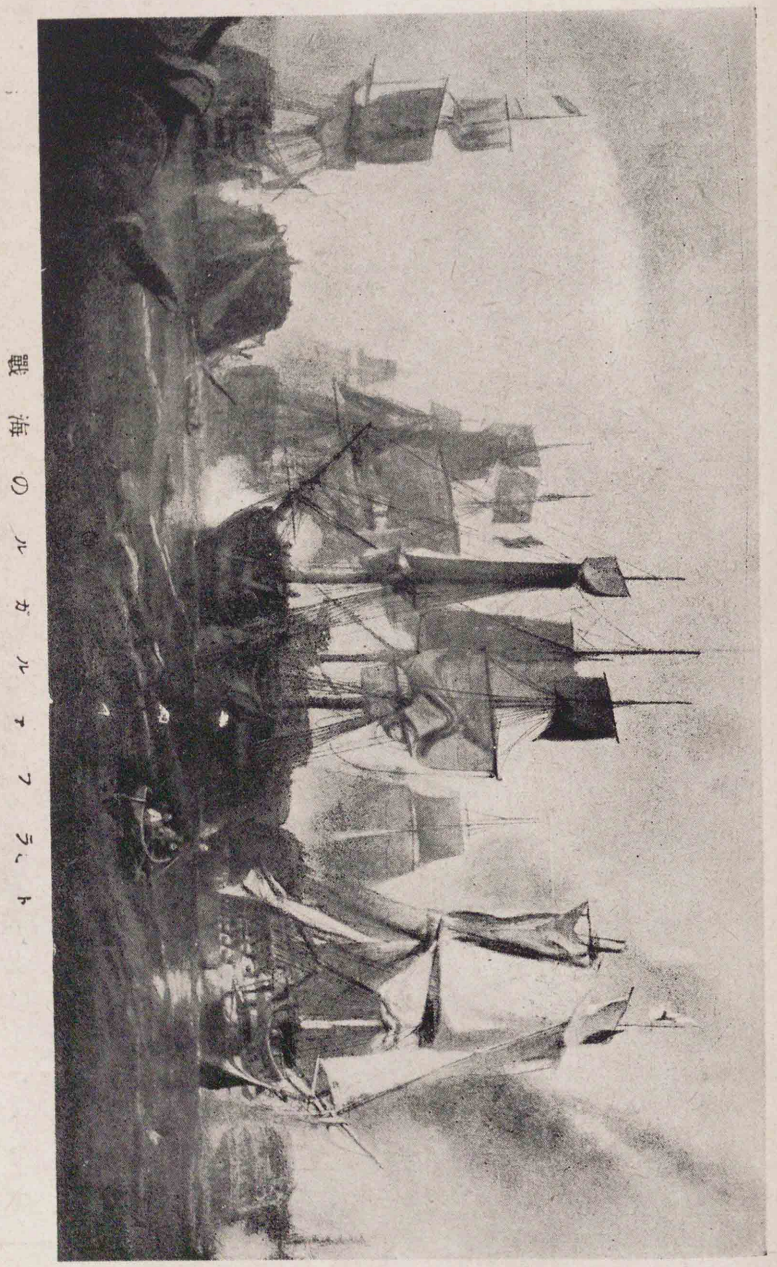
神聖ローマ帝國の解體　一八〇六年西南ドイツの十六州はナポレオンの威を畏れ、ライン聯邦(The Confederation of the Rhine)を組織し、ナポレオンがその保護者となつたので、ドイツは茲に全く解體した。オーストリヤ皇帝フランシス一世はこれまで保有した神聖ローマ皇帝の空名を棄て、その後單にオーストリヤ皇帝と稱した。かくてオットー大帝創立以來約八百五十年を經た神聖ローマ帝國は、名實ともに滅んだのである。



皇帝ナポレオン一世

プロシヤ攻伐　第一回大同盟脫退の後、中立を守つてゐたプロシヤは、ナポレオンの横暴を憤り、遂にロシヤと結んで、一八〇六年佛國に宣戰した。ナポレ

32–33, (1) (2) (3)　34, (1)



戰艦のルガルテフラット

トラファルガルの海戰

日露戰役の日本海大海戰から丁度一百年前に當る一八〇五年十月二十一日の、トラファルガル海戰こそ、實にナポレオンの宿志を水泡に歸せしめて、不自然な大陸封鎖令を以て、經濟的に英國を苦しめようといふ窮策を取らせ、遂に彼が沒落の基を作つたばかりでなく、英國の制海權は此の一戰で確立し、その後一百年間十九世紀を通じて、英國の海上優越權は他國の競爭を許さなくなつた。一戰の力も亦偉大なものと謂はねばならぬ。此の日英國の提督ネルソンが、旗艦ヴィクトリヤ(Victoria)の檣頭に高く掲げた『英國は各人が其の義務を盡すことを期待す』といふ信號は、日本海々戰に於ける東鄕元帥の『皇國の興廢此一戰に在り』といふのと、海戰史上、東西の好一對である。ネルソンは不幸にして此の戰に敵彈に斃れたけれども、其の名は長く歷史の上に輝やき、ロンドンのトラファルガル廣場に聳え立つ彼の記念像は英國の子孫をして、永くその大功を仰がしめるのである。

ベルリン占領
チルジット條約
大陸封鎖令
E①
ポルトガル・イスパニヤ征討

オンは直にプロシヤ軍を擊破し、ベルリンを占領し、更にロシヤ、プロシヤ聯合軍を破つた後、チルジット(Tilsit)條約を結んで、プロシヤからその領土の過半を奪ひ、エルベ(Elbe)河の西にウェストファリヤ(Westphalia)王國を、又ポーランド地方に、ワルソー(Warsaw)大公國を建て、共にライン聯邦に加入させた。

大陸封鎖 ナポレオンは海上權を失つて、英國へ侵入する望がなくなつたので、通商を破壞して經濟上から英國を屈服させようと思ひ、ベルリン滯在中、大陸封鎖令(Continental Barrier)を出して、歐洲大陸諸國が英國と通商することを禁じた(一八〇六)。然るにポルトガルがその令を守らなかつたので、ナポレオンは直に之を征服し、ついでイスパニヤ王をして位を己の兄ジョセフに讓らせた。イスパニヤ人が憤慨して叛亂したので、ナポレオンは親征して之を抑へ、兄の位を復した(一八〇八)。

この他ナポレオンは弟ルイ(Louis)をオランダ王に、弟ジェローム(Jerome)をウェストファリヤ王に封じ、ライン聯邦の一なるサクソニヤ王にワルソー大公を兼ねさせた。又兄ジョセフをイスパニヤ王とした後は部將ミュラー(Murat)をナポリ王に封じた。かくナポレオ

32-33, (5)　32-33, (1)　32-33, (1) (2)

ンが威勢にまかせて各國を勝手に建置し、一族故舊に之を與へたことは、十九世紀の國民主義の勃興を促がす大原因となつた。

ナポレオンの極盛　ナポレオンがイスパニヤに出征したのを機會に、オーストリヤが再び兵を擧げたので、ナポレオンは急にオーストリヤに攻め入り、その軍をワグラム Wagram で打破り、ウィーン條約を結ばせ（一八〇九）、翌年オーストリヤの皇女マリヤ・ルイゼ Maria Louise と結婚して、家門を尊嚴にした。これからロシヤ遠征までの三年間（一八一〇―一二）が、ナポレオンの極盛時代で、歐洲諸國中、その威令の行はれないのは、唯〻英國とトルコだけであつた。

E②　オーストリヤ征討　ハプスブルグ家との通婚

ロシヤ遠征　ロシヤは大陸封鎖の苦に堪へず、遂に英國と通商したので、一八一二年ナポレオンは、諸國の兵五十萬を率ゐてロシヤに侵入し、ボロヂノ Borodino の激戰で大にロシヤ軍を破り、進んでモスコーに入つたが、丁度その時モスコーに大火が起つて、全市殆んど燒けた。ナポレオンは大軍の宿舍と糧食とに窮して、退却を命じたが、途中ロシヤ

E①　モスコーの大火　遠征軍の潰滅

軍の追擊と寒氣とのため大軍殆んど全滅した。ナポレオンは辛うじてパリに歸つたがこれが、ナポレオン沒落の端緒となつた。

歐洲解放戰役　ナポレオン敗北の報を得て先づ起つたのはプロシヤであつた。同國はチルジット條約の屈辱後、スタイン、ハルデンベルヒの兩首相が相次いで行政を改革し、民間にも哲學者フィヒテ、詩人アルント Arndt 等が大に愛國心を鼓舞したので士氣大に振ひ、佛國に對する報復の機會を待つてゐた。それで今や起つてロシヤと結び、オーストリヤ、英國、スウェーデン等も加はつて、第四回大同盟が成り、一八一三年ナポレオンをライプチヒ Leipzig で擊破つたので、ナポレオンの威勢は俄に衰へた。翌年同盟軍は佛國に侵入し、パリを陷れたので、ナポレオンは帝位を辭してエルバ Elba 島に流され、ルイ十六世の弟ルイ十八世がフランス王に擁立され、列國とパリ條約を結んで、侵地を還した。ついで各國はウィーンに會議を開いて、ナポレ

*ロシヤの鐵十字勳章

E①　ロシヤの蹶起　第四回大同盟　ライプチヒの戰　エルバ島へ配流　ルイ十八世擁立

34, (2)

*ナポレオンに對する解放戰役の殊勳者に與ふるため制定された。FW は Friedrich Wilhelm の頭字。

ナポレオンの脱島歸還

ワーテルローの戰　E①

セントヘレナ配流

大亂鎭定

オンに攪亂された歐洲の善後策を講ずることとなつた。

百日天下　ウィーン會議は、列國の利害の衝突のために、議事が進まず、またフランスではルイ十八世が人望がなかつた。ナポレオンはかゝる情勢を知り、ひそかに島を脱して、パリに歸り、忽ち帝位に復した(一八一五)。ウィーンの列國委員は大に驚いて、再び同盟軍を起し、ナポレオンとワーテルローに激戰して大に之を破り、ナポレオンを大西洋上の一孤島セントヘレナ St. Helena に流し、ルイ十八世を王位に復した。

ナポレオン、エルバよりの歸る*

王は列國と第二回パリ條約を結び、佛國の境界を一七九〇年の舊に復した。かくて二十三年に亙つた大戰亂は始めて鎭まつた(一八一五)。ナポレオンの復位期間を彼の百日天下といふ。

Waterloo

Hundred Days

*彼を慕へる兵士四方より雲集歡迎した。

ウィーン條約の要項　E③

ブリュヘル

ナポレオン敗北の主因となつた。

ウィーン列國會議　ナポレオンの再擧のため、ウィーン會議の委員は、急に妥協して、ワーテルロー會戰の數日前に、次のやうな最後決議ができた。

A　フランス、イスパニヤ、ナポリの三ブルボン家を始め、サルヂニヤ王、ローマ法皇等は大抵故の領土を得て、その位を復した。

B　その他の諸國に關しては、

(1) **ロシヤ**　はワルソー大公國の大部分を得て、ポーランド立憲王國を建て、ロシヤ皇帝がその王を兼ね、

ワーテルローの會戰は、實にナポレオンの運命を決する戰であつたが同盟軍の兩將ブロシヤのブリュヘル(Blücher)と、英國のウェリントン(Wellington)が何れもその任を完うした。佛軍はウェリントン軍に猛攻擊を反復したが英軍は頑強に抵抗して之を擊退した。その時ブリュヘルの率ゆるブロシヤ軍が不意に側面に現はれて佛軍を攻擊したのが、

F④　E④　E③

(2) **プロシヤ** はサクソニヤの北部とワルソー大公國の一部と、ライン河中流兩岸の地を得、

(3) **オーストリヤ** はネーデルランドの舊領を放棄し、その代りにロンバルヂヤ(Lombardia)とヴェネチヤ(Venetia)とを得て、イタリヤに勢を張り、

(4) **オランダ** は舊オーストリヤ領ネーデルランドと合して、ネーデルランド王國となり、

(5) **スウェーデン** はデンマルクよりノルウェーを得、

(6) **スウィス** は聯邦の數を增して、永久中立國となり、

(7) **英國** は戰役中海上權を以て占領したマルタ島(Malta)、ケープ植民地(Cape Colony)、セイロン島を保有することとなり、

C　ドイツに於ては、プロシヤ、オーストリヤ以下三十五の君主國及び四自由市が合してドイツ聯邦を組織した。

第三章　自由主義及び國民主義の發展

1　反動政治とその破綻

38, (3)　37–38, (1)

反動の勢

國民主義の勃興

メッテルニヒの政策

神聖同盟

大亂の反動　ナポレオンの沒落で、フランス大革命以來の大亂が鎭まり、列國はここで遂に革命主義に勝つたと感じた。それで萬事復舊を方針とする反動の勢が盛で、一時全歐を風靡した。然し大革命以來自由主義は各國民にしみこんで居り、又ナポレオンに重壓された結果國民主義が勃興したから、列國の君主、政治家はこれ等の主義運動を抑壓するに努めた。中でも多數の異民族を含むオーストリヤでは、新思想による國家動搖の危險が最も大であつたので、首相メッテルニヒ(Metternich)は、當時成立した神聖同盟(Holy Alliance)を利用して、自國のみならず、他國に起つた一切の自由主義運動をも抑壓した。

メッテルニヒ

神聖同盟　はウィーン會議後、ロシヤ皇帝アレクサンドル一世の首唱によつて成立した。その趣旨は、各國の君主は、キリスト教の主旨に從ひ、互に兄弟のやうに親しみ、又その臣民はこれを子のやうに愛して、永く平和を保たうといふのであつて、プロシヤ王とオーストリヤ帝とが先づ之に贊同し、英國

ドイツ學生の運動

イタリヤ、イスパニヤの自由主義運動

獨立の原因

F③

王、トルコ皇帝、ローマ法皇以外の歐洲君主は大抵之に加入した。

革命運動の鎮壓　ドイツでは聯邦が成立したけれども、まだ統一の實がなく、且つ各聯邦では專制政治が行はれたので、大學生が種々の會を作つて、盛にドイツの統一と自由主義の實現を唱へた。それでメッテルニヒは、神聖同盟を利用して之を彈壓した。又イスパニヤ國民は王に迫つて自由主義の憲法を發布させ、イタリヤにはカルボナリ黨(Carbonari)が起つて、ナポリ王に迫つて同じく自由主義の憲法を出させた(一八二〇)。メッテルニヒは二度列國會議を開き、武力を以てこれ等の革命運動を抑壓し、專制政治を回復した。

アメリカ諸國の獨立　イスパニヤ、ポルトガル兩國に屬する中米及び南米の植民地は、かねて本國の抑壓に不平であつたが、ナポレオン時代には、本國の干渉の手が屆かず、一時獨立してゐた。然るに歐洲の平和回復後本國は再び以前の政策を行はうとしたので、各植民地は續々獨立を宣言し、戰を交へて、その目的を達した。即ち一八一一年から一八二五年までに、アルジェンチン(Argentine)、チリ(Chili)、ペルー(Peru)、コロンビヤ(Columbia)、メキシコ、ボリヴィヤ(Bolivia)、ウルグヮイ(Urguay)等が、次々にイスパニヤから獨立し、ブラジル(Brazil)も亦ポルトガルから離れて獨立帝國となつた(一八二二)。

イスパニヤ植民地の獨立

ブラジルの獨立

カニング

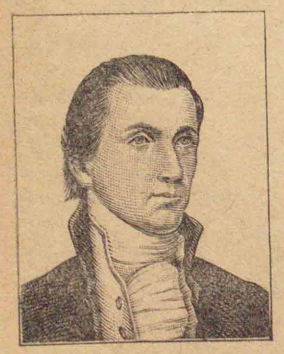
モンロー

モンロー主義

カニング

カニング及びモンロー　メッテルニヒはアメリカ諸國の獨立運動を革命運動と見なし、神聖同盟諸國と共に之に干渉しようとした。然るに自由主義者の英國外務大臣カニング(Canning)は之に反對し、卒先して諸國の獨立を承認した。時の米國大統領モンロー(Monroe)も亦これを承認し、ついで教書を發して、今後南北アメリカ兩大陸は歐洲諸國の植民の目的物となつてはならず、歐洲諸國はこの兩大陸に干渉してはならぬと宣言した(一八二三)。これがその後合衆國の國是となつた有名なモンロー主義(Monroe Doctrine)である。

かくてメッテルニヒの目的は破れ、神聖同盟の力は衰ろへ始めた。



モンロー

獨立軍の敗戰

ナヴァリノの海戰

ギリシヤの獨立 ギリシヤは久しく人種宗教を異にするトルコの支配に苦んでゐたが、西歐に自由主義が勃興したのに乘じ、遂に獨立の軍を起した(一八二一)。トルコは一旦獨立軍を擊破したけれども、西歐諸國はギリシヤに同情し、メッテルニヒのトルコ支持に反對して同國軍を破り、遂にギリシヤを獨立させたので、神聖同盟の現狀維持主義も破綻した。

初めトルコはエジプトの藩主メヘメッド=アリ(Mehemed Ali)の子イブラヒム(Ibrahim)の力を借つてギリシヤ軍を破り、ギリシヤ獨立の望は薄くなつた。そこで英國

バイロン*

*英國の熱血詩人バイロン(Byron)は、ギリシヤの獨立運動に同情し、劍を提げて出征したが、熱病のためギリシヤで斃れた。

三國のギリシヤ援助

チャールス十世の失政

ルイ=フィリップ

獨立完成

の外務大臣カニングはロシヤとフランスを誘ひ、共にギリシヤを助け、三國の聯合艦隊はナヴァリノ灣(Navarino)でトルコ艦隊を滅ぼし(一八二七)、ロシヤは別に兵を出してコンスタンチノープルに迫つたので、トルコは遂に屈して、ギリシヤの獨立を認め(一八二九)、ギリシヤはドイツのバヴァリヤ(Bavaria)王の子を迎へて國王とし、その獨立を完成した。

2 フランスの動搖とその後の隆盛

七月革命 フランスでは自由主義が、かねて盛であつたが、ナポレオン沒落後復位したルイ十八世の政治は人望がなかつた。特にその弟チャールス十世は貴族僧侶を重く用ひ、專制政治を行ひ、民論を壓迫したので、遂にパリ市民が蜂起して王宮を圍み、王は英國に出奔し、その支族ルイ=フィリップ(Louis Philippe)が王位に登り、『フランス國民の王』と稱した。時に一八三〇年七月で、これを七月革命(July Revolution)といふ。

ルイ=フィリップ

二月革命 ルイ=フィリップは初め自由主義の政治を

行ひ、中流社會の支持を得たが、やがて王は資本家と結び、盛に議員を買收して綱紀を紊し、また外交にも失敗したので、次第に人望を失つた。

社會主義

當時佛國にはサン・シモン(St. Simon)の社會主義が、ルイ・ブラン(Louis Blanc)の政治運動で大に勢力を得たが、政府は言論出版の自由を拘束して之を抑へた。

政府の抑壓

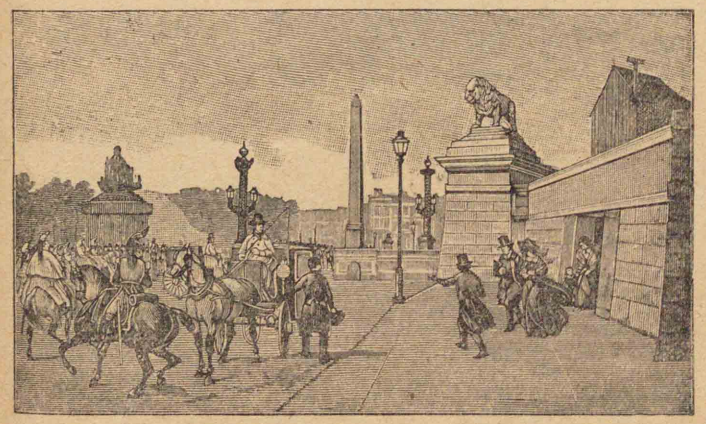
それで在野の名士チエール(Thiers)等がこれに反抗し、選擧法の改正を唱へ、大運動を起すに及び、一八四八年二月パリに革命が破裂して、暴民と兵士と衝突した。

革命の破裂

王は退位を宣言したが、暴動が鎭まらないので、英國に出奔した。

共和政治

共和黨は假政府を建て、共和政治を宣言した。これを二月革命(February Revolution)といふ。ついで新憲法が定まり、ナポレオン一世の甥ル



*奔出のプッリィフイル

*王は位を孫に讓つて王朝の維持を圖つたが效なく、身いよいよ危ふくなつたので變裝して、王宮の後門から忍び出で、妃と共に僦馬車に乘り、英國へ逃れた。

イ・ナポレオンが選ばれて大統領となつた。

ウィーン條約體制の崩壞

兩革命の影響　七月革命は王朝の交迭を以て、又二月革命は政體の變更を以て、共にウィーン條約による歐洲體制の崩るる新例を開いたので、その外國に於ける影響は著大であつた。中でもベルギー國の獨立や、オーストリヤの暴動、ホンガリヤの獨立運動、その他諸國に於ける立憲運動、統一運動等がその主なるものであつた。

ネーデルランド王國の內情

ベルギーの獨立　ウィーン條約でオランダと併せられた舊オーストリヤ領ネーデルランドは、元來オランダとは言語、宗教及び經濟事情を異にして、融和が困難であつたのに、國王は常にオランダ人の利益を圖つたので、かねて不平を抱いた。それで七月革命の報が傳はるや、叛旗をブリュッセル(Brussels)に擧げ、オランダ軍を破つて獨立を宣言した。翌年列國はロンドンに會して、その獨立を承認し、且つこれを永世局外中立國とし、ここにベルギー(Belgium)王國が生れた。

ポーランド、イタリヤ等の運動

七月革命後ポーランドはロシヤに對して叛亂し、イタリヤにも自由統一の運動が起つたが共に失敗に終つた。ドイツの立憲運

ホンガリヤの獨立運動

ドイツ、イタリヤの運動

動は一部成功した。

ホンガリヤの獨立運動 二月革命後オーストリヤのウィーンに暴動が起り、メッテルニヒは英國に奔り、皇帝は位をフランシス=ジョセフ(Francis Joseph)に讓つて、亂は平らいだが、ホンガリヤがこれに乘じてコッシュート(Kossuth)を戴いて獨立を圖り、屢〻オーストリヤ軍を破り、殆んどその目的を達せんとしたが、オーストリヤはロシヤ軍の援を得て、やつと之を鎮壓した。

ブロシヤのベルリンにも暴動が起つたが、國王は憲法發布を約して之を鎮めた。イタリヤのサルヂニヤ王もイタリヤ統一のためオーストリヤと開戰したが、結局失敗した。

ナポレオン三世の登極、フランスの第二帝政

ナポレオン三世 佛國大統領ルイ=ナポレオンは、かねて伯父ナポレオン一世に倣つて皇帝となる野心を抱いてゐたが、國民が一世を追慕するのに乘じ、巧に人望を收め、遂にクーデター(Coup d'État)を行つて新憲法を定め、大統領の任期を十年とし、翌年國民投票によつて、遂に帝位に登り、ナポレオン三世と稱し、佛國に第二帝政が建てられた(一八五二)。ナポレ

戰役の起因

F⑥

セバストポールの包圍戰況

ナポレオン三世

オンは內政を刷新すると共に、國威を發揚して、帝政の基礎を固むる機會を待つてゐたが、

クリミヤ戰役 (The Crimean War) ナポレオン三世は民心を收攬するため、トルコに迫つて、パレスチナ聖地管理權をローマ正教徒に與へさせた。そこで豫て南下の志を抱いたロシヤ皇帝ニコラス(Nicolas)はこれに應じなかつたので、トルコに宣戰して兵を出した。そこでナポレオン三世は英國と同盟してトルコを援け、兩國の聯合軍はクリミヤ半島の要塞セバストポル(Sebastopol)を圍み、クリミヤ(Crimea)戰役が起つた(一八五四)。

ロシヤは要塞を死守し、聯合軍はその攻擊が屢〻失敗し、且つ寒氣と傳染病とに死するもの夥しく、一時非常な苦境に陷つたが、ロシヤ帝ニコラス一世が病歿し、アレクサンドル二世が立つて後、ロシヤ軍は次第に振はなくなつた。

41-42, (1) (2) (3)

パリ講和條約

聯合軍はサルヂニヤ(Sardinia)からの援兵に力を得て、包圍約一年で遂にセバストポールを陷れた(一八五五)。イギリスのナイチンゲール孃(Nightingale)が、聯合軍の慘狀を聞き、看護婦三十餘名を率ゐて戰地に赴き、傷病兵の看護に盡したのは、博愛の鑑として有名である。

ロシヤは屈して翌年關係諸國とパリ條約を結び、ロシヤは、(1)黑海を中立とすること、(2)トルコと共にその沿岸に造兵廠を設けないこと、(3)トルコ內のギリシヤ正教徒保護權を要求しないこと、(4)ドナウ河口の地をトルコに還すことを約し、トルコは領內のキリスト教徒を保護することを約した。かくてロシヤの南下の志は敗れ、フランスの國威大に揚がり、ナポレオン三世に對する國民の信賴は益〻加はり、その威名は隆々たるものがあつた。

ナポレオンの聲望は、クリミヤ戰役後が絕頂で、その後メキシコ事件や對プロシヤ外交の失敗等で、段々衰ろへた(一六一頁及一五四頁參照)

領土の廣大

商工業の隆盛

海軍の優越

國民性

兩黨對立

3 イギリスの內治外交

英國の隆盛 英國は十八世紀に佛國との世界爭覇戰に勝ち、その東西兩半球に收めた廣大な領土には、太陽の沒することがないと謂はれるに至つた。本國には產業革命が他國に先んじて起り、東西の植民地より輸入する工業原料を以て大工業が行はれ、その大量生產品の販路を世界に擴めて、國富を增進し、ロンドンを世界金融の中心となし、その優越せる海軍力を以て、『海の女王』となり、十九世紀を通じて、その國力は遙に列國を凌ぎ、世界に雄視した。それは英國人が常識に富み、冷靜沈着で、感情に走らず、空理に馳せず、常に實際の利害判斷を誤らない國民性に負ふ所が多い。

政黨政治 英國では最も早く政黨政治が行はれた。卽ち十七世紀以來トーリー(Tory)及びホイッグ(Whig)の兩黨が對立し(九四頁參照)、前者は保守主義を、後者は自由主義を持し、後にそれ〴〵保守黨及び自由黨となつた。

さうして兩黨中、議會に多數を占めるものが、かはるゞ〳〵責任內閣を組織して、憲政が巧に運用された。然し長年の間には、種々革新を要する弊が生じたが、七月革命の前後に種々の懸案が次のやうに解決され、大陸諸國のやうに革命を見ずにすんだ。

舊教徒解放法

舊教徒の解放　十九世紀の初め、アイルランドは英國議會に議員を出す權を得、兩國は全く併合して、大ブリテン及びアイルランド聯合王國(United Kingdom of Great Britain and Ireland)と稱せられることになつた。然るにアイルランド人の多數は舊教徒なるため、議員や官吏となることができず、大に不平を抱いてゐたが、一八二九年ウェリントン內閣の時、舊教徒解放法案が議會を通過し、舊教徒の政治上の差別が撤廢された。

産業革命後の選擧區

選擧法改正　産業革命の結果、以前人口の稀薄な地方に多くの新工業都市が興り、人口の分布が一變したのに、選擧區の制度は前のままで、議會には商工業者の代表者が少なく、專ら貴族や大地主の利益が保護された。それで選擧區の改正は、屢〻議會の問題となつたが、七月

改正案の通過

革命の影響で、一八三二年ホイッグ黨のグレイ(Grey)內閣の改正案が遂に通過し、多くの謂はゆる腐敗選擧區が廢され、新興都市が議員を出すことになり、議會に於ける商工業者の力が大分伸びた。

穀物法の廢止　十九世紀の初め、歐洲の平和回復して、穀物の價格低落の恐があつたので、英國の大地主は、穀物法(Corn Law)を設けて輸入穀物に重稅を課し、下層の人民はそのために生活費の高いのに苦しんだ。それでコブデン(Cobden)やブライト(Bright)等の自由貿易主義者の穀物法反對同盟(Anti-Corn Law League)が努力し、一八四六年その廢止法案が議會を通過し、下層人民は大に救はれた。

トイラブロンヨ

英國外交の成功　英國は時勢の要求に應じて、かく著々內部の改革を行ふと同時に、東方問題に關して外交上にも成功を收め、大に國威を揚げた。

東方問題　ギリシヤ獨立戰爭の時、トルコの藩王メヘメッド=アリ(Mehemed Ali)はトルコ

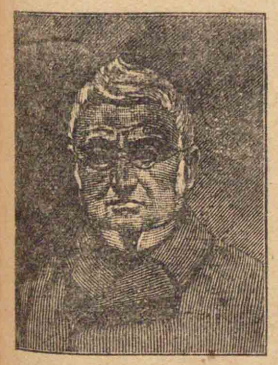
東方問題の起因

ウンキヤル=スケレッシ條約

英佛兩國の東方政策

四國同盟

を援けた功により、トルコからサイプラス(Cyprus)、クリート(Crete)二島を得たが、之に滿足せずして更にシリヤを要求した。トルコが之を拒んだので、アリはシリヤに出兵し、トルコ軍を破つてコンスタンチノープルに迫つた。ロシヤ皇帝ニコラス一世はかねて南下の志があつたので、之を好機とし、トルコを救ふといふ口實で出兵した。英佛兩國は帝の野心を看破し、仲裁してトルコ、エジプト間に和を結ばせたが、ロシヤはトルコが英佛を怨んだのに乘じて、トルコとウンキヤル=スケレシ(Unkiar Skelessi)の密約を結び、ダーダネルス海峽を外國軍艦に鎖し、ロシヤ軍艦だけに開放させた(一八三三)。英佛兩國は共に之に反對して、謂はゆる東方問題(Eastern Question)が起つたが佛國の首相チエールはエジプトを援けてトルコを抑へようとし、英國の外務大臣パーマストン(Palmerston)は之に反しエジプトを抑へ、トルコを保全してロシヤの南下を防ぎ、且つ英國の東洋交通を安全にするため、アデン(Aden)を占領し(一八三九)、ついでトルコに勸めてシリヤを回復するためにエジプトと開戰させたが、トルコは大敗して國運が危ふくなつた。そこでパーマストンはロシヤ、オーストリヤ、プロシヤの三國と同盟してトルコを援け、エジプトに當つたので、チエールは憤激して四國を敵として一戰しようと



チエール

歐洲の危機

エジプトの屈服

英國の成功

したが、フランス王ルイ=フィリップが平和政策を取つてチエールを罷免したので、エジプトは孤立に陷り、遂に屈服してシリヤをトルコに還し、翌年ロシヤはウンキヤル=スケレッシ條約を廢棄し、トルコは戰時一切の外國軍艦に海峽を閉ざすことになつた(一八四一)。かくて英國は佛露兩國を一時に抑へたが、後クリミヤ戰役では佛國と共に露國のバルカン進出を喰ひ止め(一四三頁參照)、いつも東方政策に成功した。

パーマストン

4 イタリヤの統一

統一前のイタリヤ

F ⑤

サルヂニヤの統一準備

サルヂニヤの統一運動 イタリヤはフランスの七月革命及び二月革命に續ける統一運動が失敗して、小國が依然として分立し、オーストリヤの勢力に抑へられてゐたので、志士の獨立統一を唱ふるもの多く、中にもマッチニ(Mazzini)の率ゐる青年イタリヤ黨が最も活躍したが、サルヂニヤ王ヴィクトル=エマヌエル(Victor Emmanuel)二世が立つて、

ヴィクトル=エマヌエル二世

カヴール

オーストリヤ軍撃破
諸小國來附

F⑤

ルーヴカ

父王の志をつぎ、賢相カヴール(Cavour)を用ひ、内は立憲政治を布き、國力を養ひ、外は兵をクリミヤに出して、佛、英兩國の歡心を得た。ついでカヴールはナポレオン三世と密約を結び、大に軍備を整へ、一八五九年オーストリヤと開戰した。

統一戰役 ナポレオン三世は親ら軍を率ゐてイタリヤに來り、サルヂニヤ軍を援けて、オーストリヤ軍を擊破し、ロンバルヂヤを占領したので、トスカナ(Tuscany (Toscana))以下中部イタリヤの諸小國は來つてサルヂニヤに附いた。ナポレオン三世はサルヂニヤが餘りに強くなるのを好まず、又オーストリヤが或はプロシヤと結ぶことあるべきを慮つて、サルヂニヤをして、ロンバルヂヤだけを得て、オーストリヤと和を結ばせた。

イタリヤ王國の建設 然るに中部イタリヤの諸國は、之を承知しなかつたので、エマヌエル(Emanuel)はサヴォイ(Savoy)、ニース(Nice)兩地方をフランスに割き與へ

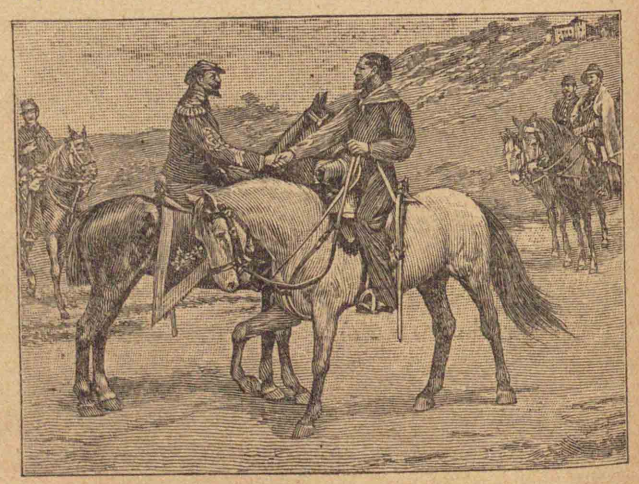
ガリバルヂの南イタリヤ平定

F⑤

イタリヤ王國建設

統一の完成

ナポレオン三世の承認を得て諸小國を併合した。この際志士ガリバルヂ(Garibaldi)が義勇兵を率ゐて南イタリヤのナポリ王國を征服し、これをサルヂニヤ王に獻じたので、王はヴェネチヤと法皇領の一部を除けるイタリヤを統一し、一八六一年イタリヤ王の位に卽き、後都をフロレンス(Florence)に奠めた(一八六五)。やがて普墺戰役が起つた時(一五三頁參照)、イタリヤはプロシヤと結んでヴェネチヤを得、獨佛戰役の時(一五四頁參照)、佛國の守備兵の去つたのに乘じ、ローマを取つて都をそこに遷し、イタリヤの統一は完成した(一八七〇)。



*見會のとルエュニマエ王とヂルバリガ

*南イタリヤを平定したガリバルヂは、セッサ(Sessa)の附近でエマニュエルを『イタリヤ王』として迎へた。

ドイツ聯邦

自由主義と國民主義

F ④

フランクフルト國民會議

5 ドイツの統一

ドイツ統一の企圖 ドイツは中古以來分裂のまゝで統一せず、ウィーン會議で、ドイツ聯邦ができたが、その結合は甚だ緩く、且つオーストリヤ(墺)がその牛耳を執つて、現狀維持に努めたので、統一は大に妨げられた。 然し自由主義と國民主義とは次第に勢を得たが、プロシヤ(普)は聯邦中最も國力を發展し、政治的統一の第一歩として、經濟的統一を圖り、北ドイツ諸國間の關稅同盟(Customs Union)を作つた。 ついで南ドイツ諸國も之に加入し、普墺兩國は永く聯邦内に兩立し難くなつた。 二月革命後ドイツの統一主義は、益〻勢を得、全ドイツの代表者がフランクフルト(Frankfurt)に國民會議を開き、オーストリヤを除いて、ドイツ帝國を建て、プロシヤ國王を世襲の皇帝に戴かうとしたが、國王はこれを尙早として受けなかつた(一八四九)。 後ウィリヤム一世が立ち(一八六一)、ドイツ統一の實現を圖り、ビスマルク(Bismarck)を宰相に、モルトケ(Moltke)を參謀總長に任用し、頑强

38, (1) (2) (3)

シレスウィヒ＝ホルスタイン問題

F ④

ケーニヒグレーツの戰

プラーグ條約

クルマスビ

なる議會の反對を省みず、大に軍備を擴張して、オーストリヤを破るの機會を待つて居た。

普墺戰役 當時シレスウィヒ(Schleswig)、ホルスタイン(Holstein)兩州がデンマルクと爭つて、援をドイツ聯邦に求めたので、一八六四年、普墺兩國は聯合してデンマルクを破り、二州を放棄させた。 然るに二州の處分について、兩國間に爭が起つたので、ビスマルクはこれを機として、オーストリヤと開戰した(一八六六)。 この戰爭にイタリヤはヴェネチヤ併合を望んでプロシヤと同盟したが、ドイツ聯邦は、北方諸國以外、大體オーストリヤに味方した。 プロシヤはモルトケの作戰計畫で、忽ちハノーヴァー(Hanover)、サクソニヤ(Saxony)等を征服し、進んでオーストリヤ軍をケーニヒグレーツ(Koeniggraetz)に擊破し、ウィーンに迫つた。 オーストリヤはイタリヤ方面で海陸共にイタリヤ軍を破つたけれども、本國に於ける大敗のため、遂にプラーグ(Prag)條約を結び、(1)オーストリヤはドイツ聯邦を脫し、(2)シレスウィヒ、ホルスタインをプロシ

39-40, (2) (3) (4)　39-40, (1)

北ドイツ聯邦

F ④

戰後のオーストリヤ

原因

イスパニヤ王位問題

ヤに讓り、(3)イタリヤにヴェネチヤを割いた。

戰後の形勢　戰後プロシヤは先にオーストリヤと結んだハノーヴァー以下の諸國を併合し、ついで北ドイツ聯邦を作つて、その盟主となり、南ドイツ諸國と攻守同盟を結び、國勢俄に興隆した。之に反してオーストリヤはドイツ聯邦の外に孤立して振はなくなり、遂にマジャール人(Magyars)の宿望に從ひ、ホンガリヤ王國の建設を許し、オーストリヤ帝が、その王を兼ねることとなつた(一八六七)。

獨佛戰役　佛帝ナポレオン三世はプロシヤの興隆を嫉み、その向ふを張るため、一八六七年オランダからルクセンブルグ(Luxemburg)を買收しようとしたが、プロシヤが抗議したため行はれなかつた。プロシヤはドイツ統一のため佛國と一戰しようとして準備を整へ、フランスの國民もプロシヤとの戰爭を望んでゐたので、ナポレオン三世もその機を待つてゐた。偶〻イスパニヤに內亂が起

モルトケ

兩國の優劣

ナポレオン三世の降服

パリの包圍、開城

ヴェルサイユ條約

り、國民が女王を廢して、プロシヤ王族を迎へ立てようとしたのが原因で、一八七〇年遂に獨佛戰役が起つた。

戰況　この戰役でプロシヤの方は動員が忽ちでき、南ドイツの諸國もフランスの豫期に反してプロシヤを援け、兵數は八十五萬に及び、しかも敵愾心は燃ゆるやうであり、モルトケの作戰計畫が遺憾なく行はれたので、大軍は忽ち佛國に侵入して、連戰連勝した。フランスの方は兵數僅に三十二萬、しかも動員が手間取り、元帥バゼーヌ(Bazaine)はメッツ(Metz)に圍まれ、皇帝ナポレオン三世はそれを救はうとしてセダン(Sedan)で圍まれ、忽ち大軍を率ゐて降服した。ドイツ軍は進んでパリを圍んだ。ついでメッツも陷落し、ガンベッタ(Gambetta)のパリ救援軍も敗れ、パリは包圍を受くること五ケ月で糧食が盡き、一八七一年一月遂に開城した。

是より先、ナポレオン三世が降服した時、パリでは帝政を廢して假政府ができたが、開城後假政府の長官チエールはビスマルクとヴェルサイユ假條約を結び、佛國はエルザス(Elsass (Alsace))、ロートリンゲン(Lothringen (Lorraine))二州の割讓と、五

フランスの第三共和政

ドイツ皇帝宣言式

ドイツ帝國憲法

ドイツ統一完成

ビスマルクの政治

十億フランの償金支拂とを約して獨佛戰役は終局した。戰後パリに社會黨の亂が、起つたが、チエールは之を鎭定して大統領となり、佛國は第三共和政時代に入つて今日に及んで居る。

ドイツの統一　戰勝の結果、プロシヤの武威が大に揚がり、ドイツ統一の氣運が全く熟した。全ドイツの君主はパリの開城より十日前に、ヴェルサイユの宮殿に集つて、プロシヤ王ウィリヤム一世をドイツ皇帝と仰ぎ、ドイツ帝國がこゝに成立した(一八七一年一月)。ついでドイツ帝國憲法が制定され、プロシヤ王は代々ドイツ皇帝として帝國の大權を握り、帝國立法のために、聯邦諸國を代表する聯邦議會と、國民を代表する帝國議會とを置くこととなり、十九世紀に於ける歐洲大問題の一であつたドイツの統一は、ここに完成したのである。

ドイツ皇帝ウィリヤム一世

統一後のドイツ　は國民の元氣横溢し、宰相ビスマルクは力を社會政

皇帝ウィリヤム二世下の發展

策、植民政策に用ひ、また陸軍を擴張して大に國力を發展した。一八八八年ウィリヤム二世が卽位してからは、ビスマルクを退けて、萬機を親裁し、海軍の大擴張を行ひ、世界の霸權を握らうと努め、その國力の充實、商工業の發展は目覺ましいものがあつた。

壯年のウィリヤム二世

水先案内解雇*

ドイツ人の國民性　ドイツ人は大體から見て、天才的ではないが、重厚勤勉で、意志が强く、忍耐力に富んでゐる。又事物を徹底的に思索研究し、之を體系的に整頓する。從つて國難に遭遇しても復興力を失はない。ナポレオン戰後の復興、帝國統一後の目ざましい學術の進步、產業の發達等、かゝる國民性に負ふ所が多い。

佛國の情勢　佛國はドイツに破られた後、政爭が烈しかつたが、遂に共和政治が確立した。國民は勤勉して國力を回復し、巨額の償金を

*一八九〇年ビスマルク辭職當時英國パンチ(Punch)の漫畫。舵に倚れる皇帝は梯子を降るビスマルクは自ら萬事を欲し、遂に行せん老臣を斥けた。

戰敗後の國力回復

早くドイツに皆濟して世を驚かし、尙ほ軍備を擴張し、後には同盟國ロシヤのために巨額の公債をも引受くるに至つた。然し國內に小黨が分立して、政局が安定しないのと、人口の增加が殆んど停滯して居るのは、この國の弱點である。

フランス人の國民性　フランス人は敏捷輕快であり、古來屢、獨創的天才を出した。然し理論を愛し、激情的で、冷靜沈着を缺ぐ嫌がある。國民は一般に愛國心と勤儉貯蓄心に富んでゐる。獨佛戰後早く財政が回復したのも、小黨の分立するのも、國民性の現れである。

領土的發展　F①

第四章　アメリカ合衆國の發展

合衆國の發展　アメリカ合衆國(米國)は建國以來西方へ發展する方針を一貫し、先づ佛國よりルイジヤナを、次にイスパニヤよりフロリダ(Florida)を買收し、更にテクサス(Texas)を併せ、又メキシコと戰つてカリフォルニヤ(California)等を取り、建國から僅に七十餘年を經た十九世紀の中頃には、その領土

產業開發

が遂に太平洋岸に達して、北米大陸の南半を占むるに至つた。この間合衆國は歐洲諸國の移民を歡迎し、又黑人奴隸を使役して、產業を開發したから、國勢は駸々として進んだ。

英國から獨立した米國人の進取の氣象は、その子孫に傳はつて、勇敢なる西方發展を遂ぐるに至つた。その領土が太平洋岸に達すると共に、將來太平洋の覇權を握つて、自國を世界第一の强國としようとするに至つたのも、彼等の敢爲の氣象からである。

南北事情の差

奴隸廢止問題　F②

リンカーン大統領當選

南北戰役　米國の大領土の南部と北部とは、氣候風土の差から、大に經濟事情がちがひ、北部では自由民による商工業が發達し、南部では、地主が奴隸を使つて綿、穀物等の農業を行つた。

從つて北部を根據とせる共和黨(Republicans)は、奴隸の境遇に同情して、その廢止を唱へ、南部に勢力ある民主黨(Democrats)は、產業上の必要から之に反對し、その爭が次第に烈しくなつた。一八六〇年熱心な奴隸廢止論者で共和黨の首領のリンカーン(Lincoln)が大統領に當選したので、南部は北部から分離してアメ(The

戰況

F②

戰役の終局

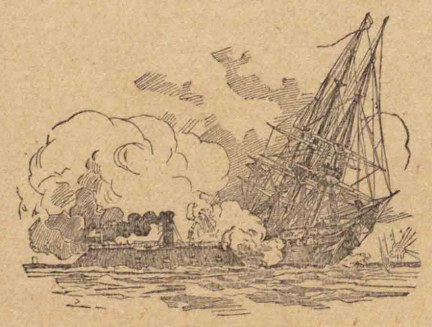
奴隷廢止

メキシコの紛亂

トンラグ

リカ聯邦を建て、ジェッファーソン・デーヴィスを大統領とし、翌年遂に北部と開戰した。初めは南軍が頻りに北軍を破つたが、後形勢一變して北軍の勢が振ひ、一八六五年北軍の將グラント（Grant）は南軍の將リー（Lee）を破り、南部の首府リッチモンド（Richmond）を陷れたので、聯邦は屈して合衆國に復歸し、五ヶ年に亙つた内亂が收まつた。これより先、リンカーンは奴隷解放を宣言し、奴隷使役は全國的に廢止さるるに至つたが、亂後間もなく暗殺された。然しその後ジョンソン（Johnson）やグラントが相次いで大統領となり、南部の人心を和らげ、合衆國の統一は舊に復した。

メキシコの亂　南北戰役後、合衆國の勢力は、隣國メキシコに及んだ。同國は獨立後黨爭が絶えず、財政が紊れたため、債權國たる英、佛及びイスパニヤの三國



最初の裝甲艦*

*南北戰役中、一八六二年南軍が木造艦メリマックの船體を引揚げて、鐵を張りジリニヤと改名し北軍を破つた。これが起原で、木造艦の上に裝甲したものである。

ナポレオン三世の野心

と紛擾を起した（一八六一）。功名心の盛な佛國皇帝ナポレオン三世は、當時米國で南北戰役の最中なのに乘じ、兵を出してメキシコの共和政治を廢し、オーストリヤのマクシミリヤン（Maximilian）大公を皇帝として、自己の保護の下に置いたが、メキシコ人は之に服せず、米國の内亂もやがて終つて、モンロー主義を以て佛國に撤兵を迫つた。ナポレオン三世も已むを得ず之に從つて、メキシコを棄てたので、メキシコ人は、マクシミリヤンを殺して共和政治を回復した。これでナポレオン三世は大にその威信を墜した。

その威信失墜

第五章　露土戰役とロシヤの國情

黑海中立廢棄

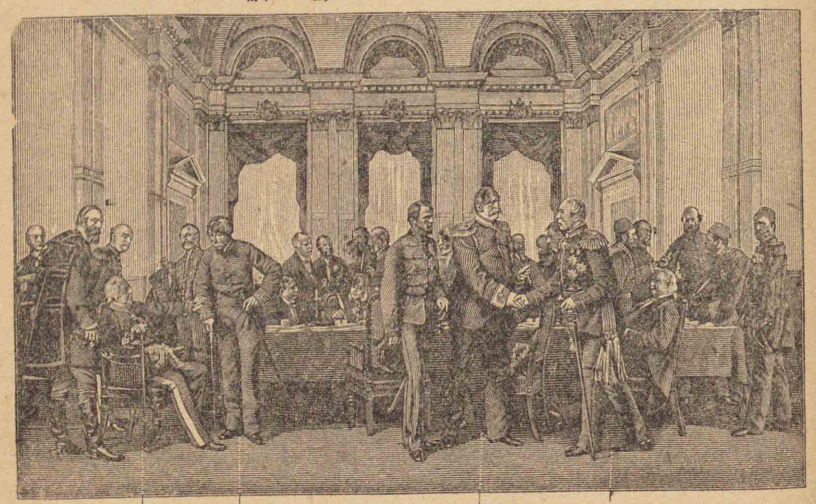
ロシヤの南下策　南下してバルカンに出ようとする、ペートル大帝時代からのロシヤの傳統的政策が、クリミヤ戰役で頓挫した後も、ロシヤはこの政策を固持した。それで獨佛戰役の際、プロシヤに對して好意的中立を守つた報酬として、黑海の中立に關するパリ條約規定

の廢棄を宣言して、列國の承諾を得、また當時起つた總スラヴ主義(Panslavism)を以てバルカンのスラヴ民族を綜合し、トルコを壓迫しようと、その機會を待つてゐた。

露土戰役　十九世紀の後半トルコは財政大に紊れて國力益〻衰へ、しかも領内のキリスト教徒に對する迫害は、クリミヤ戰役後も依然甚だしかつたので、一八七五年に至り、ボスニヤ(Bosnia)、ヘルゼゴヴィナ(Herzegovina)が先づ叛き、次いでセルビヤ(Serbia)、モンテネグロ(Montenegro)、ブルガリヤ(Bulgaria)等も亦之に呼應して起つた。トルコは之を鎮めるため大虐殺を行つたので、英、露、獨、墺の四國が聯合してトルコに内政改革を迫つたが效がなかつた。ロシヤはこれを好機とし、トルコ領内のキリスト教徒の保護を名義として、一八七七年トルコと開戰した。

ロシヤは軍を二分し、本軍はドナウ(Danube)河を越え、オスマン・パシャ(Osman Pasha)の固守したブレヴナ(Plevna)の要塞を攻めて、五ケ月の後遂に之を陷れ、進んでアドリヤノープル(Adrianople)を占領してコンスタンチノープルに迫り、別軍は黑海の東を廻つてアルメニヤ(Armenia)に入つた。然るに英國がトルコの依頼で干渉しようとしたので、ロシヤは急にトルコとサン・ステファノ(San Stefano)條約を結んで和した。

ベルリン會議



(ヤシロ)フコヤチルゴ　(スリギイ)リーレスデ　(ツイド)クルマスビ　(ヤシロ)フロワシ

ベルリン會議　然るにこの條約は、トルコにバルカン諸國の獨立を認めさせ、且つブルガリヤの境域を大に擴めて半獨立國とするものであつたので、英國の首相ヂスレーリ(Disraeli)は、これがためロシヤの勢力の餘りに伸びるのを恐れ、オーストリヤと共にこの條約に反對し、形勢甚だ切迫したが、ドイツの宰相ビスマルクが仲裁して、べ

ルリンに列國會議を開いた(一八七八)。然るにヂスレーリとロシヤのゴルチャコフ(Gortchakov)と議が合はず、會議は殆んど決裂しようとしたが、ビスマルクが英國を援け、ロシヤを抑へたので、ロシヤは遂に屈して前條約を棄て、次の諸項を受諾した。

(1)トルコはセルビヤ、モンテネグロ、及びルーマニヤの獨立を承認すること。

(2)サンステファノ條約に定められたブルガリヤの領地を縮小して、之を半獨立國とすること。

(3)トルコはその臣民の信教の自由を公認すること。

(4)トルコはカルス(Kars)外數地をロシヤに、テッサリヤ(Thessaly)をギリシヤに割讓し、サイプラス(Cyprus)島の管理を英國に、ボスニヤ・ヘルゼゴヴィナの守備及び行政をオーストリヤに任すること。

かくてトルコの領土は大に縮小し、ロシヤの南下策も失敗したので、この後ロシヤは專らアジヤ方面の侵略に力を注ぐこととなつた。

ロシヤの內情　ロシヤは歐亞にまたがる大國で、その武力は外國を

人民の無智　專制抑壓　國內の不平分子　異民族の獨立運動　科學と物質文化　自由主義

脅やかしたが、その文化は低く、國民の多數は無智で、少數の貴族は專制政治を以て貧困な人民を抑壓したが、十九世紀以後は、智識階級の不滿が次第に現はれた。同世紀の中頃、皇帝アレクサンドル二世が立ち、初め自由主義を執り、農奴の解放を行つて農民の救濟を圖つたが、のち專制抑壓の方針に變つたので、國內の不平分子が愈〻激して、帝は遂に虛無黨員(Nihilists)に暗殺された(一八八一)。又領內の異民族ポーランド人フィンランド人等もロシヤ人に反感を抱き、その獨立運動も屢〻起り、國家の前途を暗うした。

第六章　近世文化の進步

近世文化の概觀　十九世紀以後に於ける西洋文化の特色は、十八世紀以來興隆した科學の長足の進步と、之に伴つて物質文化が前古無比の發達を遂げたことと、フランス革命以後自由主義が次第に勢力を得て政治上に於ては從來の專制政治が廢れて立憲政治が之に代

交通上の大變化

エネルギー不滅説
生物進化論

その他の自然科學

人文科學

地理的探險

り、産業上では自由競爭の風が盛になつたことである。科學の進步は自然の偉力を人間生活の上に利用して、交通通信上に歴史上嘗て見ない大變化を來し、世界の各地を近接させ、國際關係を益〻密ならしむると同時に、産業の進步に伴ふ各國の競爭を激烈ならしめた。

科學の進步　十九世紀以後、自然科學は驚くべき進步を遂げ、種々の新説や、新發見が續出した。中でもドイツ人マイエル(Mayer)及びヘルムホルツ(Helmholz)のエネルギー不滅説や、英國人ダーウィン(Darwin)の生物進化論などは、その學界に及ぼした影響が最も大であつた。

ンィウーダ

その他物理學、化學、動植物學等をはじめ、あらゆる自然科學にそれ〴〵大家が輩出し、ドイツ人ペッテンコーフェル(Pettenkofer)やコッホ(Koch)等は新に細菌學を建てた。人文科學の方にも大家が輩出し、フランス人コント(Comte)は社會學を起し、史學にはドイツ人ランケ(Ranke)が出て、科學的研究法を創めた。

地理的探險によつて地理學及び自然科學は大に進步した。アレクサンドル・フンボルト(Alexander Humboldt)の南米及び中アジヤの踏査、スタンリー(Stanley)及びリヴィングストン(Livingstone)のアフリカ内地の探險等は最も名高い。二十世紀の初になつて、米國人ピーリー(Peary)は北極に、ノルウェー人アムンゼン(Amundsen)は南極に達し、今や地球上未知の地は殆んどなくなりうとしてゐる。

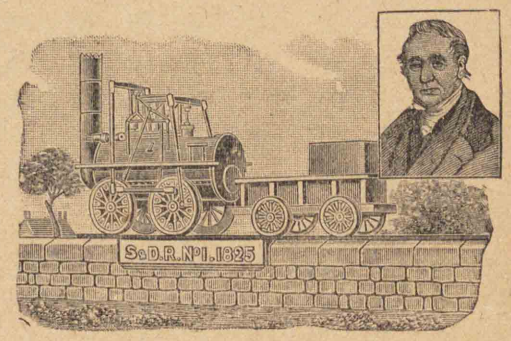
汽船と汽車

電信法

電磁氣の應用

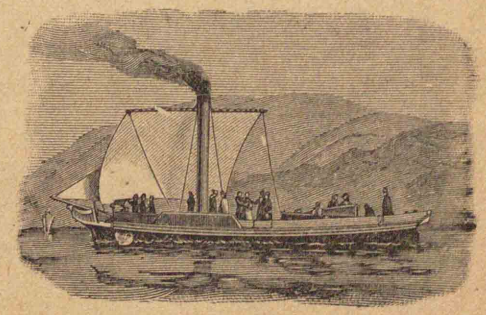
科學の應用　は人間百般の生活に大變革を來したが、中でも交通通信の機關の進步は驚くべく、十九世紀の初めに、米國人フルトン(Fulton)が先づ汽船を發明し、ついで英國人スチヴンソン(Stephenson)が汽車を作つて、一八三〇年始めて之を運轉した。その頃ドイツ人ガウス(Gauss)及びウェーベル(Weber)は電信機を發明し、米國人モース(Morse)が之を完成した。海底電線は十九世紀の中頃、始めて英佛間に沈設され、その後漸次遠距離に及び、今や世界に普及した。その他米國人グラハム・ベル(Graham Bell)は電話を、イタリヤ人マルコニ(Marconi)は無線電信を實用に供し、各國郵便制度の發達と相待つて、通信の便は益〻備はつた。尚ほ電車、電燈を始め、無線電話(ラヂオ)、寫眞電送等電磁氣の應用は日〻に盛になつて窮まる所を知らない。

醫術
兵器
航空術



スチヴンソンと其の作つた機關車

科學の進歩は、また醫術や兵器を發達させ、X線が發明されて、その診療上の應用は日々に盛になり、血精注射の發明で、傳染病の豫防や治療に大効果を擧げた。兵器では水雷、綿火藥、後裝連發銃、潛水艦等皆十九世紀の發明に係るが、二十世紀に入つては航空術の研究が奏效し、ドイツのリリエンタル、米國のライト兄弟の飛行機、ドイツのツェッペリン伯の飛行船等が成功し、世界大戰以來、その實用俄かに廣まり、空中交通網は世界を覆ふに至つた。


發明當時の汽船

思潮の變化と文藝 純理に偏した十八世紀啓蒙思想の反動で、十九世

文學
哲學
美術

紀の前半には感情を重んずるロマンチシズム(Romanticism)の大家として、佛國の小說家シャトーブリヤン(Chateaubriand)やユーゴー(Hugo)、英國の詩人バイロン(Byron)、小說家スコット(Scott)、史家カーライル(Carlyle)等が現れたが、ロマンチシズムは過去を美化して之にあこがれ、現實を無視する風があつたので、十九世紀後半には客觀的寫實を勉むる自然主義が起り、ゾラ(Zola)の如き佛國の文學者が主にこの派を代表した。その他ロシヤのトルストイ(Tolstoi)の小說や、ノルウェーのイブセン(Ibsen)の近代劇のやうな、現代社會の矛盾苦惱を描寫する文學が、十九世紀後半に流行した。

哲學はカント以來ドイツが最も優れ、フィヒテ(Fichte)、シェリング(Schelling)を經て、ヘーゲル(Hegel)が一時ドイツの哲學界を風靡したが、のちショペンハウエル(Schopenhauer)、ニーチェ(Nietsche)等が出て、各〻一家の見を立てた。

美術では繪畫はフランスに大家が最も多く、ダヴィード(David)、ミレー(Milet)、コロー(Corot)等出で、英國のターナー(Turner)やロセッチ(Rosetti)も亦傑作を遺した。彫刻はイタリヤのカノヴァ(Canova)や、デンマルクのトルワルセン(Thorwaldsen)等が早く著はれ、のちフラ

ンスのロダン Rodin が新生面を開いた。音樂はドイツが最もすぐれ、中でもワグナー Wagner の歌劇は最も有名である。

世界的事業　交通機關の發達は世界を縮小させるやうなもので、一方には各國間の摩擦を激しくすると同時に、他方には平和的な國際事業を起させた。即ち世界博覽會は十九世紀の半始めてロンドンに開かれ、その後各國が屢〻之を開いた。その他、赤十字同盟、萬國郵便同盟、萬國電信同盟等ができ、また各種の學術的、政治的國際會議が頻りに開かれるやうになつた。

勞資利益の衝突
社會主義

社會主義と社會政策　産業革命が起つて機械工業が急に發達し、資本家が大工場を起して生産界を支配するやうになり、その被傭勞働者との利益の衝突から、勞働問題が起り、社會主義が先づ英國から起つた。その主張は初めは空想的であつたが、後次第に現實的となつて、その政治上の勢力も次第に伸びて來た。その結果國家は工場法、勞働保險法等各種の社會立法を以て勞働者を保護し、その境遇の改善

社會政策

歐洲問題の一段落
米國の繁榮
産業革命

を圖るに至つた。その他公私の慈惠病院、孤兒院、養老院等が各文明國に設けられ、貧富の懸隔から起る社會の不幸を救濟するやうになつたのも十九世紀以來の社會政策である。

第七章　列强の世界政策

世界政策　十八世紀に英國が植民地の戰で佛國を破つた後は、歐洲大陸の列國は、大陸内の問題に忙しくて海外に活動する餘裕がなく、英國が獨り世界に雄飛してゐた。然るに十九世紀の後半になつて、歐洲の懸案がドイツの統一で一段落を告げ、西歐は平和期に入り、米國も南北戰役後、國力益〻充實したので、歐米列强の海外に對する注意は急に高まつた。その上、産業革命に伴ふ工業原料の獲得、大量生産品販路の擴張、增加人口の處置等の必要から、列强は非常の發達を見た交通機關を利用し、世界の各地で抵抗力の弱い處を求めて、政治上經濟上の勢力を伸ばさうと競ふやうになつた。これが近代の世界

アフリカ奥地の闡明

F⑨

スエス運河の開通

政策(或は帝國主義)である。

十六世紀以來の白人の雄飛で南北アメリカ兩大陸は既に白人のものとなつてゐた。それで十九世紀以後の世界政策は、主として尙ほ殘れるアフリカ、アジヤの兩大陸と、太平洋上の諸島等に向けられた。

1 アフリカ分割

アフリカの分割 アフリカは暗黑大陸と稱せられ、歐洲人はインド交通その他のため沿岸地方を占領しただけで、奥地は久しく分らなかつたが、十九世紀の中頃からリヴィングストン、スタンリー等の探檢(Livingstone, Stanley)で、その眞相が明らかになつた。そこで列國は爭うて之を分割して十九世紀末までに、その大部分を占領した。

英國のエジプト經營 エジプトの藩王は佛人レセップスと共同して、スエズ運河を開鑿(Lesseps)し、一八六九年之を完成して、世界交通路を一變させたが、そのため國の財政が困難に陥つた。英國は之に乘じ佛國と共

英國のアラビ=パシャ鎭壓

ブール人の兩共和國

F⑨

南アフリカ戰役

レセップス

にエジプトの財政管理權を得、その內政に干渉したので、エジプトに國民黨が起り、アラビ=パシャ(Arabi Pasha)が兵を擧げた。その時英國が單獨に之を鎭定したので、エジプト管理の實權は英國に歸した。

世界大戰の起つた時、英國はエジプトを保護國としたが、戰後エジプト人の要望を容れて、一九二二年之に獨立國の名義だけは與へた。

英國の南阿經營 英國は先にウィーン條約で南アフリカのケープ植民地(Cape Colony)を得たが、その地に住んだブール人(Boers)(オランダ人の子孫)は英人の支配を嫌つて北方に移住し、オレンジ自由國(Orange Free State)とトランスヴァール共和國(Transvaal)とを建てた。後これ等の地方に金と金剛石が多く出るやうになつたので、英國人が多數兩國に入り込み、參政權を要求して壓迫を加へた。兩國はこれを拒んで、一八九九年遂に英國と開戰し、初め屢〻英軍を惱ましたけれども、結局大國の力に勝てず、苦戰四年の後、英國に屈服して、兩

セシル＝ローズの事業

佛國の經略

ドイツの割り込み

F⑨

ベルギーの經營

國共にその植民地となつた。是より先英國の奇傑セシル＝ローズ Cecil Rhodes はトランスヴァールの北にローデシヤ Rhodesia を開拓したが、一九一〇年英國は南アフリカ諸植民地を併せて南アフリカ聯邦 Union of South Africa とし、その後ケープ植民地とエジプトとを聯ぬるアフリカ縱貫鐵道の完成に着手した。

セシル＝ローズ

其他の諸國のアフリカ經營　佛國は七月革命の頃、既にアルジェリヤ Algeria を取り、後チュニス Tunis を保護國とし（一八八一）、更にサハラ Sahara 沙漠及びその以南一帯の地を取り、またマダガスカル島 Madagascar を植民地とし、ついでアフリカ横斷を計畫してファショダ Fashoda を占領したが、英國の抗議で之を棄てた。ドイツは後れてビスマルク執政の晩年から植民政策に着手し、西南アフリカ South West Africa、カメルン Kamerun、トゴランド Togoland、東アフリカを占領した（一八八四）。その頃ベルギー王レオポルド二世の總裁する萬國コンゴー協會 International Association of the Kongo が、中央アフリカにコンゴー自由國を建てて拓殖を始めたが、のち王は之をベルギ

イタリヤの所得

十九世紀以後の侵略

F⑧

ー國に併合した（一九〇八）。イタリヤは又東アフリカにソマリランド Somaliland の一部及びエリトレヤ Eritrea を得た。

2　アジヤ侵略

アジヤの危機　歐洲白人のアジヤ侵略は十六世紀に始まり、ロシヤは陸路からシベリヤ全部を、西歐諸國は海路から印度その他東南アジヤ各地を侵略したが、十九世紀以後英露佛三國は更にその歩を進めて、全大陸の約三分の二をその植民地とした。かくて若し我が日本が起つてこの趨勢に抗しなかつたら、東洋文化の發祥地たる世界最大のアジヤ大陸も、アフリカと運命を同うすべき危機に立つに至つた。

英國の經營　英國の植民地中、印度が最も重要で、その寶庫と謂はれる。英國の印度に於ける地歩は十八世紀の後半に確立したが、十九世紀に入つて、東印度會社の經營益々その歩を進め、一八五八年土兵の

叛亂を鎭めて、英國は之を直轄に移し、一八七七年、印度帝國を設けて、女王ヴィクトリヤ(Victoria)が印度女帝となり、その後英國王は印度皇帝を兼ねることになつた。これより先英國はシンガポール(Singapore)を得、清國との鴉片(Opium)戰爭に勝つて香港(Hongkong)を取り、極東への交通路を扼し、更にビルマ(Burma)を併せ、ベルチスタン(Baluchistan)を保護國とした。

愛琿條約

ロシヤの侵略　十八世紀の初までにシベリヤの大部分を征服したロシヤは、益〻侵略の歩を進め、一八五八年東シベリヤ總督ムラヴィヨフ(Muravief)は清國に迫り、愛琿(アイグン)(Aigun)條約を結んで黑龍江以北を占領し、その後二年、英佛聯合軍の清國に侵入した時、ロシヤは仲裁した功によつて烏蘇里(スリ)江以東の地を得、ウラヂヴォストックを建てて極東經營の根據地とした(一八六一)。他方ロシヤは十九世紀の初、ペルシヤからコーカシヤ(Caucasia)を奪ひ、中央アジヤを侵してブカラ(Bukhara)、キヴァ(Khiva)、コーカンド(Kokand)の諸汗國を併せ、又アフガニスタン(Afghanistan)に出で、英領印度を脅やかし、英國と紛爭を起したが、のち境界を協定して事なきを得た。

中央アジヤ侵略

三國干渉

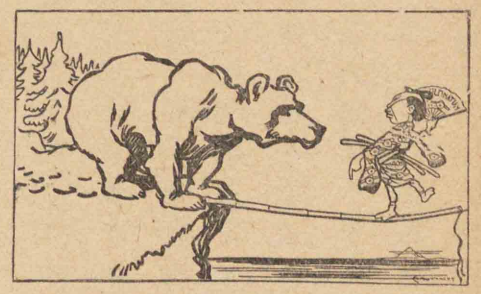
列强の支那壓迫

フランスの經營　佛國はナポレオン三世の時代、先づ安南からサイゴン(Saigon)を奪ひ、ついでカンボヂヤ(Cambodia)、安南を保護國とし、支那と戰つて東京(トンキン)(Tongking)を奪ひ、又シャムに迫つてメコン(Mekong)河以東の地を割かせ、又東京から支那の雲南に鐵道を敷設した。

支那と列强　支那は世界の大國で、天然資源は豐富であり、人口は四億といはれる。それで日清戰役の結果、支那の實力が暴露して恐るるに足らないことを見た列强は、同國に對して俄に帝國主義的活動を始めた。是より先、ロシヤは既にシベリヤ鐵道敷設を始めてゐたが、我が國が支那を破つて、下ノ關條約を結ぶと、獨佛兩國と共に我が國に干渉し、遼東半島を支那に還付させ、その報酬としてロシヤは滿洲に於ける鐵道敷設權を得た(一八九六)。ついでドイツは自國宣教師の殺されたのに乘じ、支那を威嚇して、膠州灣を租借し、ロシヤは旅順口及び大連を、英國は威海衞を、佛國は廣州灣をそれ〴〵租借した。

日露戰役　列國がかく支那を壓迫したので、清國人は之を憤つて、一

危ふい日本*



八九九年北清事變が起つた。日本は列强と共に出兵して、謂はゆる拳匪(義和團)を鎭定したが、ロシヤはこの機に乘じ大兵を出して滿洲を占領し、朝鮮を脅かしたので、日露戰役が起つた。ロシヤは海陸共に全敗し、その極東經營は頓挫した。

日露戰役の意義　日露戰役は三百年來歐洲人に抑壓されて來た有色人の中から日本が躍り出て、始めて白人の强國を破つた劃期的事件である。しかもロシヤは他の歐米の諸國から怖れられた强國であつたから、日本の大勝が世界の諸有色民族を刺戟覺醒させた力が甚だ大であつたのは當然である。印度人の英國に對する獨立運動の如きは日露戰役の影響が甚だ大である。又ロシヤの戰敗で、その專制政治の腐敗が暴露し、國內の動搖が一層加はつて、後の世界大戰の勃發にも間接に影響した。これ等の點から見て日露戰役の意義は極めて大である。

戰敗後、ロシヤ皇帝ニコラス二世は國內の騷擾を鎭むるため憲法を發布し議會を開い

*日露戰役起らうとせるときの佛國フィガロ(Figaro)新聞の漫畫。西洋では日本の必敗を信じて居た。

たけれども、多年の弊害は依然として除かれなかつた。

3　太平洋進出

太平洋の重要性　十六、七世紀に南洋諸島がイスパニヤ、オランダ等の有に歸した後、太平洋に關する列國の關心は暫らく薄かつたが、十九世紀の中頃米國の領土が太平洋岸に達した頃から、太平洋は俄に重要性を有するに至つた。卽ち米國は太平洋航路を取つて極東に進出し、英國はオーストラリヤの開發に力を注ぎ、ドイツも亦後れ馳せに太平洋上の諸島を獲得して世界政策に乘り出したからである。

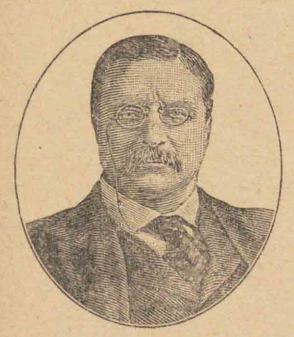
英國の大洋洲拓殖　十八世紀の後半、英國人ジェムス・クック(James Cook)が太平洋を探檢した。英國はその報告に基いて、罪人をオーストラリヤ(濠洲)(Australia)に送つて拓殖を始めたが、十九世紀の中頃砂金が發見されてから、移住者が次第に增し、鑛業の外農業牧畜にも從事し、金、穀物、羊毛、羊肉等の產額が大に增して、英國の重要なる資源となつた。英國は一九〇〇年濠

洲聯邦を置き、之を自治領とした。英國は又ニュージーランド、フィージ(New Zealand, Fiji)ー等附近の諸島をも取つて之を開發した。

ドイツの太平洋經營　ドイツはアフリカ分割に加はつた頃から、太平洋方面にも着眼し、英國及びオランダとニューギニー(New Guinea)を分割し、ビスマルク(Bismarck)諸島、マルシャル(Marshall)諸島を取り、マリヤナ(Marianne)諸島、カロリン(Caroline)諸島、パラウ(Parau)諸島をイスパニヤから買收し、サモア(Samoa)諸島を米國と分領して、太平洋上の一勢力となつた。

米國の帝國主義
布哇聯合

米國の活動　米國は久しくモンロー主義を執つて、米大陸以外の事に干渉しなかつたが、十九世紀末に至り、國力大に充實するにつれ、モンロー主義を以て外力の米大陸侵入を防ぎつゝ、帝國主義を採るに至つた。偶〻起つた布哇(ハワイ)(Hawaii)王國の内亂に干渉して之を併せ(一八九八)、又イスパニヤ領キューバ(Cuba)の獨立を助けて、イスパニヤと開戰し、西印度のポルトリコ(Porto Rico)島、太平洋


ローズヴェルト

太平洋上の一勢力
米國と支那

のフィリッピン諸島とグワム(Guam)島とを賣渡させた。かくて太平洋上に領土を得た米國は、當時歐洲の列强が、支那に對して活動し、各自の勢力圏を設定しようとするのを見、大統領マッキンリー(Mckinley)は支那の領土保全、門戸開放、機會均等を唱へ、列强に贊同させた(一八九九)。米國は又大西、太平兩洋をつなぐ運河を必要とし、大統領ローズヴェルト(Theodore Roosevelt)の時、パナマ共和國をコロンビヤ(Columbia)から獨立させ、パナマ(Panama)から必要の地域を割譲させて、パナマ運河開鑿の工事を完成し、海軍の大擴張を行ひ、大西、太平兩洋艦隊を隨意に一方に集中し得るやうにし、太平洋上の米國の勢力は急に增大した。

パナマ運河開通
海上權の發展

パナマ運河開通工事

近世期の序幕たるフランス革命は、十八世紀末に起つたが、近世史は大體十九世紀の歷史である。十九世紀は革命の世紀といはれる。それは此の世紀に於て政治的革命が頻發したばかりでなく、社會、產業、學問、軍事等人間生活のあらゆる部門に於て、革命的變化が起つたからである。先づフランス革命は殘存せる中古封建の遺風を一掃し、各國民に自由主義を植えつけた。この革命及びそれに續けるナポレオン時代の反動として、保守主義が一時全歐を風靡したけれども、自由主義は世紀の半までに全く之を克服した。自由主義と共に國民主義が勃興し、ドイツ、イタリヤの民族的統一に結實したが、尙ほ取殘された民族も少くなかつた。他面產業革命は十九世紀の前半に完成し、その結果社會主義が生れ、各國內部に社會不安を招いた。激烈なる帝國主義的國際競爭も、亦產業革命の自然の結果であつた。是等の情勢は國際關係を極度に險惡ならしめ、遂に世界未曾有の平和の大破綻たる世界大戰となつた。科學の驚異的進步が、人間の日常生活の上に大變化を齎らして、現代生活の型のできたのも十九世紀である。我が國が長い間の鎖國主義を棄てて、國を開いたのは、此の世紀の半であつた。これは我が國の發展のため非常に幸であつた。それは一方に於て、汽車、汽船、電信機等文明の利器が、既に西洋に於て一通り發明されて、文化形態の型ができた後であつたから、俊敏な日本人は、大急ぎで一纏めに、その長所を採用することができたのと、他方その頃まで歐米諸國が內部的問題、例へばドイツやイタリヤの統一問題、米國の奴隷廢止問題のやうな問題の解決に忙しく、十九世紀末期のやうに、世界政策に力を注ぐ餘裕がなかつたから、我が國はその間に明治時代の驚異的進步を遂げ、一通り自衞の力を備ふることができたからである。

第五編　現代

第一章　世界大戰

1　大戰前の歐洲

形勢の險惡化

武裝平和

三帝同盟

武裝平和　露土戰役の後歐洲には三十餘年間平和が續いた。然し國際關係は複雜で、列强は內は歐洲に於て、外は世界政策に於て利害相反し、衝突の危險は常に存在し、同盟の對立による國際均勢で、やつと平和が保たれた。然るに二十世紀に入つて、その均勢は動搖し、形勢は次第に險惡を增したので、列强は、表面親善を裝ひつゝ、內は負擔の重さに苦しみながら、競つて軍備を擴張した。謂はゆる武裝平和(Armed Peace)の狀態で、一點の導火が忽ち全歐を爆發させる恐れがあつた。果して一九一四年に至つて、前古未曾有の世界大戰が勃發した。

兩同盟の對立　獨佛戰役後ビスマルクは佛國の復讐に備ふるため、獨墺露三國皇帝の間に謂はゆる三帝同盟(Alliance of Three Emperors)を結んだが、ベルリン會議

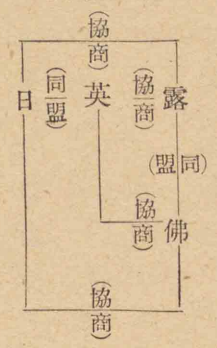
三國同盟
露佛同盟
英國の『光輝ある孤立』

の後、ロシヤは會議の際のドイツの態度を怨み、佛國に近づいたので、ビスマルクは先づオーストリヤと防禦同盟を結び、ついでイタリヤがチュニス(Tunis)を保護國としたフランスを憎んでゐるに乘じ、イタリヤとも同盟したので、一八八二年三國同盟(Triple Alliance)が成立した。その後、フランスとロシヤは益〻親しみ、一八九二年兩國は遂に同盟した。

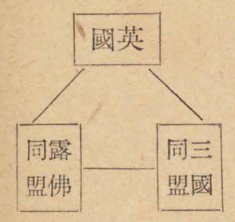
三國同盟

かくて歐洲大陸の五強國は二個の同盟に分れて對立し、英國は謂はゆる『光輝ある孤立(Splendid Isolation)』を守つて、兩同盟と共に鼎立の形をなし、これによつて諸國間の均勢が二十世紀の初めまで保たれた。

露佛同盟(三國協商)



鼎立三勢力



國際關係の變化　然るに三勢力の鼎立關係は、二十世紀に入つて次第に變化した。英國はアジヤに於けるロシヤの壓迫に備ふるため、その傳統的政策をすてゝ、一九〇二年日本と同盟すると共に、ド

日英同盟
三國協同
佛伊の接近
ヴィクトリヤ時代英國の隆盛

イツ海軍の勃興に備へて、漸次佛國と接近し、日露戰役中遂に之と協商を結び、その後ロシヤとも協商し、一九〇七年三國協商(Triple Entente)が成立した。かくて三國同盟と三國協商とが對立するに至つたが、イタリヤは、オーストリヤと利害を異にし、漸次フランスと親しむに至つた。

英獨の對抗　英國は女皇ヴィクトリヤ(Victoria)の長き治世の間(一八三七—一九〇一)、保守黨にディスレーリ(Disraeli)、ソールスベリ(Salisbury)、自由黨にグラッドストン(Gladstone)等の大政治家が出て、交〻内閣を組織し、保守黨は主として對外政策に、自由黨は内政の改革に盡力し、特にグラッドストンの努力で、英國の癌といはれるアイルランド問題も或程度の解決を見、またチェンバレン(Chamberlain)等の盡力で、一八八七年後、屢〻植民地會議(後帝國會議と改稱した)を開いて本國と植民地との結合を固めた。

グラッドストン

かくて大陸諸國が屢〻戰爭の渦中に入つた間も、英國だけは平和を保ち、卓越した海軍力を背景に、世界最大の領土を保全し、工業貿易も

ドイツの勃興

海軍擴張

總スラヴ主義

總ゲルマニヤ主義

盛大を極めて、國家は益〻繁榮した。

然るに二十世紀に入つてドイツの國勢が益〻振ひ、學術の進歩、商工業の發展に於て列國を拔き、霸氣滿々の皇帝ウィリヤム二世、は大に海軍を擴張して世界第二位に上し、英國の世界商業は漸次ドイツに蠶食されるやうになつた。英國は國防上經濟上の不安を感じ、益〻海軍を擴張して之に對抗したが、その間に英獨兩國民の反感もますます高まつた。

露獨政策の衝突 ロシヤは日露戰役後、最も力をバルカン方面に注ぎ、スラヴ人種の諸國を、その勢力下に綜合して總スラヴ主義(Panslavism)を實現せんとしたが、一方ドイツ皇帝ウィリヤム二世はオーストリヤと共にバルカンに進出せんとし、ゲルマニヤ民族の近東への發展を策し、トルコを懷柔してバグダード(Bagdad)鐵道を敷設し、ペルシヤ灣へ出ようとして、謂はゆる總ゲルマニヤ主義(Pangermanism)の實現を圖つたから、ロシヤの政策とバルカンで交叉衝突することになつた。

ドイツの野心

F⑨

佛の保護國モロッコ

F⑦

トルコの內紛

ブルガリヤの獨立

墺の二州併合

モロッコ問題 佛國はかねてモロッコ(Morocco)に着眼して同國に勢力を伸ばさうとしてゐたが、ドイツ皇帝も亦野心を抱き、日露戰役中、突然同國を訪問して問題を起した。ついで列國會議が開かれ、佛國の優越權が認められたが、その後ドイツは再びモロッコに干涉し、獨佛の關係は頗る緊張した。然し英國が佛國に味方してドイツを牽制したので、モロッコは佛國の保護國となり(一九一二)、やつと無事に收まつた。

バルカンの形勢 世界大戰の直前バルカンは甚だ多事であつた。トルコでは、立憲國日本のロシヤに對する勝利に鑑み、青年トルコ黨(Young Turks)が改革を主張し、一九〇八年憲法を發布させ、皇帝の廢立を行つた。このトルコの內紛の機に乘じて、ブルガリヤは獨立を宣言し、オーストリヤはボスニヤ(Bosnia)、ヘルゼゴヴィナ(Herzegovina)を併合した。

ボスニヤ、ヘルゼゴヴィナ二州の住民はスラヴ民族が多數を占むるから、同民族の國セルビヤが之を取つてアドリヤ海へ出ようと、多年望んでゐた。オーストリヤはドイツとの同盟を恃み、又當時ロシヤが日露戰役後の紛擾で、セルビヤを援くる餘裕のないのを

見込んで併合を敢行した。そのためロシヤとセルビヤは深くオーストリヤとドイツとを怨んだ。

伊土戰役　イタリヤは統一の後、早くから對岸の北アフリカに着眼したが、チュニスをフランスに取られたから、その東のトルコ領トリポリ Tripoli に望をかけた。偶〻トルコに革新運動が起つたので、イタリヤはトルコの國力復興を慮り、急にトリポリを占領し、伊土戰役が起つたが、トルコ軍は振はず、イタリヤはトリポリの外、エーゲ海の諸島をも占領した。

バルカン戰役　このトルコの國難に乘じ、かねてその領土蠶食の機會をねらつてゐたセルビヤ、ブルガリヤ、モンテネグロ、ギリシヤの四國は同盟してトルコに宣戰した(一九一二)。トルコは已むなくトリポリ、キレナイカ Cyrenaica をイタリヤに讓つて之と和し、四國と戰つたが、忽ち連敗したので、多大の地を割いて、同盟諸國と和した。然るに割讓地の分配について、ブルガリヤの要求を過大とした三國が、聯合してブルガ

バルカンの四國同盟　G①

第一回バルカン戰役　F⑨

リヤを破つたので、同國は讓歩してブカレスト Bucharest 和約を結び、トルコはアドリヤノープル Adrianople を回復した。かくてトルコは歐洲に於ける領土の大部分を失ひ、バルカン諸國は何れも擴大した。またドイツ、オーストリヤは永世中立のアルバニヤ Albania 國を建て、セルビヤのアドリヤ海岸への進出を防いだ。

第一回バルカン聯合軍主君*

*右から左へ、ギリシヤ王ジョージ。ブルガリヤ帝フェルヂナンド。モンテネグロ王ニキタ。セルビヤ王ペートル。

2　大戰の勃發及びその經過

大戰の勃發　大戰の直前には、前述のやうに英獨の對抗、露獨墺の關係、バルカン、モロッコの風雲等何れも形勢の險惡を示し、危機の切迫を思はせたが、かねてドイツ、オーストリヤのために大セルビヤの建設を妨げられたのを深刻に怨んだ大セルビヤ主義の一青年は、一九一

第二回バルカン戰役　ブカレスト條約　アルバニヤ國建設　G①

危機の切迫　セライエヴォの變

露、獨、佛、英の動員參戰

G ②

四年六月オーストリヤの皇太子フェルヂナンド夫妻をボスニヤのセライェヴォ(Serajevo)で暗殺したので、オーストリヤはセルビヤを嚴責し、兩國間の平和が破れ(七月二十八日)、それが世界大戰の端緒となつた。

ロシヤはオーストリヤのセルビヤに對する行動を牽制するため動員を行つたので、ドイツはオーストリヤを援けてロシヤに宣戰し、ロシヤの同盟國フランスはドイツに宣戰した。ドイツは腹背に敵を受け、先づ佛國を破つて、ロシヤに當る作戰計畫を行ひ、ベルギーの中立を犯して兵を進めたので、英國も亦露佛に味方してドイツに宣戰し(八月初)、こゝに獨墺

世界大戰中のドイツ皇帝

*『偉い、ベルギー！』

*"Bravo, Belgium!" 英國漫畫誌パンチから。

49–50

日本の參戰

G ②

獨軍のベルギー中立侵犯

マルヌの會戰

露軍の進出

タンネンベルヒの戰

〔謂はゆる同盟側〕と三國協商國〔聯合側〕との間に大戰が勃發した。日本も日英同盟の誼を重んじ、東亞の海面に於けるドイツ海軍を制すべく、やがてドイツに宣戰した。イタリヤは暫らく中立して居たが、翌年五月に至り起つて聯合側に參加した。

西方戰場　ドイツはかねての作戰計畫により、先づ主力を西方に向け、ベルギー軍が勇敢に防禦したリエージ(Liège)等の要塞を陷れ、破竹の勢を以て佛國に侵入し、パリに迫つた。然しフランスの名將ジョッフル(Joffre)は、これをマルヌ(Marne)河畔に迎へて擊破つたので、ドイツ軍は退却し、豫定の計畫を一變し、佛國の東北境に長い戰線を張り、聯合軍と塹濠戰をくり返さねばならなくなつた。

ジョッフル元帥*

東方戰場　では初めロシヤ軍がオーストリヤ軍を破つて、ホンガリヤに迫り、又一軍はドイツの東プロシヤに侵入したが、ドイツの名將ヒンデンブルグ(Hindenburg)は、タンネンベルヒ(Tannenberg)の戰で之を

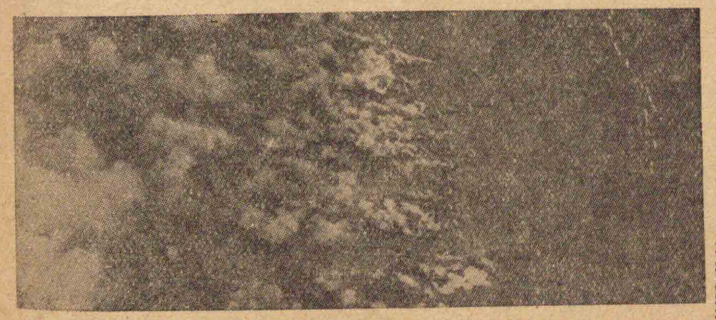
*開戰以來西方戰場の聯合軍を指揮して名を得た。マルヌの勝利は將軍の非凡なる戰略の結果である。

51, (1)
52, (1)
53–54, (1)

*ヒンデンブルグ元帥

打破つて、國内から逐ひ出し、又オーストリヤを援けて次第に被占領地を奪還し、進んでワルソーを陷れて、ロシヤ軍を遠くポーランド以東に退却させた(一九一五)。

バルカン戰場　ドイツは開戰後間もなくトルコを動かして、同盟側に參加させたので、ロシヤ軍はコーカサス方面からトルコ領に侵入し、英軍はペルシヤ灣からメソポタミヤに向つた。又英佛聯合軍はダーダネルス海峽を攻撃して、陸軍を上陸させようとしたが失敗した。やがてブルガリヤは起ちて同盟側に加はつたが、獨墺の大軍は南下し、ブルガリヤ軍と策應して、セルビヤを挾み撃つた。英佛兩國はセルビヤを



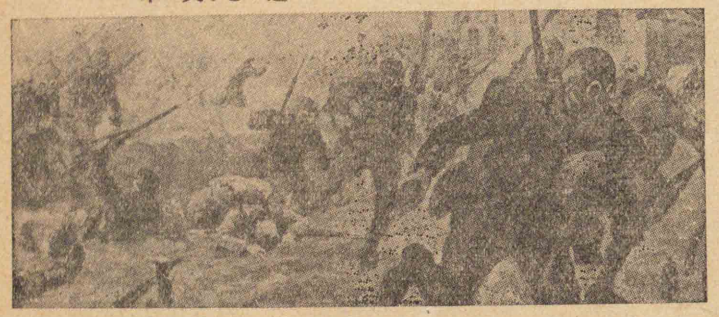
*ドイツ軍の毒瓦斯攻撃

*東方戰場に於ける軍司令官獨墺軍の名目上の受領者。二代後の統領。

**一九一五年東方戰場でドイツ軍が毒瓦斯攻撃を行つた時、飛行機から撮つた眞の白ビロード右方寫ヤ上のドイツ兵の影の脚。

救ふため、軍をサロニキ(Saloniki)に送つたが、既に時機を失し、セルビヤは全く敵軍に占領された。

毒瓦斯を冒して進む英軍*



久しく形勢を觀望してゐたルーマニヤも、一九一六年の夏聯合軍の勢が東西共に稍〻振つたので、遂に起つて聯合側に味方したが、同盟軍は忽ち殺到して、國の過半を占領した。かくてバルカン半島の大部分は同盟側に占領された。

植民地の戰　ドイツは歐洲の陸戰では甚だ優勢であつたが、その海外の植民地は、海軍の保護なきため、孤立に陷り、アフリカに在るものは英國植民地軍に、又太平洋上に在るものは英國と日本とに占領され、日本は又膠州灣を攻めて之を落したので、ドイツの三十年來の海外經營は水泡に歸してしまつた。

ヴェルダン攻撃　ドイツは初の作戰計畫が失敗

*一九一五年の秋西方戰場で、ドイツ軍が毒瓦斯で英軍を防いだ時、英軍がマスクを著けて之を圖した光景である。

ドイツ軍の猛攻失敗

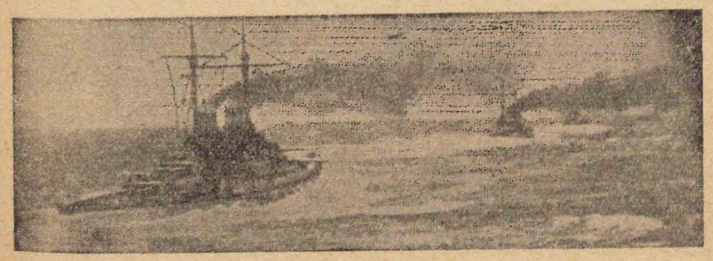
單獨不講和條約

英國の擧國一致內閣

ロイド＝ジョージ

して、戰爭は意外に長びき、その上植民地は奪はれ、本國は聯合國に封鎖され、物資も次第に缺乏して來たので、聯合軍の急所を奪つて、早く有利に戰局を結ばうと思ひ、一九一六年二月から主力を佛國のヴェルダン(Verdun)要塞に集め、猛烈な攻撃をくり返したが、佛軍は要塞司令官ペタン(Petain)の下に、必死に防戰して、遂にこれを撃退したので、ドイツの損害は甚大であつた。

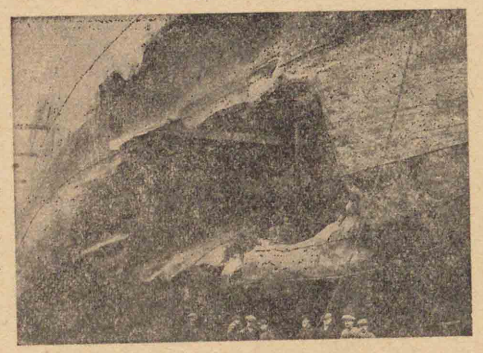
聯合國の結束　開戰以來聯合國の結束は甚だ固く、單獨不講和條約を結んで奮鬪を續け、英國は政黨內閣の例を破つて、一九一六年からロイド＝ジョージ(Lloyd George)を首相とせる擧國一致內閣を作り、强制徴兵を行つて、大軍を編成した。佛國も亦上下一致して、



ユートランド沖海戰に出動するドイツ艦隊

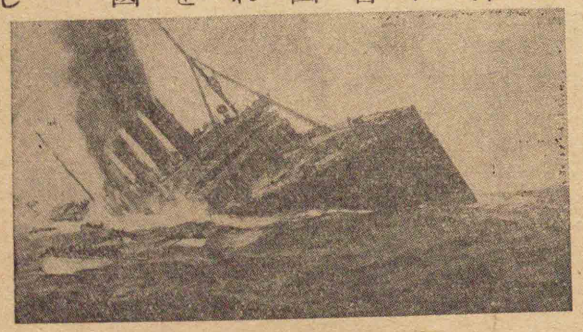
極力ドイツに當り意外の力を發揮した。

ドイツの潛水艦戰　ドイツの海軍は聯合側に比して著しく劣勢であつたから、その軍艦は時々北海に出たが、多くは軍港に潛んでゐた。一九一六年五月末日にユートランド沖(Jutland)の海戰で、ドイツ艦隊は英國艦隊に可なり損害を與へたけれども、英國の海上權を動かすことはできなかつた。それでドイツは潛水艦を用ひて盛に敵國の船舶を撃沈し、中立國の船にも屢〻損害を與へたが、英國艦隊のドイツ封鎖は益〻固くなつた。



潛水艦に襲れた商船の横腹

米國の參戰　ドイツは一層潛水艦戰を厲行し



*沒沈の號ヤニタシル

*大戰開始の翌一九一五年五月、米國參戰の二年前、ドイツ潛水艦は英國の旅客船ルシタニヤ號(Lusitania)を撃沈し、米國人旅客百餘名を水底に葬つて極度に米國人を激昂させた。

無制限潜水艦戰宣言

て、英國の糧道を絶ち、これを饑飢に陷れて、聯合側を崩壞屈服させようと決意し、一九一七年二月以後無制限潜水艦作戰を行ふと宣言した。アメリカ合衆國(米國)は、それまで中立を守り、歐洲交戰國に軍需品その他の物資を供給して、巨大な利益を得てゐたので、ドイツの右の宣言を憤つて、直に之と斷交し、ついで之に宣戰した(四月)。

米國の參戰

米國が參戰すると、中米、南米の諸國も之に倣つて、ドイツと斷交し、又は之に宣戰した。久しく形勢を觀てゐたギリシャも遂に起つて聯合側に加はり、支那、シャムもドイツに宣戰したから、世界は過半ドイツの敵となつた。

米國參戰の影響

聯合側の諸國はそれ〴〵自己の交戰目的を持つてゐたが、米國の大統領ウィルソン(Wilson)が、軍國主義の打破と、民主政治の擴充とを標榜して、自國を參戰させてから、聯合諸國はそれを交戰の共同目的とした。それで大戰の末期からその直後にかけ、民主主義が一時世界を風靡する勢を得た。

ロシヤの革命　ロシヤでは古來階級による政治上、經濟上の差別甚だしく、下層の農民勞働者は貴族、地主、資本家に苦められてゐたので、

ロシヤ下層民の苦痛

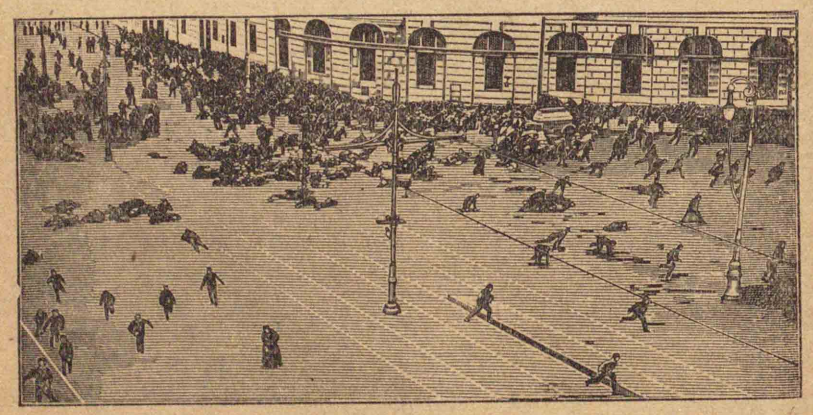
革命の勃發

共產主義の勝利

ブレスト＝リトウスク條約

レニン

日露戰役の頃から、革命運動が度々起つたが、世界大戰の結果、物資缺乏して國民の生活が益〻苦しく、且戰局も愈〻不利となつたので、一九一七年三月遂に革命が起り、三百餘年續いたロマノフ(Romanov)帝室は一朝にして仆れた。その後政權暫らく動搖し、軍隊の士氣も大に衰ろへたが、この年十一月、共產主義のレニン(Lenin)、トロツキー(Trotzky)等が政權を得て、社會組織を根本から破壞し、革命前の條約を無視し、翌年春ドイツとブレスト・リトウスク(Brest-Litovsk)で單獨に和を結んだので、ルーマニヤは孤立し、やが



ロシア革命の慘狀*

*一九一七年三月ロシヤ革命後、政權がまだ動搖してゐた七月、レニン一派は一度暴動をペトログラードで起して失敗し、十一月再擧して遂に其の目的を達した。此圖は七月暴動の際ペトログラードのネヴスキー廣小路(Nevski Prospekt)に於ける殺戰の現場を撮影せし寫眞をそのまゝ木刻にしたもの。

獨軍最後の大攻撃

G ②

てオーストリヤと和を結んだ。

ロシヤの單獨講和で聯合側はその有力な一員を失つたが米國の參戰はその損失を償うて餘りがあつた。

同盟軍の進攻と敗退　ロシヤ革命の結果、同盟側は東方戰場の兵を割いて西に向け、オーストリヤ軍は一九一七年の秋イタリヤの東北部を占領し、ドイツ軍は、翌年三月から西部戰線で數回の大攻撃をなし、英佛軍の戰線を突破しようとしたが、聯合軍はその總司令官フォッシュ元帥(Foch)の下に結束して攻勢に轉じたので、一九一八年の夏からドイツ軍は總崩れとなつて退却した。その頃イタリヤ軍もオーストリヤ軍を破つて、被占領地を奪ひ還した。

獨軍の退却

フォッシュ元帥

ブルガリヤトルコの同盟脱退

獨墺兩國の革命　その頃バルカン方面では、ブルガリヤ、トルコ共に敗れて相次いで聯合國に降つた。獨墺兩國では、物資は缺乏し、兵員は不足し、勝利の望はなくなつて、和戰の論爭が起り、民主主義が次第

同盟兩國の革命

ホンガリヤの獨立

に勢を得て、革命騷動が各地に起つた。ドイツ皇帝ウィリヤム二世オーストリヤ皇帝チャールス一世は共に已むを得ず、その位を退いて、ホーエンツォレルン(Hohenzollern)、ハプスブルグ(Hapsburg)の兩帝室一時に仆れ、兩國は共和國となり、ホンガリヤはこの機に乘じて、オーストリヤから獨立した。

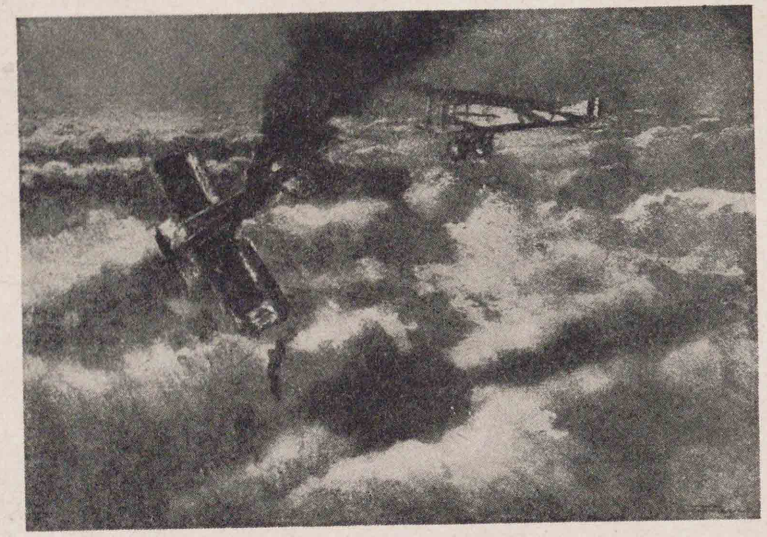
3　大戰の終局

大戰の規模と損害の絶大

大戰の終局　獨墺兩國は革命前から米國大統領ウィルソンを介して休戰を計つてゐたが、一九一八年十一月に至つてそれが成立し、兩國は聯合側と降服的休戰を約し、世界大戰はここに終局した。

ウィルソン

四ケ年半に亙つた世界大戰は同盟側の四國に對し聯合諸國は次第に增して二十八ケ國に及び、前者の兵數約二千二百萬に對し、後者は約四千三百萬を出し、死者は双方合せて約一千萬、負傷者はこれに倍し、直接の軍費だけでも約五千億圓の巨額に達し、その規模の大なること眞に空前



空中戰の實況

對獨ヴェルサイユ條約

その他の諸條約

ドイツの失勢

で、その災禍も亦比類なきものであつた。

講和條約の成立 休戰條約が成立したので、英、佛、米、日、伊の五大國以下、聯合側の諸國は委員をパリに派遣して、大戰の善後策を講じ、佛國首相クレマンソーを議長として、先づドイツに對する講和條約を議決し、一九一九年六月ヴェルサイユ(Versailles)にドイツの全權委員を招いて、これに調印させ、ついでオーストリヤ及びブルガリヤとの條約、翌年は又トルコとの條約も調印された。但しトルコとの條約は批准されない内に、近東の形變が一變した(二〇五頁參照)。

クレマンソー

歐洲形勢の激變 世界大戰は全世界の形勢を一變させたが、中でも、歐洲の變化は最も甚だしかつた。ドイツはヴェルサイユ條約により(1)エルザス、ロートリンゲンをフランスに還付し、(2)ベルギー、ポーランド、デンマルクに地を割き、(3)海外植民地の全部を奪はれ、(4)

55; 56–57, (1) (4) (5) (6)

空中戰の實況

世界大戰に於て航空機が始めて實戰に登場して、大活躍したので、戰法が劃期的變化を來したのは勿論であるが、空中戰の刹那を寫眞に收めたものはない。然るにフランス飛行畫家アンリー＝ファレ(Lieut. Henri Farre)の作品が多數にあつて、優に寫眞に代り、或點では寫眞以上貴重な唯一の史料となつてゐる。ファレは本來軍人ではなく、フランス美術學校の出身で、大戰前には毎年パリのサロンに出品して金牌を得た。大戰勃發の時は、南米ブエノス＝アイレスで名士の肖像を描いて居たが、祖國の急を聞いて、急いで歸國し、從軍を志願し、飛行將校となつた。後陸軍博物館の委囑により、戰線全部に亙つて爆擊に參加し、空中戰の實際を空中にて目擊し、其の印象と專門的知識によつて數十幅の油繪を作つた。これは同僚飛行將校の批評を受くるものだから、細部まで寸分違はず描いたのみならず、地上に見られぬ空中の光線の効果に特別の意を用ひた寫眞以上の寫實畫である。上の圖は大戰中フランス第一の空中戰殊勳者グリュイメール大尉が雲海の上で敵機を擊落した瞬間。グリュイメール(Guynemer)は空戰に出動約八百回、敵機を擊落したのが七十四臺に及んだといはれるが、遂にドイツ戰線の上空で名譽の戰死を遂げた。此の圖は彼の第四十五回目の勝利を描いたもの。敵機の操縱將校が射られ、機は旋回しつつ墜落する。その旋回の力で機の搭乘者は振り出されて、雲の中に落ちて行く。下圖は一九一六年五月ヴェルダン戰線、ミューズ河畔の高地上空にフランスの飛行機が亂れ飛んで導火管を落し、擊留せるドイツの氣球を燒き壞しつつある光景である。

巨額の賠償金を課せられ、(5)軍備は甚だしく制限されて、一時國力全く疲弊した。戰前から分裂傾向の著しかつたオーストリヤは、四分五裂して、俄に小國となり、トルコは殆んど歐洲の領土を失ひ、そのアジヤ部もまた領內異民族の獨立のためその過半を失つた。

諸小國の新興　米國大統領ウィルソンは、大戰中から民族自決主義を唱へ、戰前まで大國に抑へられた小民族の獨立を援けたが、同盟側の敗戰とロシヤ革命後の紛亂とで、それが實現し、諸小國が一時に新興した。

即ちポーランドが十八世紀の分割前の地域內に再興し、チェコスロヴァキヤ(Czechoslovakia)が舊オーストリヤ領の北部に、又その南部にはユーゴスラヴィヤ(Yugoslavia)が舊ロシア領の西北部にはフィンランド(Finland)、エストニヤ(Esthonia)、ラトヴィヤ(Latvia)、リトワニヤ(Lithuania)の諸國が新に興つた。舊アジヤ・トルコ內ではシリヤは佛國のパレスチナは英國の委任統治に歸し、メソポタミヤには英國保護の下にイラク(Iraq)國が新にできた。

國際聯盟の成立　世界大戰のため、交戰國は勿論、中立國も非常の慘

56–57, (1)　58–59, (1) (2) (4)

世界の恒久平和の希求

國際聯盟の成立

禍を蒙つたので、世界恒久平和の希求が各國に起つた。それでパリ講和會議に、米國大統領ウィルソンが、平和維持の機關として國際聯盟の設置を提議したが、列國は賛同して、それが成立し、世界の獨立國が多く之に加入した。

然し米國は上院の反對のため、今日まで之に加入せず、ロシヤも長い間之に加入しなかつた。聯盟は大戰後歐洲内の問題の解決に多少貢獻したが、のち世界の平和を維持する力のないことは次第に明らかになつた。

第二章　大戰後の世界情勢

1　大戰後列國の情勢

一般の情勢　大戰に死力を竭した列國は、敗戰國は勿論、勝つた方も

國際聯盟の生誕*

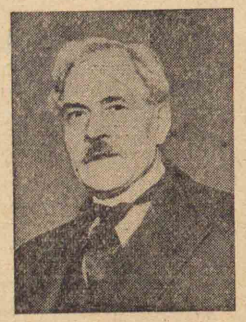
*一九二〇年一月オランダ、アムステルダム新聞の漫畫。大戰の慘禍を痛感した世界の諸國民が當時如何に聯盟の成立を歡迎し、これに嘱望したかが分る。

失業者と勞働問題

最初の勞働黨内閣

自治領の自主的傾向

財政困難に陥り、戰時中の婦人の活動や、中立國の工業の發展等のため、戰後は戰前の平時産業復興と共に、夥だしき失業者を生じ、從つて勞働問題から大罷業が起り、また戰時中植民地の力を借つた國では、戰後には、その自治要求等に惱み、各國とも混亂の情態が續いた。



マクドナルド

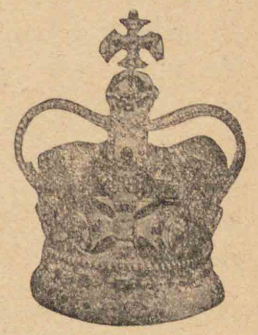
英國の情勢　英國は舊ドイツ植民地の大部分を委任統治の形に於てその勢力範圍に收めたけれども、尚ほ財政困難を免れず、又選擧權の普及から、勞働黨が俄に勢を增し、一九二四年同黨首領マクドナルド(Macdonald)は遂に英國最初の勞働黨内閣を組織した。その後彼は一九二九年再び勞働黨内閣を組織したが、英國の財政は益〻惡化したので、一九三一年後擧國一致内閣となし、窮境を打開するに努めた。他方英國の海外自治領は戰後自主的傾向が著しくなつた。英國は一九二六年の帝國會議で之を本國と均等の地位に進めたので、英國は皇帝を結合の紐帶とする聯邦と化した。

アイルランド獨立運動

インドの自治運動

英佛の對獨方針

大英帝國結合の象徴*



アイルランドは大戰前議會を通過した自治法(Irish Home Rule)に滿足せず、獨立を宣言して反抗し、政府は多年之が鎮壓に苦しんだ後遂に自治領としてアイルランド自由國(Irish Free State)を認めたけれども、尚ほ之に滿足せず、分離獨立の運動が今に存する。エジプトはその名義上の獨立に甘んじないで、完全な獨立を望んでゐる。インドの國民運動も年々强硬となつたので、英國はインド代表と屢〻圓卓會議を開いたが協定に達せず、志士ガンヂー(Ghandi)等を逮捕して之に彈壓を加へた。

ポアンカレ

佛國の情勢 フランスは大戰中ドイツから受けた損害最も大で、戰後ドイツの復興と復讐を恐れ、飽くまで之を抑へようとした。これは或程度ドイツを復興させ、フランスと均勢を保たせようとする英國の方針と相容れないため、戰後の問題の解決を紛糾させた。フランスも戰後財政困難甚しかつたが、一九二六年ポアンカレ(Poincaré)の下に擧國一致內閣ができて通貨を安定し、やつと財政の危機を脫し、飽くまでヴェルサイユ條約を厲行して、ドイツの復興を妨げんとし、獨佛の對抗が歐洲外交の樞軸をなした。

*英國皇帝が戴冠式に用ひられるエドワード懺悔王の冠。

佛國財政の危機

ケマル＝パシャ

ローザンヌ條約

ケマル＝パシャ

トルコの更生 トルコは一九二〇年の和約で殆んど聯合國の共同管理下に置かれようとしたが、ケマル・パシャ(Kemal Pasha)(今はケマル＝アタチュルク(Ki. Ataturk)と改名)は之を憤つて、アンゴラ(Angora)に新政府を建て、之に反抗して侵入したギリシヤ軍を小アジヤから驅逐し、海峽中立地帶を守備した聯合軍を脅やかして、ギリシヤと休戰した(一九二二)。翌年ケマルはローザンヌ(Lausanne)會議で、新講和條約を結び、トルコの自主權を確立し、ついで皇帝を廢して共和政治を建て、みづから大統領となり、盛に西歐の文物を輸入して國家を更生させた。

ドイツの賠償問題 ドイツは聯合諸國の課した賠償金(千三百二十億金マルク)を一

佛白のルール占領

ドイツの惡性インフレ

ロカルノ會議

賠償問題と聯合國*

旦受諾したが、支拂不能を主張して之を履行しなかつたので、佛國は一九二三年ベルギーと共にドイツ工業の中心地ルール(Ruhr)地方を占領したが、ドイツの消極的抵抗のため、佛國は目的を達せず、他方ドイツの產業も沈退し、紙幣の大暴落を來した。列國はドイツを救濟し賠償問題を解決するため、米國のドーズ(Dawes)案によつて支拂法を緩和し、ルール占領軍も撤退した。翌一九二五年西歐諸國はロカルノ(Locarno)に會議を開き、安全保障及び仲裁條約を結び、ドイツも國際聯盟に加入することとなり、かくて國際の不安情態は一時改善されたが、賠償問題はその後も尙ほ殘り、一九二九年のヤング(Young)案で、ドイツの負擔は一層輕減されたが、それでも支拂は停滯した。

ロシヤの情勢　ロシヤは革命後、一時崩壞の情態にあつたが、モスコ

*佛國は單獨にてドイツに打擊を加へ、賠償金を取らんとし、他の聯合諸國は之を牽制す。聯合側の不一致を諷するドイツの漫畫。一九二一年夏。

ソ聯の建設

スターリンの獨裁政治

產業五ケ年計畫

ーのソヴィエト(Soviet)政府は、一切の反對派を抑へ、全ロシヤ內の諸國を聯合して、一九二二年ソヴィエト社會主義共和國聯邦(Union of Soviet Socialist Republics)を建設した。然しその政權の基礎は共產黨にあつて、その政策は容易に成功しなかつたので、之を緩和して、新經濟政策を行ふに及び、黨內に內訌が起り、一國社會主義に反對したトロツキー派は放逐され、スターリン一派の獨裁政治が確立した(一九二七—二八年)。列强は初めソヴィエト政府を忌み、之を承認しなかつたが、英國の第一次勞働黨內閣が先づ之を認めた後、他の諸國も次第に之を認むるに至つた。一九二八年以來ソヴィエト政府は、『五ケ年計畫』を立て、驚くべき規模で國內產業の發展を圖り、軍備を充實した。

スターリン

イタリヤの情勢　イタリヤは大戰により、オーストリヤより地を得、

落下傘部隊の空中輸送*

*ソ聯は落下傘部隊の空中輸送に先驅をつけた。

ムッソリーニの獨裁政治

大戰後の繁榮

國際上の指導的地位

ムッソリーニ*

戰後ユーゴスラヴィヤとフィウメ(Fiume)を爭つて、遂に之を取つたが、國内は大戰の打擊から、一時共産主義が勢を得て危機に瀕した。その時ファシスト(Fascist)黨の首領ムッソリーニ(Mussolini)が起つて之を撲滅し、一九二二年政權を得て、國家主義の獨裁政治を行ひ、國内の秩序を整へ、軍備を盛にし、國威の發揚を圖つた。

米國の躍進　米國は大戰の禍を受くること少く、却つてこれによつて巨利を得、戰後歐洲諸國が疲弊したのに反して繁榮を極め、大戰前の債務國から一躍して大債權國となり、金融の中心は英國から米國に移り、歐洲諸國は財政上米國の鼻息を窺ふやうになつた。さうして戰時の民主黨の大統領ウィルソンの後には、共和黨から相次いで大統領が出て、益々國力を世界に伸ばし、重大な國際問題には米國がいつも指導的地位を占むるやうになつた。

軍縮問題　大戰後、列國の財政窮迫から、軍備縮小の輿論が起つたの

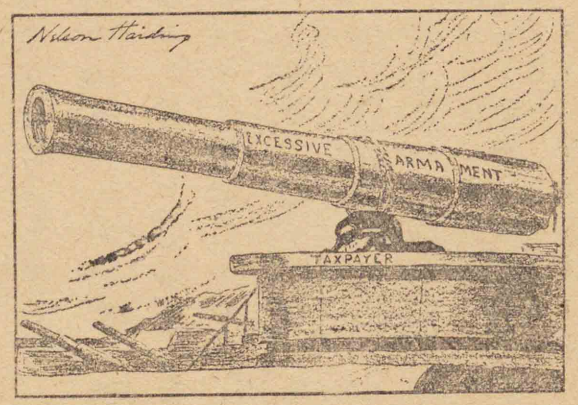
*初め社會主義者だつた世界大戰後、一變して國家主義者となり、後ムッソリーニ一黨を率ひて政權を得、今日に及んでゐる。

ワシントン會議

ジュネーヴ會議

第一回ロンドン會議

『人間の砲架』



一九二一年春米國の漫畫。租稅負擔者が巨砲に壓せられて流血せるを示す。當時米國の輿論が軍備擴張に反對せし一斑が分る。

に乘じ、米國大統領ハーディング(Harding)の提議で、英、米、日、佛、伊の五大國と外四國(支那、オランダ、ベルギー、ポルトガル)の委員が一九二一年ワシントンで軍備縮小會議を開き、その結果、(1)五大國は十ケ年間主力艦を一定の率に限ることとし、(2)日米英佛間に四國協約を結んで、太平洋の平和を圖り、(3)日英同盟は廢棄し、(4)支那に關して九國條約を結び、支那の主權と領土とを尊重することを約した(一九二二)。その後また米國大統領クーリッヂ(Coolidge)が提議して、一九二七年第二回軍縮會議がジュネーヴで開かれ、日英米三國が海軍補助艦の制限を議したが、英米二國の主張が合はず、會議は決裂した。一九三〇年米國大統領フーヴァー(Hoover)は英國首相マクドナルドと議して、ロンドンに第三回海軍會議を開き、日英米間に五ケ年を期限とする新協

聯盟の一般軍縮會議

第二回ロンドン會議

不戰條約

滿洲事變

定が辛うじて成立した。他方國際聯盟は、多年準備の後、一九三二年陸海空軍の一般軍縮會議をジュネーヴで開いたが、何の實績も擧がらなかつた。その後我國は自衛の必要上ワシントン條約廢棄を通告し、一九三五年末の第二回ロンドン會議に公正妥當な提案をしたが、英米兩國は之に應じないので、我國は會議から脱退し、一九三七年海軍無條約第一年を迎へた。

ワシントン會議は各國の海軍縮小と共に日英同盟を廢棄し、我國の海上權を拘束し、又その大陸發展を防ぐのが、英米の主な動機であつた。

一九二七年のジュネーヴ會議が決裂した後、米國の國務卿ケロッグ(Kellogg)は、佛國の外務大臣ブリヤン(Briand)と協議し、次いで列國に勸誘した結果、一九二八年パリに於て不戰條約が調印され、世界各國は殆んど皆これに加入した。米國が國際聯盟に入らないで、しかも國際的に活躍し、會議毎に自國を有利に導くことは最も注目に價する。

日支と歐米　極東では支那の不法な排日が次第に甚だしくなつて、一九三一年九月遂に滿洲事變が起つた。日本の軍隊は忽ち支那東

滿洲國の建設

國際聯盟と米國の態度

日本の聯盟脱退

北軍閥の大軍を擊破して、自衛を完了した。そのために多年滿洲で暴政を行ひ人民を苦しめた張學良の勢力が覆へつたので、滿洲人はこの機會に、獨立滿洲國を建てた(一九三二年三月)。事變の勃發した時、支那は日本の自衛行動を侵略行動として國際聯盟に訴へた。聯盟は日本の正當な主張を容れず、聯盟外の米國も聯盟と同じ態度で、屢〻日本に抗議した。然し日本は正を踏んで畏れず、一九三二年九月斷然滿洲國を承認して決意を世界に示したが、聯盟は益〻日本を抑壓しようとしたので、日本は遂に聯盟脱退を通告した(一九三三年三月)。

滿洲事變が勃發すると、支那本部の排日も亦急に猛烈になり、一九三二年、上海事變が起り、同地在留邦人は危險に陷つたが我が陸海軍は奮鬪して支那兵を擊退し秩序を回復した。

2　最近の國際政局

ドイツの復興　ドイツでは革命後、社會民主黨のエーベルト(Ebert)が大統

ヴェルサイユ條約の重壓

ヒットラーの獨裁

ドイツの聯盟脱退

ドイツ復興の意氣

ヒットラー

領に選ばれ、その後ヒンデンブルグが衆望を負うて選ばれた。その間國民は奮勵して、國力の復興に努めたけれども、ヴェルサイユ條約の重壓に惱み、小黨分立して相抗爭したが、この重壓から脱せんとする氣運が次第に高まり、ヒットラー(Hitler)の率ゆる國民社會黨(ナチ Nationalsocialist Party)が漸次勢を得、一九三三年ヒットラーは遂に獨裁權を握り、内、ユダヤ人を排斥して民族主義を徹底させ、又共産黨を撲滅し、外、軍備平等權を主張して、遂に聯盟から脱退した。この強硬政策に驚き、佛國はそれまで相容れなかつたロシヤと接近し、一九三四年末には兩國間に

ドイツは早晩彼等復興民族をしてヴェルサイユ條約の墓石を抑壓する

ドイツ包圍陣

ドイツ再軍備の『爆彈宣言』

協定が成立し、又チェッコスロヴァキヤも之に加はつて、ドイツ包圍の策が成つた。尚ほ佛國はドイツ、イタリヤの接近を慮かり、一九三五年の初イタリヤとローマ協定を結んで之を防いだ。ヒットラーはやがてヴェルサイユ條約の軍事條項を無視して、徴兵制度を復活し、陸軍を大擴張し、海空軍をも充實すべき『爆彈宣言』を以て世界を驚かした。佛國は英伊兩國と共にこれに抗議したが、ドイツは之を一蹴して著々軍備を強化した。

聯盟にすがるエチオピヤ*

イタリヤのエチオピヤ征服

イタリヤは早くからアフリカのエチオピヤ(Ethiopia)に著眼し、十九世紀中から既に勢力をそこに扶植したが、一九三五年の初、歐洲の形勢が自國に向つて好轉したので、同年夏から續々大軍を送つて征服を圖つた。英國は地中海上權保全とエチオピヤに對する權益の關係とから、佛國と

*オランダの漫畫。背後に睨んでゐるのはムッソリーニ。

イタリヤのエチオピヤ併合

獨佛伊三國の關係

ヒットラーの第二『爆彈宣言』

共に百方イタリヤの開戰を阻止しようとしたが、イタリヤは遂に開戰し、現代武器の威力を以て、エチオピヤ軍を撃破し、遂に之を滅ぼして自國に併せた(一九三六年五月)。是より先、國際聯盟はイタリヤを侵略國として經濟斷交をしたが徹底せず、又聯盟國たるエチオピヤの滅亡を救ふこともできず、益々その無力を暴露した。

獨伊の接近　エチオピヤ遠征で、英伊の關係は甚だ惡化した。佛國は英國と提携しつつ、イタリヤとも離れないで、ドイツに備へようとして、三國の關係は甚だ微妙になつた。偶々一九三六年の春佛國とロシヤとの相互援助條約が成立したのを理由に、ヒットラーは第二『爆彈宣告』を發し、ライン河右岸の非武裝地帶に軍隊を進駐させ、再びヴェルサイユ條約を破つた。

ドイツの國防軍

イタリヤは英佛に對抗するため、次

獨伊の接近

獨墺協定

コミンテルンの人民戰線結成

フランス、イスパニヤ人民戰線の勝利

第にドイツに近づいたが、ドイツがオーストリヤを併せて餘りに強大となるのを恐れ、ドナウ諸國(オーストリヤ、ホンガリヤ等)を擁護し、同年夏ムッソリーニは斡旋して、ドイツをしてオーストリヤの獨立を約する協定を結ばせ、その後獨伊は益々接近して、その勢力は中歐を縱斷するに至つた。

イスパニヤの內亂　モスコーのコミンテルン(國際共產黨)は、世界赤化の容易でないのを見、一九三五年來各國に於て一切の反ファッショ黨を糾合せる人民戰線(Popular front)を作らせ、先づ右翼派を破つて、次第に赤化の目的を達する方針を採つたが、それがフランス、イスパニヤに於て成效し、一九三六年春の選擧で、兩國とも人民戰線派が大勝し、內閣を組織した。イスパニヤでは大戰後獨裁政治を經て、一九三一年の革命に王政が覆つて共和國となり、その後左右兩派の軋轢が絕えなかつたが、一九三六年人民戰線の新內閣が、極

イスパニヤ政府軍の義勇兵

イスパニヤ内亂の原因
諸國の干渉

度に右翼を壓迫するに及んで、將軍フランコ Francisco Franco が反政府軍を提げて起ち、遂に内亂が起つた(七月)。これは左右兩派の死活戰で、戰禍は悽慘を極め、獨伊兩國は反政府軍を交戰團體と認めて之を援け、ロシヤは政府軍を援け、之が爲めに兩派の勝敗は容易に決しなかつたが、のち反政府軍の勢漸く振ひ、二ヶ年半の後、フランコ派の勝利で終局した(一九三九年二月)。

米國財界の大恐慌

世界的不景氣　大戰後に於ける歐洲諸國の財政は益〻窮迫したが、一九二九年に至り、それまで獨り繁榮を誇つた米國にも大恐慌が起り、不景氣は世界的となつた。米國大統領フーヴァー Hoover は一九三一年ドイツ賠償金と、各國の對米戰債とに對し、一年間のモラトリウムを行つたけれども、救濟の效がなく、事實上ドイツ賠償金は打切りの形となつた。その後米國經濟界の不況は益〻甚だしく、一九三三年の春その極に達したので、新大統領ローズヴェルト Franklin Roosevelt は産業復興法(N.R.A.)を行うて、金融産業の復活、景氣の回復を圖つた。それでと

米國の産業復興法

ローズヴェルト

各國の經濟的國家主義

もかくも當面の破滅が救はれたので、ローズヴェルトは一九三六年壓倒的多數で大統領に再選された。然し列國は自己の經濟的苦境を乘り切るため、經濟的國家主義を執り、互に關稅を高めて外國品の輸入を防ぎ、自給自足を圖るので世界貿易は全體的に萎縮した。その間に唯〻我國の商品だけは、その良質廉價のため、盛に世界に進出したので、各國は百方之を阻止せんと努めた。

日本商品の世界的進出

國際關係の惡化

國際情勢と軍擴競爭　經濟的國家主義や、民主主義と獨裁主義の對立、コミンテルンの世界赤化運動等は、極度に國際關係を惡化し、各國はその財政困難の中にも、戰爭の破裂を慮つて、互に軍備の擴張を競ふやうになつた。然し世界大戰の災禍に鑑みなるべく戰爭を避けて、しかも情勢が自國に有利に展開するのが各國の望む所で、軍備の強化と同時に、平和工作も亦常に進め

軍擴と平和工作

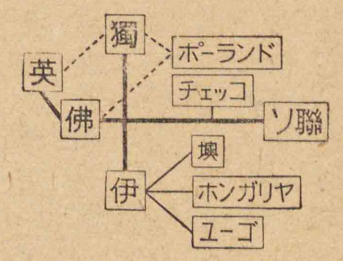
軍擴競走*

*左より右へ。ドイツ。フランス。イギリス。イタリヤ。出發の合圖をするのは『死』。オランダの漫畫。

歐洲外交の二大樞軸

諸小國の態度

られた。その間獨伊を聯ぬる獨裁國團に對する英佛並に佛ソ（ソヴィエト聯邦）の聯繫は、歐洲外交の二大樞軸であつた。その間に介在する諸小國は、或はその一方に附き、或は不即不離の態度で安全を圖り、國際關係は複雜多岐を極め、情勢の險惡は世界大戰の直前を想はせたが、一九三九年九月に至り、ドイツのポーランドに對する開戰を機とし、英佛はドイツに宣戰し、遂に歐洲の大戰を見るに至つた。



國際主義

民族主義

3 最近文化の趨勢

國際主義と民族主義　世界大戰を契機として、世界を安定した平和鄕とする理想は裏切られた。固より國際聯盟を始め、國際仲裁裁判所等、國際紛爭平和解決の機關による國際主義の運動も、一時可なりの勢を示したが、同時にこれと背馳する民族主義は、大戰の刺戟によつ

民主主義の發展

獨裁政治の流行

統制的傾向

大戰後機械の進歩

て却つて旺盛となり、各國共に利己的態度を棄てないので、眞の國際協調は望まれず、國家相互の猜疑反目のため、世界は尙ほ不安に滿ちて居たが、世界大戰後僅に二十年、再び歐洲の大戰を見るに至つた。

民主主義と獨裁主義　世界大戰以來、民主主義が大に發展した。大戰前の專制政治が廢止され、國民の參政權が擴大し、普通選擧によつて、無產者の勢力が政治上に伸び、婦人の選擧權も認められた國が少くない。然しかかる政治の民主化が社會を混亂に陷れ、そのために、大戰後の國力回復が困難で、國際競爭上危險を來す恐があつたので、獨裁政治の流行を見るに至つた。獨裁政治は國家の力を以て、政治經濟を始め、一切の國民生活を統制する。これによつて著しく國力を回復した國もあるので、最近民主主義國家に於ても統制的傾向が著しくなつた。

機械文化時代　十九世紀以來科學の進歩が生んだ各種の機械は、遺憾なく世界大戰に應用され、戰時中にも交戰國は種々の新兵器を發

石油と代用液體燃料

準戰時下の世界

明した。戰後各國は益々科學の研究と機械の改良とを競ひ、その進歩は實に目覺しい。中でも航空機や無線通信法の發達は驚くべく、各國競うて航空路を拓いて短時間翔破の記錄を作り、ラヂオの進歩は全世界を通話區域に取り入れ、テレヴィジョン(Television)も亦既に實用に供せらるるに至つた。從つて人類の生活樣式も亦日々變化しつつあり、今後どこまで科學文化が進歩するかは、到底豫測を許さない。現代の機械特に交通機關は、その動力としての石油の需要を激增し、そのため石油戰が各方面に行はれ、又石油の乏しい國では、石炭の液化や代用液體燃料の研究が大に進んだ。

東洋文化の回顧　物質文化の驚くべき發達に比して、精神文化の力が之に伴はないのが現代世界の情勢である。從つて國內的には、各種主義思想が對立し、勞資相反目抗爭して、社會の紛擾が絕えず、國際的には經濟的政治的利害の衝突が、一歩を進めて武力的衝突となるべき危機を孕み、世界は既に準戰時下に在ると謂はれるに至つた。

東洋文化の研究

かゝる行詰りの狀態は、現代の西洋文化では打開し難いとの考が、西洋識者の間に現はれ、東洋古來の精神文化を以て、現狀を打開し、破局を濟はうとするに至つたのは注目に値する。

近年西洋に於ける東洋研究の勃興は著しいものがある。歐米の大學で日本學、支那學講座の設置された處が少なくなく、又我國の學者を招いて聽講することも屢〻行はれる。

結語　西洋史上より觀たる我國の使命と國民の覺悟

西洋文化の長所と缺陷　我等は西洋文化發展の路を辿り、西洋諸國興亡の跡を觀、世界現勢の由來を尋ねた。

太古東方諸國に源を發した西洋文化が、ギリシヤ人によつて大成され、その本質が決定し、それがローマに傳はつて廣く傳播して後、中古衰頽の時代はあつたが、近古の初から復活して更に大に發展し、啓蒙期に於ける自然科學の勃興と、これに基づける物質文明の進歩は、

西洋文化の長所

近世西洋文化の特長といふべきである。白人は科學文化を武器として世界の大部分を征服し、世界的覇權を確立するに至つた。

西洋文化の缺點

西洋文化が人類生活の向上進歩に貢獻する所の多かつたことは否めないが、人類全體の福祉がこれによつて增進したのではなく、白人の隆昌繁榮の蔭には、彼等の抑壓と搾取とに泣く、數に於て彼等に倍する被征服民族があることは見遁せない。

更に白人自體について見るも、古來屈指に遑ないほど多くの國家が盛衰興亡してゐるが、白人の歷史は一面鬪爭の歷史に他ならぬ。現代の列强の間にも鬪爭が絶えず、世界大戰後僅に二十餘年で、今再び死鬪を繰返してゐる。これは西洋文化が人類に眞の平和をもたらす力のなきことを證明する。西洋文化の缺陷の中で、これがその最も主なるものである。

我國の使命

古今東西、世界のあらゆる國家、あらゆる民族が、いづれも盛衰興亡の運命を免かれなかつた中に、唯、我國のみが肇國以來今日に至るまで數千年の久しきに亙り、未だ一度も異民族の支配を受けたことなく、常に皇室を中心大宗と仰いで家族的國家生活を續け、特に明治以後異常なる發展を遂げて世界を驚かした。かゝる國家の存在は世界史上唯一無二の大事實である。この大事實から我等は我國の存立意義とその使命の重大なことを確信する。

世界唯一の大事實

我國民精神

輝やかしい我國史は、世界無比の我國體に基づける國民精神から發する國民努力の結晶である。我國民精神は自主的で、しかも包容的である。あらゆる外國文化を取り、之を融合して日本化するのが特色である。明治以後の驚異的發展も、西洋文化の攝取に負ふ所固より大である。然し我國民はこれがために我國の本質を毀つくることなく、能く今日の隆運を開いた。されば我國の使命が、東西文化の長を採つて、之を融合せる新文化を創造し、之を貫くに皇國の道を以てし、以て益々我國運を盛にし、以て世界の眞の平和と、全人類の福祉とに貢獻するに在ることは疑ふの餘地がない。

我國の使命

我國民の覺悟　今や支那事變勃發以來既に滿四年を過ぎ、曠古の大軍を大陸に出して聖戰に從事し、武威を八紘に輝やかし、これを契機として、大東亞共榮圈確立の大業を起すに至つた。

他方歐洲の天地も情勢日に險惡の度を加へ、多年のヴェルサイユ體制下の抑壓から俄然擡頭し、イタリヤと樞軸を結成して、民主主義國家群と對立せるドイツのポーランド侵入から遂に大戰の勃發となり、歐大陸の過半は、忽ちドイツの勢力に服した。

この東西の戰亂は密接不離の關係を有し、援蔣諸國は事變當初から、皇國に對して敵性を示し、特に日獨伊三國同盟成立以來、皇國と英米との關係は日に惡化し、最近獨ソ開戰するに及んで、英米ソ蔣相結んで、對日包圍の勢を示すに至り、皇國は未曾有の重大時局に直面してゐる。

此の間に於て皇國がその大使命の遂行に邁進する限り、自己優越權を確保せんとする白人强國との摩擦を來すことは必然で、我等は

使命遂行の困難

我國民の覺悟

今日に幾倍する難局に立つべきを覺悟せねばならぬ。然し我國當面の目標たる東亞共榮圈の確立こそ、世界に眞の平和をもたらすべき我國使命遂行の第一歩である。我等はこの際祖先の偉業と最近の發展とに鑑みて、我國の能力を信じ、いかなる難艱をも克服して、愈〻皇運を扶翼し奉り、使命の完遂に邁進する決意を固むべきである。

——終——

昭和十二年七月十五日印刷
昭和十二年七月二十日發行
昭和十三年一月十日訂正再版印刷
昭和十三年一月十四日訂正再版發行
昭和十三年一月十五日訂正三版印刷
昭和十六年九月二十日訂正三版發行
昭和十八年七月二日訂正四版印刷
昭和十八年七月六日訂正四版發行

西洋史教程　中學校用
定價　金壹圓參拾壹錢

著作者　村川堅固

發行者　東京市神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者　山本慶治

印刷者　東京市牛込區榎町七番地
大日本印刷株式會社榎町工場
(東東一)平野喜代松

發行所　東京市神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
日本出版會會員番號一一七五二二

(略名)　實文村川西史

日本出版配給株式會社　元配給
東京市神田區淡路町二ノ九

修中三

広島大学図書
2000073477